
魔王《オレ》が勇者で勇者が魔王！？

神裂 龍霞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王が勇者で勇者が魔王！？
オレ

【Nコード】

N 6 3 4 9 P

【作者名】

神裂 龍霞

【あらすじ】

俺こと浅田弥月はある日不思議な剣、というか棒を拾いました。ゲームしか能のないこの俺のもとに現れたのはなんと神サマ！

「君、飛ばされるから準備しといたほうがいいよ？」

変な光に導かれて行き着いた先はなんと異世界。

俺を召喚した神官たちからお願いがあるとのこと。

そんなの聞かなくてもわかってるぜ！打倒魔王！勇者な俺にまかせとけて！

「我々の魔王になってください！」

おうよ！魔王ね、魔王…って魔王…！？

チートな力を手に入れて魔王になった俺は勇者を倒すために旅に出た…ってなんかおかしくないか！？

魔王な主人公の無敵な能力が炸裂する、SFアクションですっ！…
コメディーじゃないですSFアク…分かりました、じゃあファンタジーで…でもちよつとくらいSF要素があるハズ…ハイ、もうコメディーでいいです。

1 回目『何これ、理解不能デス』（前書き）

頑張って書くんではよろしくお願いします！

1回目『何これ、理解不能デス』

「おねがいします！」

勇者のあんちきしょーをぶっ飛ばしてください！」

そう言われたのはいつのことだっただろうか、遠い昔のような気さえる。

俺は今勇者を倒すため、魔王として旅をしている。

それは遡ること2週間前……

俺の名は浅田^{あさだ}弥月^{みつぎ}。

現在は小中学生の憧れ、高校2年生をやっている。

身長は173・8cm、体重は56・7kgと痩せ形。
容姿はいたって平凡。鼻が高いのだけが自慢である。

後で書くゲーマーということ以外特に特徴などはない。

部活もやってないし、成績だって普通。

ま、そんな感じの平凡な高校生なのだ。

季節は夏。

今年は梅雨がなかったためいつからか夏なのかよくわからないのだが……

さらに言ってしまうえばなんか最近涼しいし。夏じゃないんじゃないかね？
まあそれは置いて、と。

取り合えず夏。

7月の下旬夏休み2日前だ。

……そこ、最初から7月って書けよとか言わない！

……ゴホン。

話がそれたな。

そう。夏休み二日前に俺の日常は音を立てて崩れ去った。
文字通り音を立てて。

その日もいつもと同じように学校へと向かう。

テキストに授業をやり過ぎ、ホームルームは友だちと今度出るRPGについて熱く語っていた。

「RPGでこのクオリティはやばいぜ！なあ、弥月も買っただろ？
どっちが早くクリアできるか勝負しようぜ」

コイツは岸浩平^{きしこうへい}。中学の時からゲーム仲間だ。

「ああ、いいぜ。ま、俺はそのあとでトライアウトも買っつもりだから2日で勝負がつくなあ？」

俺は極度のゲーマーで知られている。

無論、それを自負しているし、誇りにも思っている。

プレイ総数はジャンル総合、ハード総合で軽く1万本を超えという、ものすごい記録を持っている。

廃人クラスのプレイヤーのくせに学校を休んだことはなく、成績も可もなく不可もなく。ということではみなからはかなり謎の存在と

されているようだ。

「いくらお前がすごいからって2日はないだろ、俺だって6日はかかるぞ？データ量がパネエからな。きつとものすごいシナリオだぜ」
チツチツチと俺は指を振る。

「甘いな浩平。確かにデータ量はほかのと比べもんじゃない。が、だ。このグラフィックだぜ？オリジナルシステムとかそーゆーのも考えたらシナリオ自体はおそらくFfより少し長いだけだな」

浩平は呆れたような顔をして

「お前……そこまで解るのか。やっぱりすげえな」

……なんかほめられてない気がするのには気のせいだろうか？うん、きつと気のせいだ。

帰り道、俺はいつもと違う道から帰ることにした。
その途中、

「ん？なんだこれ？」

漆黒に輝く棒を拾った。

長さは1mちょいくらい。
重さは8キロくらいだろうか？

今まで道に落ちているモノを拾ったことはなかったのだが……
どうして持って帰ろうと思ったのかは覚えていない。
気がつけば、拾っていた。そんな感じた。

……このとき思いとどまっていればこんなことにはならなかったんだ。

おい、そこ！落ちてる棒を持って帰るとかバカじゃねえの？とか言うなよ！

俺だってなんで持って帰ったかわかんねえんだよつ！
ただ、あのときはこれを持って帰らなきゃって、そう思ったんだ。

風呂を上がって部屋に戻ると例の棒が光っていた。
… あゝなんかヤバいの持って帰ってきちゃったよ、俺。

ムクムクと後悔が湧いてくる。
そしてその棒がひととき大きな光を放った。
次の瞬間その光の向こうには、見知らぬ女の人がいた。

「んゝこの剣拾ったの君？」

「は、はい。そうですけど……」

「そつかあゝ。ね、君さあもうすぐ飛ばされるから準備しといた方がいいよ？」

その人はのほろんとした口調でなんかとんでもないことを口走った。

「飛ばされる？どこに？つかアンタ誰だよっ！」

わお。ナイスノリ突っ込み、俺。

しかしこれ、なあ？不法侵入じゃん。

「ん、私？私はねえ、神サマなんだよっ！びっくりした？そいでね、君が飛ばさ「ちよつと待ったアアアア！」……なに？」

コイツ今何つつた？カミサマ？なにそれ、おいしいの？

…無理、理解不能。ダメだ、やっぱ警察呼ぼう。

「ねえ、信じてないでしょ？」

自称カミサマは話の腰を折られて不機嫌なようだ。

「いや、だって、ねえ？それこそホイホイ信じてたらこの世界生きていけませんよ」

「じゃあ今君が考えてること当てたげる。んゝとねえ、警察。でしよっ？」

……不法侵入者がいたらフツー呼ぶっつの。

「不法侵入者じゃないし、神だし。」

うっさいだまれ。

人の頭ん中読むなや。

……ん？頭ん中？

バーカバーカ神様のバーカ。おたんこなすのアンポンタン！

「……怒るよ？」

「うおっ！……マジ？」

「さっきからそう言ってんじゃん！信じないなら君の隠してるHな本リビングに置いてきてやる！」

H A H A H A、そんな簡単に見つかるわけ……ってその引き出しの裏は見ちゃダメええええええ！

「……結構過激なの好きなんだね」

「うつさい黙れ。しばくぞ、おい」

ベッドに腰掛ける一人の少年と女性。
二人とも顔が真っ赤だ。

「あ、いーのかな？神サマにそーいうこと言って」

そう言ってまた引き出しに手をかけ……

「わあーた！信じる！信じるからヤメテええええ！……で？その神サマがなににきたんだよ？」

まったく自称神のくせに小さいヤツである。

ふとコイツが現れたワケを聞いていないのに気付き、俺は一番気になっ
ていたことを尋ねた。

「ああ、そうそう。君飛ばされるから。準備しといたほうがいいよ」

……飛ばされる？え、何、俺クビになんの！？

いやいや、俺仕事してねえし。……親父か！？

「いやいや、異世界に、だよ」

……夢だな。寝よう。

俺はそのままふかふかのベッドへダイブし、夢の世界へ……

「うおい！聞けよ！聞いて下さい、お願いします。聞いてくれない
とこっちが困るんですってえ！」

「うつせえな。夢なんだろう？お疲れ様でしたあ！」

半ば投げやりに返す。

しかし相手も引き下がらない。

「夢じゃないよ！頼むから聞くだけでいい。サービスするから」

ほう、面白い。

少し遊ぶか。

「……サービスってなんだよ。神様がそんなことしていいのか？ん
？」

「なっ、ばっかじゃないの！？どんなサービス想像してんのよ！」

ふ、神め。そのありきたりすぎる反応。

甘い、甘すぎるぜエエエ！

「え、なにが？俺は特定の個人に対してそういったひいき的なこと
していいのかって聞いてんの。あれ、どうした？顔真っ赤だぞ。熱
でも出たか？」

うん、俺の勝ちだな。

こらえようとしても口元がゆがんでしまう。

「アンタ、どこまでサイテーなのよ……」

「おっしやつてる意味がわかりませんなあ？んで？何を聞きゃあい
んだ？」

俺が素直に話を聞こうとすると話の切り替わりについてこれていな
いらしく、自称神は硬直状態へと陥った。

「えっ！？あ、いやあ、その、勇者召喚の陣が敷かれたらその標的
にお知らせしなきゃいけないんだよねー。伝えられないと私が…っ
て私のことはいいんだよ！早くしなきゃ！時間がないの！」

ノリツツコ……

マジでコイツ神様か？

いや、断言できるね。んなわけあるかあ！

「そいでね、あと10分で飛ぶから。ヨロピク。あ、あと向こうに
はモンスターとかいるからこの剣忘れないでねー。じゃ、ガンバ！

たまに様子見に行くからね」

そう言つて自称神は光とともに消えた。

……え、なに？状況が理解できないんですケド。
つてかサービス云々はどこいったんだよ！

どうする、どうする。信じるのか？いやでも、そしたら俺アホみたいじゃね？

……………。

つて悩んでたら後5分しかねえじゃん！

俺はとりあえず大急ぎで着替えて必要そうなものをリュックに詰め込んだ。

不思議なことにリュックの中はめっさ広くて、いやこれ多分四次元化してんぞ。

これがさっき言つてたサービスか？

すると予告時間ぴったりに突然ベッドの上に光の円が現れた。
そこに穴があいてつて……吸い込まれる！？

そしてそのまま落ちていき、ドスン。

俺はケツで着地した。

いつつ……危うく剣を忘れるところだったぜ。
つてここはどこだああああ！？

状況を確認しようとしたその時、不意に横から声を掛けられた。

「あ、あのお」

話しかけてきた男——顔が確認できないからもしかしたら男声の女かもしれないが——は黒いマントに身を包み、顔もフードを深く被っているせいで確認できないと、かーなーり怪しい恰好をしていた。

「あん？誰だデメー」

「ひつ、すみません！えつと貴方様をお呼びしたものです。」

なぜにそんなビビるし。

しかし……

「さっきのはほんとだったのか」

ハアとため息をついて俺は立ち上がる。

周りを見回すとここは神殿のようで、俺の脚元には、俺の部屋に現れたのと同じ魔方陣が書かれていた。

いやまあ、あの一瞬で魔法陣が分かるほど俺すごくないから。憶測だけどね？雰囲気だよ、雰囲気。

俺の周りには話しかけて来た男と同じようにフードを深くかぶったマントの奴らが何人かいた。

なにこれ、怪しい宗教かなんかの儀式っスか。

「で、なんで俺を呼んだ？」

「えーとですね、この世界には昔「昔話に興味はない」しかしこの話は「帰るぞ？」……はい、実はお願いがありまして」

男は妙にびくびくしている。
つてか反応からして、帰ろうと思えば帰れるのか？

「その、お願いというのは……えと、お名前は？」「浅田弥月」はい、私はドーガルフと申します。どうぞお気軽にドーガとお呼び「さつさとしろ」は、はい！えとミツキ様に私たちを悪の手から救ってほしいのです」

……来た、こてこてのRPG展開。
そーいや神サマも勇者とか何とか言ってたっけ？

ま、面白そうだしやってみるか。

「俺特殊能力とかないんだけど大丈夫？」

俺はフツートの高校生だ。

魔法も使えないし剣を振ったこともない。

そんなんでも立ち向かえるようなら、いくらでもやってやろうじやねえか！

……学校もサボれるしな！

「はい、その辺は大丈夫です。では、引き受けてくださるんですか！？」

「ああ、どんとこい！」

よし！打倒魔王！ぶっ飛ばしてやろうじやねえか！燃えてきたあ！

「では改めてお願いします。アサダミツキ様。どうか我々の魔王になって下さい！」

……へ？いま何だった？何これ、逆RPGですかっ！？

1 回目『何これ、理解不能デス』（後書き）

これからどうするとか全然考えてないンスケド、頑張って書くんでき
よろしくお願いします。感想まっけます！

2回目『いざ、チートの間へ!』

拝啓岸浩平様

今度RPG攻略勝負しようって言ってたけどさ、なんか俺、先に始めちゃいました。

しかも全く違う話。さらには生身で。

笑ってくるぜ!

「アサダミツキ様。どうか我々の魔王になってください!」

……へ?今何だった?何これ、逆RPGですかっ!?

「あゝ、その、勇者じゃなくて?」

「はい!魔王です!」

……いやあ、そんな眼で見つめられてもねえ?

俺世界とかんな大層なもんいらんし、そんな悪いことする気もないよ?

「えと、これ勇者召喚の魔方陣だっ て聞いたんだけど?」

「聞いた?はて、誰に?」今はカンケーないだろ「え、あ、はい。えと本来は勇者を呼ぶための魔方陣なんです が、今は勇者を倒してもらいたいの で魔王様になっていただき たいのです」

んゝ意味わからん。

勇者を倒してほしい？

なぜ？

俺は疑問に思ったことをそのまま聞いた。

思ったことは口に出せ！我が担任の口癖である。それで思ったことをそのまま言つて何度怒られたことが……

「はい、かつてこの大陸は魔王様が支配されていました。厳しい法で縛られてはいたもののそれぞれの種族が互いに協力して暮らしていました。ただ、人間だけはそれに不満を抱いていました。我々が世界を支配すべきだ、と。そして開発されたのがこの勇者の陣です。人間は勇者にホラを吹き込んで魔王様を倒すよう命じました。勇者はそれに従い、次々と魔族、獣人^{ビースト}族、そのほかの種族を倒して行きました。魔王様は最初こそ勇者を説得しようとしていましたが、それも失敗に終わり、魔王様さえも倒されてしまいました。そして勇者は大陸の中心にあった魔王城を占拠しその周りに新たな国を建国しました。ここから暗黒の時代が始まったのです。勇者は人間以外の種族は認めようとせず、どんどんと弾圧していきました。勇者は我々人間以外の種族にとつて最凶の存在なのです。ですからどうかおねがいします！勇者のあんちきしょーをぶっ飛ばしてください！」

……なにしてんの、勇者！

いや、でも魔物側から見たらどのRPGもそうなのかな？

え、てか何？この人たち人間じゃないの？

え、え、つか勇者倒すとか不可能だろ！？RPGつてのは勇者が倒されないように出来てんだよっ！

「……あのさ、ひとつ聞いてもいいかな？」

「何でしょう？」

「なんで俺なの？誰でもよかったんじゃないの？」

これは先ほどから気になっていた。

あの自称神が標的ターゲットと言っていたからには俺を狙って、この魔法陣を組んだんだろう。なぜなのか、それが知りたかった。

「まず、我々は魔王様の遺品であるその剣を目印として異世界に飛ばしました。その剣は魔王様と同等、もしくはそれ以上のチカラがないと触れることすらできないからです。ですので、その剣に最初に触れたミツキ様をお願いしたいのです」

はい、まあなんとなく分かったんだけどね。

でも俺そんなチカラなんて持ってないんですケド！？
てかさつきチカラなんてなくても大丈夫って言わなかった？

「俺そんなチカラないんだけど……？」

「あ、いえこの場合の力というのは潜在能力と言いますか、いかに魔王の技を使えるかということです」

「ってことはあれかい？その技とやらを習得するための修行とかするん？」

「あー、いえ魔王様の残した遺品「闇の魔道書」ダークケリモワールがあるのでそれを使えば一発です」

それを使えば勇者に対抗するための力が手に入るってか。

なんかセコいな。

ん？てかそれなら……

「アンタらがそのダークグリモワールってのを使えばよかったんじゃないの？」

「それが表紙が重くて開かないのです。それに魔術無効化の印が張られているので我々にはどうにも……」

表紙が重くて開かない本ってどんな本だよ、おい。

ってか本だよな？^{グリモワール}魔道書だもんな。

俺に開けられるのか？

というか本を使うって表現おかしくね？

ま、いつか。

つかこんなにとん拍子に進んじやっていいのか？

「とりあえず今日はお休みください。魔道書のもとには明日案内しますので」

そういつて俺は寢室へと案内された。

いやあー今日一日でいろんなことがあつたなあー
ベッドに腰掛けながらそんなことを考える。

「ほんとにねえ」

「うお！？」

いつの間にか横には自称神が座っていた。

「自称じゃないし。マジモンだし」

うっさい。

とりあえず手始めに俺は、質問してみることにした。

「あのさ、俺魔法も使えないし、剣とか振ったことないんだけど？」

「あゝその辺は大丈夫。魔法は前任の遺品があるし、こっちと向こうの世界じゃ何かと違うから。ま、君の場合はそれだけじゃないんだけど……」

「違うって？ あんま違和感を感じないんだが……」

「まあ実際に走ってみればわかるよ。向こうは何かと息苦しいからね。向こうに比べたらこっちはずいぶん楽だと思うよ。まあだから、こっちの人たちは君からすればちよつとひ弱かな？」

なるほど、だからあいつらはあの剣が運べなかったのか。

「へーじゃあ俺この世界だとスゲー超人ってわけか」

「うん。でもトレーニングしておかないとどんどんこっちよりの身体になっちゃうからね。気をつけて。ま、今日は疲れたでしょ？ もう休みな。じゃ、またね」

そう言っただけで自称神はまた光とともに消えた。
なんだか軽いヤツである。

でもまあこれで一応は基礎情報がそろったかな？

まだ調べなきゃいけないことも多いけど。

とりあえず今日はもう寝よう……

疲れたあゝ！

俺は布団をかぶると一瞬で深い眠りについた。

窓から差し込む光で目が覚めた。

んゝ服のまま寝ちゃったから汗かいちゃったな。
とりあえず着替えるか。

俺は向こうの世界から持ってきた服に着替えた。

グレーのタンクトップに鼠色のパーカー、そして黒いレザージャケット。あ、そうそう。グレーと鼠色はちがうんだぜ？グレーの方が黒っぽい。まあ俺個人の意見だが。ってかどうでもいいか。

これならまだいい。下は黒のジーンズに黒いベルト……なんで黒いのばっか持ってきたのかな？

部屋にあったパンを食べ——この世界のモノだからホントにパンかどうかは知らんが——しばらくぼーっとしているとドーガがやってきた。

昨日は気付かなかったがドーガの頭には小さな角があった。

……やっぱ人間じゃないんだなあゝと思った。

「では、「闇の魔道書」のもとへご案内します」

ついた先は昨日のとよく似た部屋で、やはり昨日と同じ人たちがいた。

「これがその魔道書です」

そう言つてドーガが指したのは一冊の黒い本だった。
表紙には何かよくわからない言葉で何かが書いてあった。

「これ、読んでいいの？」

「はい、どうぞ」

俺は表紙に手をかけた。

……期待の視線が痛い！

そつと開けてみる。

……確かにこれは重いな。
次の瞬間。

一瞬だった。

この本自体は全ページ白紙だったが、表紙をめくつた瞬間風が吹いたように、一人でにパラパラとめくれていった。

ページがめくれる度、頭の中に映像が流れ込んでくる。
おそらくその映像自体がこの本に込められた知識のすべてなのだろう。

数分後、ボタンという音と共に本は閉じた。

あいにく早すぎてどんな映像が流れていたのかは理解できなかったが、能力はキチンとインストールされているようだ。さっきまで理解できなかった表紙の文字が読めるようになっていた。

「どうですか？」

ドーガが不安そうな顔で見てる。

「うん、大丈夫。魔法の使い方とかも全部わかるよ」

そう、この魔道書にはとんでもない量の魔法が記されていた。

しかし、一無限の○製《アンリミテッド・ブレ。ド・ワークス》や、
かめは○波、幻想殺○^{イマ・ンブレイカー}って……パクリ過ぎだろ、前魔王！

ってかどっから情報誌入れてきたんだ？

「これ、チートだろ……」

ドーガは一瞬驚いたような顔をしてこう言った。

「そんなことまで記されていたのですか？あ、いえ、この部屋の名がチートの間というのですよ」

うん、苦笑しかできなかった。

「ではミツキ様、我々は一足先に城に戻っております。ここから北に5キロほど行ったところにあるので。では、またあとで！」

次の瞬間全員まとめて消えていた。

……え、おいてけぼりかよ！

ま、いつかチート能力もゲットしたし。

俺が剣を手に取るとただの棒だった剣は俺の理想とする形のショートソードになった。

ふゝん、これ龍児りゅうじって言うんだ。

どんだけ人間チックな名前つけてんだ、おい。

俺は早速、覚えてたの魔術を使って神殿の壁をぶち破った。
うん、すさまじい破壊力。

この能力……チカラ 神チート的トラベリング反則技と名付けよう。

え、なぜかって？反則のチートとトラベリングをかけてるんだよ。
略してチートラだな。……なんか軽トラとかチーかみたいだな。
改めて自分のネーミングセンスのなさに落ち込むよ……

こうして俺は魔王への第一歩を踏み出したのだった。

2回目『いざ、チートの間へ!』（後書き）

はい!!

頑張りました!

まだまだ登場キャラはたった4人（しかもそのうち2人はたまにか出てこねえ）ですが!次回からはお城突入ということで一気に主要キャラが増える予定です。

あくまで予定なんだからねっ!

つてかヒロイン出さないと…

とりあえずこれからもどうかお付き合いください!

3 回目『初めてのお仲間はオオカミですっ!』

あゝども、浅田弥月です。

現在に至る経緯を簡単に説明しますと、
剣（棒）拾う↓自称神現れる↓落ちる↓本読む↓魔王になりました。
ってな感じ。

……はあ、自分でも理解できねー！

ま、悩んでもしょうがないし、とりあえず城に向かうかな。

神殿の壁をぶち破り、外へ出た俺は魔力の集まっているところを目
指して歩き出した。

……なんで魔力感じとれんの、俺！？

チートラを使ってもよかったのだが、まあまずはどんな些細な情報
でも収集するべきだろ。と思った俺は徒歩で城に向かうことにした。

20分くらい歩いただろうか？

……力の加減がわからねえ！

エンカウント数6回。

俺の歩いてきた道はクレーターと化していた。

だが分かったこともある。

この剣は俺の意思に反応して変化するようだ。
バトル中にどっかのソルジャーが使っていそうなものっそい長い刀

とか、どっかの王様（少女）が使ってる勝利が約束されそうな剣と
かになった。

チートラの方もだ。

前魔王が作ったヤツ以外にも、俺が使いたい能力は出せるようだ。
超電〇砲とかね。

つか幻想殺〇があってなんで超電〇砲はないんだよ！

しかし……… どんどん魔王化が進んでる気がする。
もう人じゃねえな。

「ハア、どこで間違ったかな？ やっぱあれかな、龍児かな、うん」

そんなことをぼやきながら歩いているとまたもエンカウント！

「オオカミのようなモンスターが現れた！」

「モンスターの攻撃！ しかし不思議な守りで当たらない！」

さすが防御魔法「シールド」物理攻撃は完全に当たらないな。

「モンスターの攻撃！ ミツキはコーラを落とした！」

……… せっかく作ったのに。

この世界でも飲めると思ってた超嬉しかったのに。
しかもちよつとズボンにかかったし。

だからさ、仕方ないよね？

「ミツキの一方的な猛攻撃が始まった！」

「なあ、手前え今何したか分かってるよな……？」

オオカミは何を感じたのかしっぽを丸めて後ずさりを始めた。

パチン。俺が指を鳴らすとオオカミの周りの土が盛り上がり、あっという間に檻となった。

「俺の楽しみを邪魔したんだ。これくらいは罰を受けてもらわなきゃなあ？音地獄」
サウンドハウス

俺は今思いついた拷問魔法をかけた。

これは嫌な音——たとえば黒板をひっかく音——が延々と頭の中で鳴り響く魔法だ。ちなみに長鼻が空の上で使った奴にヒントを得た。

オオカミは目をギュツとつぶって踏ん張っていた。

……やりすぎかな？

ちよつと冷静になった俺は魔法を止めてやった。

「いいか、俺の楽しみを邪魔する奴は何人たりとも許さんからな。うし、分かったらおうちに帰りな」

オオカミが動く気配はない。

「ん、動けないのか？まあ、そのうち治るだろ。じゃな」

俺はオオカミを置いて歩き出した。

5分後

……なんかコイツずつとついてくるんですけど？

「動けないんじゃないかったのか？つか後ろから襲ってきたりしたらそれこそ命が無くなるぞ？」

それでもついてくる。

ん？どうしたもんかねえ？

あ、そういえば魔王の魔法の中に動物と会話できる魔法があったはず。

あつたあつた。

トランスレイション
「翻訳」

「なんでついてくるんだ？もしかしてさっき俺が言ったこと理解できんかった？」

「いや、それはわかったが……ステルス、まさか俺の事忘れてるのか？」

ん？初対面だよな？

てかステルスって誰だよ。前魔王の名前はドルフだしなあ？

「いや、俺の名前は浅田弥月なんだが？」

「……なるほど。ならば、せめて傍に置いてはくれないか？」

今の妙に悲しそうな顔……どうしたんだ？

まあ、それは置いていて、と。

「んーでもなあ？街とか連れてつたらビビられるんじゃない？そもそも俺の命を狙つての事じゃねえだろうな？」

「なっ、んなわけない！なんなら攻撃制限でも付ければいい。それと、俺は結構名の通った種族だから、別に驚かれはすれ、畏れられはしないと思うぞ？」

オオカミは少し自慢げに言う。

しかし攻撃制限という手があったか。

「いや、いいよ。俺そついう信頼関係の薄い付き合い嫌いだし。その代り裏切つたら許さんぞ？」

オオカミの顔がパアッと明るくなる。

……オオカミつてこんなに表情豊かだったのか。

「了解！俺はアルフレッド＝スパーク。アルと呼んでくれ」

「ん、よろしくアル」

こうしてこの世界で初めての仲間ができた。
オオカミだけだね。

神殿を出てから約1時間後。

「んゝでかいな」

俺は城の前に立っていた。

大きさとしては……そうだな。大仙古墳5個分くらい？

……それにしてもおどろおどろしいな。

とか思いつつポケーっとなっていると中からドーガが出てきた。

「ようこそおいで下さいました。おや、そのフェンリルは？」

ふーんこいつフェンリルっていう種族なんだ。

アルは俺の横で警戒態勢に入っていた。

「いやいやアルよ、ここが目的地だから。敵とこんな風に喋らんし。ん？ああ、紹介するよ、ドーガ。コイツ俺の友達。なんか成り行きでそうなった」

ドーガはものつそいビックリしたようだった。

「モンスターを手名付けるのが得意な獣人族でさえ熟練のタイマーがやっとな契約できるかどうかのフェンリルを……やはりあなたはすごいんですね！」

え？なに？こいつそんなにすごいのか？

つてか契約はしてないんだが。

「使い魔がフェンリルとは、これでより一層魔王らしくなりましたね！」

「ははは、魔王ねえ……」

「それでは国王様のもとへご案内します」

ドーガは城の中へと歩き出す。
俺とアルもそれについていく。

「わしはこの国を治めておる。シーザスじゃ。よろしく」

国王怖！

悪魔だよ。まるっきり悪魔だよ！
サタン降臨だよ！

「ハハハ、そう緊張せずともよい。取って食ったりはせんよ。この
姿見は役に立つこともあるのだがな、こういつとき不便でならん。
話はドーガから聞いておるな？」

「は、はい」

「うむ、ではわしからは特に言うこともないな。まだ人命にかかわ
るような被害は出ておらんからそう焦らずともよいぞ。この城の中
でゆつくりと修行でもしておれ」

うん、ただのいいおっさんじゃあないか。
ちょっと悪いことしちゃったかな。

人、いや魔族は見かけで判断しちやだめだな。

「ではもう下がってよいぞ」

「あ、はい」

「ではお部屋まで案内します」

ドーガに案内されて着いた部屋はとんでもなく広かった。
それこそライブができるくらいの。

ほかに部屋はないのか、と聞いてみたところ……

「ないことはないですが、ここよりさらに広くなりますよ？一人用のお部屋というものはあまり作らないモノで……」

だとさ。

いや、無理だろ。

おちつかねーよ！

つてなわけで俺は城下町にある小さなアパートの一室を借りることにした。

ドーガは「こんなところに次期魔王様を……」とか言っただ家さんに圧力をかけていたので魔法で黙らせた。

俺がこの城に来た時は裏側から来たようで、だから城に一直線だったんだとか。

つてかここに来るまでにジロジロみられたのはおそらく服装と髪、目の色のせいだろう。

みんな中世ヨーロッパの貴族みたいな格好をして黒髪茶眼な奴なんて一人もいなかった。

きっと彼らには俺がとても不思議な生物に見えたのだろう。

しかし魔族っているんな髪と目の色してるんだな。肌は皆俺と同じ色だった。

持ってきた荷物を片づけているといつの間にかあたりは暗くなっていた。

んゝ今日も疲れたな、寝よう。

俺はパジャマに着替えてベッドに着いた。

ちなみにベッドはアパートの裏に落ちてた木材で作ったものだ。

チートラ万能だな、おい。

だんだんと意識が遠くなっていく。

……お休み。

3 回目『初めてのお仲間はオオカミですっ!』（後書き）

ハイ。

キャラ全然増えませんでした。

アルは人じゃねえし、国王はおっさんだし、
で、でもまだ城に来て初日だし！

弥月も「明日は探検だな。」って言ってたから！
だから次回こそは……

つてか展開遅くてすいません。

取り合えずこれからもどうぞお付き合いください。
次回こそヒロインを……

ではまた次回！

4回目『ロリロリ少女と不死身総統登場!』（前書き）

ちょっと長いですが、はい。

4回目『ロリロリ少女と不死身総統登場!』

……窓から差し込む光で目が覚めた。

いつもと変わらない部屋。

いつもと変わらない朝に思えた。

だがそれも一瞬にして壊される。

「ミツキ様？起きていらつしやいますか？」

ドーガがドアの向こうから控えめな声で尋ねてくる。

「ああ、入っていいよ」

俺が短く「アロホモラ」と唱えると鍵はひとりでに開いた。

そう、これが俺の力。「チートラベリンゲ神的反則技」略してチートラだ。

なんかこうチーかまっぽいところがハズかしくもあり、結構気に入っていたりする。

……というのは置いて、と。

俺は一昨日変な棒を拾った。

そしたら自称神が現れて異世界に飛ばされた。

んでもって魔王になってくれと頼まれ、なんか了承しちゃってこのチート能力つけられて現在に至る、と。

いつもと同じ部屋に思えたのは、向こうの世界から家具の類は全部持ってきていたからで、よく見ると配置とかが少し違っている。

「ほう、これはまた……住みやすそうなお部屋ですな」

「どうも。んで、こんな朝っぱらからどうした？なんか用があったんだろ？」

するとドーガは何かを思い出したのかあわてて言った。

「朝っぱらじゃないです！もうお昼すぎですよ！？今日は体力テストがあるので城のグラウンドに来るようにとベリエル様が！」

「体力テスト？そっか、おっけおっけ。ちよっち待ってーな、すぐ準備すつから。あわてるなあわてるな」

しかしまあ……体力テストって、学校じゃないんだから。

俺はチートラ的能力で昨日と同じ服装に着替えた。

正確には着ていたパジャマを錬金術の要領で昨日の服と同じものに变化させたので変えてはいないけど。

「おお、便利ですなあ。っと、それより早く！」

「おう。で、ベリエルってだれよ？」

俺は走りながらドーガに尋ねた。

「はい、えとベリエル様は魔族軍の総統でございます。国のナンバー2といったところでしょうか？シーザ様が政治面トップ、ベリエル様が軍事面トップという感じですね」

……そっかあ、また敵ついおっさんなんだろうなあ。

「あ、そうそう。ドーガさ、別に俺に敬語使わなくていいよ？」
「ちのが新入りなんだから」

俺は前から気になっていたことを口にした。

するとドーガは恐れ多いとでもいうような顔で拒否ってきた。

まあ予想の範疇ではあったがな。

「俺さ、自分が気にしないところに気い使われつと逆に気疲れしちゃうんだよね。だからさ、な？」

ドーガはしかしそれは……とか言いつつもしつこい説得に最終的には頷いてくれたのだった。

「ところでさ、ドーガって何歳なの？」

「はい？そうですねえあまり気にしていなかったので正確には分かりませんが1070歳くらいかと」

……ハイ、ここでまた驚きの事実発覚う。

そっか。ま、そうだよな。魔族だもんな。

きつと魔族は長生きなんだよ、うん。

グラウンドに着くとなんか兵士っぽい人たちが整列して待っていた。

「遅いぞ貴様！俺はいくら次期魔王候補だからと言って容赦はせん！新入りのくせに遅刻とは大した自信だな？では罰、もとい小手調

べとしてこのトラックを……そうだな、5周。さ、始める」

一番前にいた隊長っぽい人にいきなり怒鳴られて俺は一瞬理解するのが遅れた。

と、隊長（仮）がそんな俺の様子に気づき追い打ちをかけてきた。

「どうした？もっと増やしてほしいのか？なんなら30周位にするか？」

兵士たちが一斉に笑う。

プツン、俺の中で何かが切れる音がした。

昔からバカにされるのが大嫌いだった。

いや、あれかな。ゆとり世代の『キレる子供達』みたいな。

「一周大体800mぐらいか。いいぜ、やってやろうじゃねえか」

兵士たちは一瞬驚いたような顔をしたが、またすぐに笑い出した。

隊長（仮）だけは笑うのを辞めて、「ほう、ならばお手並み拝見と行こうか」的な視線を投げてきた。

俺は軽く準備運動をして、一気に駆け出した。

俺は1周を5秒弱で走っていたらしく30周を2分ちょいで走り終えた。

そして息ひとつ乱してないもんだからみんなビックリ。

いや、俺も思いつきり走ったのは初めてだからビックリだよ。まさか此処まで違うとは。

でも隊長（仮）だけはポーカークフェイスのままだった。
……面白くねえな。

「少しはやるようだな。俺は軍総統のベリエルだ。まあ、よろしく」

「へ！？」

思わず素っ頓狂な声が出てしまった。

だって敵ついおっさんだとばかり思っていたベリエルはすごい若くて（23位だろうか？）金髪に碧眼というものっそいイケメンだったのだ。

つてか隊長じゃ無かったよ。もっと偉かった……

「どうした？俺は何かおかしいことでも言ったか？」

「あ……いや、ちょっと想像してたより若かったもんだから。俺は浅田弥月だよらしく」

ベリエルが右手を差し出してきたので握手に応じる。
こっちにも握手の文化があるんだな。

俺とベリエルの右手が触れ合いそうになった瞬間、ベルエル目がギラついた気がしたから、俺はつい反射的に手を引いていた。

「ほう、俺のこれを見破るとは………いい。気に入った！うちの部隊に入れ、な！」

俺が手を引いた瞬間、ベリエルが左手に隠し持っていたナイフが、さっきまで俺の右手のあった場所の空を裂いた。
冷や汗ダラダラである。

「な！……じゃねえ！何しとくれとんのじゃボケエ！！！」

俺はベリエルに回し蹴りをお見舞いしてやった。

しかし、ベリエルは数mほどぶっ飛んだだけで、光の速さで復活し、戻ってきた。

「この破壊力！ますます気に入ったぞ、ミツキ！」

……不死身かテメエは。

結構おもつきし蹴ったつもりなだけだなあ……

そんな二人のやり取りの外で、周りの兵士たちは啞然としてた。

あれをかわすなんてとか、おいおいずりーよとか言ってるあたり全員あれは喰らったのだろう。

みんなして右手の傷を擦っていた。

いや、まあ新参者が総統に対してこんな碎けた態度をとるのは色々とマズイし、兵士諸君が焦るのも分かるのだが。

当の本人は知らん顔で俺にテストの内容を伝えてくる。

しかしまあコイツもヒジョーに親しみやすいキャラだ。

最初のキャラは何だったんだろうな？幻覚か？

反復横とびだとか、魔法の威力を測る装置とかでいろいろやって、結局テストは2時間くらいかった。

ひとつ終わるたびにいろいろ言ってくるベリエルはまあウザかった。まあ毎回ぶん殴って黙らせたのだが。

何度もベリエルに自分の軍に入らないか、と誘われたのだが、そういうめんどくさいのは御免だ、という少し残念そうにしていた。

まあ、そのあと申し込まれた手合わせに今度ならいいと告げると、もう大はしゃぎで、落ち着かせるのにまた一苦労だった。

なんかこの2時間でずいぶん印象が変わったな……

最初はヤなやつかと思っていたが、うん、結構いいやつみたいだ。てかガキっぽい。すごく。

いろいろやって結構疲れたし、俺は部屋に戻ることにした。

ベリエルは俺の部屋に遊びに来ようとしたのだが部下に仕事をしろと引きずられていき、渋々戻って行った。

……それでいいのか？ 総統。

「ん……っ」

どうやら寝てしまったらしい。

ドーガがくれた時計を見ると、時刻は4時過ぎだった。

ん、なんかあたりが騒がしいな？

俺は原因を調査するべく町へと繰り出すことにした。

人込みをかき分けて一番前に出る。

この人たちは大通りの脇に集まっているようで、そこらへんの話し

声からするとパレードか何かが始まるらしい。

俺は隣にいた少女に詳しい話を聞くことにした。

「ねえ、なんかはじまんの？これ」

女の子はこちらを向くと、ビックリした顔になり、悲鳴をあげそうになって手で口を押さえてた。

まあ、いきなり話しかけたこっちが悪いんだ、うん。

「す……すみません。人間の方を見るのは初めてだったもので」

女の子はちゃんと謝ってくれた。

どうやらこの世界の極悪人間だと思われたらしい。

「あ、いやいいよ、別に気にしてないし」

うん、強がりです。

こんなかわいい娘に顔見ただけで悲鳴あげられそうになるとか……理由はわかってつけど、死にてえ。

「ほんとにすみません。あ、私ミズハと申します。えっとなんでしたっけ？」

ミズハちゃんは身長が150cmないかな？ってくらいで、赤みがあったピンクの髪は肩にかかるくらいのショートヘア。小さな唇と大きな目がとてもかわいらしいロリフェイスで……って何考えてんだ、俺！？

でも雪のように白い肌はとってもやわらかそうで……やめんかコラ！俺はロリコンでも、美少女評論家でもねえっつの！！

あ、もしかして神サマの悪戯か？

「あの、どうかしましたか？」

内なる自分との戦いを繰り広げていた俺は、周りからみるとただの変態だったようで、俺とミズ八ちゃんの周りにはちょっとした空間ができていた。

「あ、ごめんごめん。えっと、この人ばかりは何かなって」

「あ、これですか？私もちよっと通りかかったただけなのでよくわからないんですけど、お話を聞く限りでは、なんか次期魔王候補の方のお披露目なんだとか」

ミズ八ちゃんは丁寧に教えてくれた。

……って「魔王候補」は俺だよな？なにそれ？聞いてないんですケド！？

「へ、へえーありがと。俺の名前は浅田弥月。よろしく。ああ、ちよっと急用思いついたわ、うん。それじゃ、ありがとねミズ八ちゃん！」

ミズ八ちゃんに別れを告げると俺は速攻で城へと走った。

「おい、ドーガ！どういことだよ！？」

俺は近くにいたドーガに怒鳴り散らす。

「ん？どうしたミツキ？」

お、敬語じゃなくなっ たな。

「ってそんなことはどうでもいいんだよ！あれ、町のあれどいうことだよ？聞いてねえぞ！」

ドーガはそんなことか、とでもいう風に肩をすくめた。

「何ってやっ と希望の光が現れたのだ。それを国民に見せずしてどうする？」

だめだよドーガ。

俺こっ いうのスゲー 苦手なんだから。

「俺はやらないからな」

「もう手配は済んでいるのだぞ？」

「知らん！」

ドーガが俺を説得しようと口を開く。

俺は人前に立つのが苦手だ。まして自分の知らない所でこんなお披露目会が企画されていたことにイラついていた。

だから、ドーガに説得されて頷いてしまっ 前に場外へ適当にテレポ ー トした。

気がつくともう夜だった。

どうやらレポートに失敗した俺は、空から降ってきて落ちた拍子に気絶してしまっただけらしい。

……元の世界だったら死んでたな、これ。

お披露目が中止になってざわついているだろう町に戻るのも少し抵抗があったので、しばらく森を探検することにした。

しばらく歩くと、さらに奥の方から聞き覚えのある声がした。

「や……やめて下さい！こ、こないで……ッ！」

誰の声だったかな？

ああ、昼間のミズ八ちゃんの声だ。

だがその声には緊張の色が含まれているようだった。

何か厄介事だと俺のセンサーが告げている。

何の作戦も対策もないが、俺は衝動的に声のした方へ走っていた。

事件現場の傍へたどり着き、茂みから様子を窺うと、数人の男がミズ八ちゃんを取り囲んでいた。

「……」

俺が茂みから飛び出そうとしたとき、ミズ八ちゃんの口が微かに動くのが見えた。

そして、次の瞬間男たちが消えた。

一瞬何があったのか分からなかった。

ただ、ミズハちゃんが何かをしたんだということは分かった。
なんつーか、その……すごく後悔した顔をしていたから。

「マバリア」

俺は念のため、魔法に対する防壁魔法を唱え、ゆつくりとミズハちゃんのもとへ向かった。

「ミズハちゃんっ」

明るい雰囲気話しかける。
だが効果は無かったらしい。自身の名前が呼ばれたのに気付くと、
小さな肩はビクリと震えた。

「な……なんで？なんであなたがここに……？」

彼女の頬は涙で濡れていた。

俺にはその涙の理由が分からない。

でもここで彼女を置いていけるほど、俺も薄情者ではない。

「こ……こないてください！」

近づこうとする俺を、彼女は俺を拒絶した。

その拒絶の言葉には強い意志が込められていて、俺は一瞬足を止めてしまった。

でも、ここで彼女を一人にしたら、何か……言葉では言い表せないけど、良くないことが起こりそうで、俺は歩を進めた。

「
φ ε ψ !」
来ないで

今までのとは違う言語だった。
前魔王の記憶から、今は失われた古代の言葉だということが分かった。

「なん……で？」

彼女は驚きと恐怖の混ざった顔をしていた。

「エンシェント 古代語…… ロスト 失われた魔法の類か。それがさっきの男達を消しちやうたヤツ？」

「見てたんですか……ならどうして？なんで私のところに来たんですか？」

こりゃあ、手強そうだ。

つかやっぱりあれは見間違いかじゃなかったのか。

「うゝん、可愛い女の子が泣いてたからほっとけなかった。ってのはキザすぎるかな？」

これはハズレだったらしい。
明らかにミズハちゃんが警戒しているのが分かる。

「まあホントの事言っと本当にミズハちゃんがやったのか疑問だったし。あ、でもほっとけなかったっていうのは嘘じゃないよ？」

「ホントに、それだけで危険を冒してきたんですか……？」

「いやあ、さっきので分かってもらえたとおり俺は普通じゃないんで、大丈夫かな？って。てか、ミズハちゃんがやったって確証が無

かったからだって言ってるじゃないか」

ミズハちゃんは理解できない。といった顔をしている。

「さっきのは、私がやったんです。本当ですよ。だから、ほっといて下さい！それとも衛兵にでも突き出しますか？」

最後の方はもう自嘲しながら、彼女は言った。

「残念ながら、ほっとけないなあ。俺は女の子が泣いてるのに知らん顔して立ち去れる程出来た人間じゃないんでね」

あくまで明るく。暗い雰囲気になってしまえばそれまでだ。

「なんで？どうして一度言葉を交わしただけの私にそこまでかまうの！？言葉一つであんなことができる怪物に！」

「君は、怪物なんかじゃ、ない。本物の怪物は、自分の、したことを悔いたり、しない。だから、自分の事をそんな風に言っんじゃないやねえ！」

正直、自分でも平静を保てていられているのか分からなかった。

突然の大声にビックリしたのだろうか。

ミズハちゃんの肩が先と同じようにビクッと震える。

しかし彼女はすぐに顔を上げ、俺の言葉に反論してくる。

「あなただって、ホントは私の事を化けものだって思ってるんですよ！？悪魔だって！周りのヒトは、みんな私の事をそう呼ぶもの！あなただって……」

最後の方、ミズハちゃんは涙をこぼしていた。
頬を伝うその涙と、とあるフリーズが俺の心に引っ掛かり、俺は冷静さを失った。

「誰だよ……誰がそんなことを！君は望んでそのチカラを使ったのか！？望んでチカラを手にしたのか！？許せねえ。許せねえよソイツら！」

気付けば、俺も泣いていた。
頭の中で嫌な思い出がよみがえる。

「どうして、あなたが泣くの……？」

俺は答えることができなかった。
彼女も何かを察したのだろう。それ以上は聞いてこなかった。

「話して、くれるかい？そのチカラの事。過去のこと。君の、力になりたい」

ミズハちゃんは少し渋っていたが、やがてポツリポツリと語りだしてくれた。

4回目『ロリロリ少女と不死身総統登場!』（後書き）

……はい。

急に進んで意味わからんです。

ただ!ただ!今回ヒロインがやっと登場ですよ!

え、アルはどこに行ったか?

そりゃもちろん……部屋で寝てます!

今回は弥月がかっこいいお話!…になる予定www

相変わらずな感じですが、これからもうぞお付き合ってください!

んでもってお気に入りに登録どーぞ?

評価もしてちょ!

じゃ、また次回〜!

5回目『アタックチャンスは突然に』（前書き）

今回は萌え要素が多いと思います。

そして一度書いたのを投稿しようとしたらエラーで全文消えちゃう
しで泣きそうでしたww

でも頑張ったんで、最後まで楽しんでいてね（はあと）

5 回目『アタックチャンスは突然に』

彼女はゆっくりと話始めた。

「私は幼いころに両親を亡くして、ずっと孤児院暮らしだったんです。この能力に気付いたのは9歳の時でした。その日は10歳以上の子達はみんな町に買い物に行つて、残った子たちの中で最年長だった私はみんなのお守をすることになったんです。そんな時に盗賊の人たちが入ってきて、私はみんなを守らなきゃって思いでいっぱい、気付いたらこの能力を使つて、盗賊の人たちは皆消えていました……。それから表面上では変わらない態度をとりつつも、みんなが私を避けるようになって、陰では化け物なんて言う風に呼ばれて。そんな生活に耐えられなくて12の時にこの国に来たんです。それからはこの能力の事を隠して、使わないよう気をつけてたんですけど……。使っちゃいました」

ミズハちゃんは自嘲するように言った。

辛かったんだな。

俺は話を聞いたただだが、その辛さが嫌というほど分かる。

化け物……か。

何処かで聞いたことあるフレーズだな。

『アンタのせいで雪佳は……！この化け物！私の前から消えてちよ
うだい……！』

『……俺に近づくな、悪魔がッ！』

今までの温厚な両親からは考えられないような憎しみのこもった声
と顔。

そんなつもり、俺には無かったんだ……ッ！

ワクワクしてる妹の顔。

楽しいパーティーになるハズだったのに……

足元には痛い、痛いと言く妹。

真っ赤に染まった白いワンピース。

膝が震えて足に力が入らない。

俺が膝について倒れた時、後ろから母さんの悲鳴が聞こえた。

すべてがあの日そのまま鮮明に俺の中に残っていた。

苦しかった。何より誰も俺の言葉を信じてくれなかったことが辛くて、心が折れてしまいそうだった。

だから、

『俺はお前を信じる。親御さんとは、いつかキチンと決着をつけなきゃならないが……。今はまだお前には重すぎる荷物だろ。俺の家に来い。俺がお前ごと一緒に背負ってやる』

そう言われた時、本当に心が救われた。

あの時浅田の親父が手を差し伸べてくれなかったら、俺は今ここにはいないだろう。

あの時親父に誓ったんだ。

いつか俺も親父みたいに人を救えるような人間になるって。

この子はきつと今、あのときの俺と同じ状態なんだ。
だから今度は俺が。

「あの、さ。その荷物、俺も一緒に背負わせてもらえないかな？ 今も辛くて、苦しくて、罪悪感に押しつぶされちゃいそうなんだろ？俺は何も知らないけどさ、きつと一人でいるよりはラクになる」

ミズハちゃんは困ったような、助けてほしいような、複雑な表情をしていた。

彼女の眼には涙が溜まっている。

泣くまいとするその健気な姿に一層萌え……いや守ってあげたくなくなる。

「助けて、欲しいです。でも、私いつまたこの能力を使っちゃうか……」

感情が高ぶってしまえばその危険性はある。

彼女が躊躇するのも当然だ。

だけど、

「大丈夫。俺はあいつらみたいに弱くないし。これでも一応魔王やらせてもらってますから」

イチかバチかの賭けだった。

あいつらのことを出すことでより一層傷つけてしまいかもしれない。だが、俺はその賭けに勝ったようだ。

「クスッ、面白いヒト……でもあなたが大丈夫でも、私が傍にいればきつと迷惑が……」

「だーから。そーいうの抜きにしてさ。それに不思議なチカラを持つてるのは何も君だけじゃない。多分俺のチカラでなんとかなる」

ミズハちゃんはうつむいてしばらく考え込んでいたが、ゆっくりと顔をあげ、「よろしくお願いします」と答えた。

ミズハちゃんの頬は薄い朱に染まっていた。

涙目で、頬を赤くしたロリ少女の上目づかいは反則だろおおおおお！

……つて、こんなときに何考えてんだ、俺！？

「じゃあ、早速その能力閉じ込めちゃおうと思うんだけど。いいかな？」

思考を中断させるため、話題をだす。

「お願いします」

俺は知識の海を探った。

きつとなんか特殊能力を封じるための術が……ないな。

どうしよう？

イマジンブレ。カー

幻想殺しじゃ能力そのものは消せないだろうし……あつ、オリジナルつくりやいいんだ。

グレイプニル
「神の鎖」

グレイプニルとは北欧神話に出てくる魔法の鎖。いやまあどっちかつつーと紐っぱいんだけど。

ま、気になる人はググるなりなんなりで調べるといいよ、うん。

この場合アンジェリカの指輪の方が良かったのだろうが……語呂的に、ね。

魔術なのに指輪ってどーよ？ってこと。

普通のグレイプニルじゃあ特殊能力は封じれないから、そこがチートラのすごいところなんだけどね。

俺が短くその術を唱えるとミズハちゃんの首のまわりに光が集まりだした。

その光はピンクの首輪へと変化した。

首輪って……

お、俺の趣味じゃな……くもないのか？

「わぁ、可愛い！」

ま、まあ本人が気に入ってくれたのならそれでいいか。似合ってるし。

「あの、さっきも聞きましたけど、どうしてさっき知り合ったばかりの私にこんなに良くしてくれるんですか？」

それはきっと自分と同じニオイを感じたから。でもそれ以上にやっぱり、

「ミズハちゃんが可愛いから、なんだろうなあ。」

「へっ!？」

あ、ミズハちゃんかゆでダコになった。
チクショウ、萌えちまうじゃねーか!!
でも、ホントのことだしなあ？

「俺も男だからね、そりや可愛い女の子が困ってれば助けたくなっちゃうのよ。普通は他人の問題なんて見ぬふりするんだろうけどさ、俺はあいにくそんなに器用じゃないから」

「あうあう……」

ミズハちゃんは耳まで真っ赤になりながらうつむいてしまった。

「あ、あの！本当に、ありがとうございました」

照れ隠しにか、ミズハちゃんは丁寧にお礼をしてくる。
でも俺はこういうのに慣れていないから、ちよっとくすぐったかった。

「いやいや、そんな大したことしてないし」

でもミズハちゃんは首を振った。

「そこでさらつとそういうこと言えるのはすごいことだと思います」
なんかこっちまで恥ずかしくなってきたぞ？

「よせやい、ミズハちゃんに言われるとなんか照れちゃうよ」

俺まで顔が赤くなっているのがわかる。

傍から見たら、俺達はさぞ奇妙な二人だったろう。

「あ、そろそろ家に戻んなきゃ。明日はきっと朝からドーガの説教だな。あゝ、ヤダヤダ」

「あ、そのことなんですけど……」

ミズハちゃんはなんか言いにくそうに切り出してきた。

「あ、おはようございますっ」

目が覚めると目の前にはミズハちゃんの顔があった。

「ん、おふぁひよう」

俺はあくびをしながら答える。

あ後の話とは、あの男達は強盗で、家が荒らされていて帰れるような状況ではないとのこと。

こっちじゃまだホテルとかも全然わからない俺はとりあえずうちに泊めることにした。

いや、下心とか無いから！マジで！

家に着くとミズハちゃんはすぐに椅子で寝てしまった。
疲れてたんだなあ。

ミズハちゃんをベッドに運び俺はソファで眠った。

……いや、運ぶときにどつか触ったり、ベッドに潜り込んだりしてないから。

そこまで飢えてないんで。

しかし、なんだかいいにおいがするな。

「あ、朝ごはんとか用意してみたんですけど……迷惑でしたか？」

ミズハちゃんの朝ごはん！！

それだけで俺の脳細胞は一気に活性化した。

「食べる！ミズハちゃんの朝ごはん！きゃっふあい！」

お？なんかミズハちゃんが照れている。

ヤバイ、超可愛い。

二人で並んで朝食をとる。

なんかスゲー幸せだ。

ミズハちゃんの飯はめっさうめえし。

なんかミズハちゃんを見てるとホントに癒される。

俺は昨日であつたばかりの少女を見つめて、今までずっと一緒にいたような感覚に陥っていた。

朝食が終わり二人でコーヒーを飲む。

ま、ミズハちゃんのはめっさ甘いコーヒー牛乳なんだけどね。

やっぱりブラックはダメだったか。

予想通りの反応だった。

そんな感じで幸せな朝の時間は流れていく。

そのときその幸せは音を立てて終わった。

……まあ実際ドアが外れる音がしたんだけど。

「ミツキ！どういうことだ！いきなりトンズラこきやがって！！お前いったいどういふつもり……って誰だその女！」

うん、ドーガ。

おもつきし忘れてたよ。

ってか最初とキャラ変わりすぎじゃね？

俺敬語やめろつつただけでキャラ変えろとは言っていないんだけど

……

しかし、あーあ、せつかくの時間が。

「……なあドーガあ。人の部屋にノックもなしにいきなり入ってきて、あまつさえドアを壊す奴ってさ、どう思う？」

俺が笑顔で尋ねると何を感じたのかドーガは冷や汗ダラダラになって「あ、後で俺の部屋に來い。じゃ、」と言ってそそくさと帰って行った。

……いや、「じゃ、」じゃねえよ。ドア直していけよ。

「あー、そんなわけで俺出かけなきゃ。ミスハちゃんはどうする？お昼くらいには帰ってくると思うけど？」

「あ、じゃあ一度家に戻ってもいいですか？あのまま放置というわけにもいかないですし、大家さんにも迷惑かけちゃったんで」

こういうところしっかりしてんだよなあ。
この子。いいお嫁さんになりそうだな。

「ん、じゃあこれうちの鍵ね。あ、あとこれも持つてくといいいよ。
容量無制限のバック」

俺は合鍵をキーホルダーからはずし、四次元バッグとともに渡した。
四次元バックを受け取ったミズハちゃんの反応は、それは面白かった。

それではここでアタックチャ〜ンス！

俺は今、なぜにこんな状態に陥っているのでしょうか。
ちなみにこんな状態とは、廊下の隅で仰向けになり、女の子に馬乗りにされている状態です。

お手付きした人は廊下に立ってて下さいね。

正解は……俺にもわかりません。

きつと児玉さんも知らないね。

じゃあ答えを探すためにここまでの経緯を思い出そうか。

城に向かう途中アルが肉をせがんできたので昨日ほったらかしにしてたお詫びも兼ねて買ってあげた。

ちなみに俺の財布は城の金庫と一直線なので制限なしである。

HAHAHA！億万長者だぜ！！

城に着くとアルはグラウンドの方に駆けて行った。

兵士のみんなはビックリしていたがベリエルはアルのことを知っていたため、じゃれあっていた。

アルのことは大丈夫そうだな。そんなことを考えながらドーガの部屋を目指していると後ろからとび蹴りを喰らわせられた。

そして今に至ると。

うん、意味わかんねえ。

……どうなっちゃうの、俺！？

5 回目『アタックチャンスは突然に』（後書き）

はい、来ましたアルの扱いが適当ですね。
すいません。

前回と今回はミズハちゃんメインのお話となっております。

そして主要キャラがそろうまでにいったい何話費やすのか！

あ、アタックチャンスの答え分かった人いたら感想のところにでも書いて下さい。

正解するとアタックチャンスの狙い目が……使えませんがねw
ま、なんかいいことがあります。↑これホント

なにはともあれ、このSFアクションをこれからもどーぞ……え？
コメディーじゃないよ？SFアク……コメディーじゃないって！SF
Fがダメならファンタジーでいいから！このファンタ……ああ、も
うっ！コメディーをよろしくお願いします！
ではまた次回！

……でもちよつとくらいSF的要素が入「コメディーだろ。」
誰！？

でもでもきつとファンタジーくらいなら「入ってねえよ。」

ええ！？これファンタジーゼロ！？

あ、そっか！これ本格S「コメディーな。」

断言だとオ！？

ま、よろしくお願いしますね。このS「コメディー」ン…フ「コ
メディー」を！

もっいつそコメディーにしちゃおうかな…？

6回目『じゃじゃ馬姫とかベタすぎだろ。いっそアリのナにしてしまえ!』……作

タイトル長!

とまあそんな感じで……

今回ちょっとグダグダな感じですよ。

……寝不足だから許してちょ?

6 回目『じゃじゃ馬姫とかベタすぎだろ。いっそアリ○ナにしてしまえ!……作

「私の婿になるのだ!」

……冒頭からなんかすいません。
俺にもさっぱりなんですよ。

なんでいきなりプロポーズされてんの、俺!?
しかも初対面……だよな?
ってか馬乗りて……

あゝそうか、きつと夢なんだな、うん。

起きたらきつとミス八ちゃんがおいしいご飯を作ってくれてるハズ。

しかし現実俺の逃避を認めてくれないようだ。

「おい、聞いているのか!? どうなのだ!」

ガクンガクンと揺さぶられる。

「あうあう、ちょ、待つ、やめ、うおい! やめんか! なんやねん!
いきなり、なんやねん!」

大事なことなので2回言いました。

なんで関西弁? という突っ込みは受け付けておりませんのでご了承
ください。

……M-1なんて見てないんだからねっ!

「ん、おお、すまん、すまん。つい、な。」

何がついなんだ……？

関連性皆無だろ！

「で？とりあえずどいてくれないかな？女の子がどこの馬の骨とも知れない男とこういう態勢でいるのはちょっとはしたないよ？」

というか周りの視線が痛かった。

メイドさんたちがくすくす笑っている。

「ん？ツ！？」

やっと気付いたのか少女はすごい勢いで飛びのいた。

顔が少し赤くなっている。

よく見ると結構可愛いじゃん。

少女は赤いドレスを着ていた。

少し吊り目がちな瞳に先の方がカールした茶髪。

世間一般で言う文句なしの美少女ってやつだな。

歳は、14、5あたり。

身長は155くらいだろうか？

俺の身長が173.8なのを考えるとおそらくそのくらいだな。

ちびっこにしては結構均整のとれたいいスタイルをしている。

しかしこの目には見覚えがあるな……

「で？いきなりどーゆうこと？吾輩ハ説明ヲ求ム」

「あ、いや、その、お前なのだろう？次期魔王候補というのは」

ほう、初対面の相手に対していきなりお前とはなかなか失礼なやつだな。

根性をたたきなおす必要アリとみた。

「まあ、そうだね。それが？」

少女はちよつと挙動不審だった。

周りをちらちら見ているところからすると、さっきのをまだ気にしているのだろうか？

「うん、そうだな。とりあえず場所を変えないか？」

「俺この後用事があるんだけど？」

「知らん。とりあえずこい。逃げたりしたら打ち首だぞ？」

……何この子。

理不尽すぎだろ！？

ま、それでもついていっちゃ俺は何なのかね。

連れて行かれた少女の部屋は予想通りファンシーな感じだった。

俺は椅子に腰かけている。

少女は奥からお菓子を持ってきた。

「食つか？」

「ん、さんきゅー」

……ダメだ！くつろいじゃダメだ！このままじゃペースに飲まれる！
とりあえず、話題を戻さなくてはっ！

「で？さっきのは何なの？ってかまず名乗ろうよ」

少女は思い出したように言う。

「ああ、自己紹介がまだだったか。私はリリイ。リリイ＝エルサレムだ。で、さっきの話の続きなんだけど、私の婿にならないか？」

……だからなんでだよあ！

意味わかんねえし！

何？こつちじゃそれが普通なの！？
なんか当たり前のように言うし……

「んゝとき、なんでそういう感じになったのか分からないんだけど
」

「お前アサダミツキだろう？次期魔王候補の」

なんだ？その情報つてもうそんなに出回ってるのか？
ま、城の中にいるんだし知っててもおかしくないか。

「まあそつだけど……で？」

リリイは俺が言ってることを理解できないかのように首をかしげる。

「で？と言われてもそれだけなんだが？」

……ん？

ドコト？

自称神が現れた時以来の理解不能事項だな。

「自称じゃねえし。マジのほうの神だし。GODと書いてごっどだし」

出てくんないや。

つか女神はゴッドじゃねえだろ。詳しくは知らんが

「そうなの？」

ああ、前授業で聞いた……

つかめんどくせえ。

「はいはい。じゃあまたねー」

まず状況を整理しようじゃないか。

ひとつ、リリイが俺にプロポーズした。

ひとつ、その理由は俺が魔王候補だからである。

ひとつ、まあ今のところ分かってるのはそれだけ。

「なにか？じゃあ君は俺が魔王候補っていうそれだけでプロポーズしたのかい？」

「ああ」

迷いなく頷くリリイ。

……いや、ダメだろ！

「あのさ、俺はな。結婚つてのは愛し合った二人がするもんだと思うんだよ。確かに出会いとか、違う始まり方の恋もあるのかもしれない。でもきつとそれらの大半は失敗すると思うんだ。さらに言

えは若さだけの勢い婚じゃあ誰も幸せにはなれないと思うんだ。君はまだ若いんだしそんなに焦る必要もないと思うよ？てか俺らはまだ若すぎるよ、うん。それにそういうのはちゃんと相手のことを見極めてから言った方がいい。ね？じゃ、そゆことで」

リイは何か思うところがあつたようで、考え込んでしまったのでとりあえず俺は行くことにした。

「で？昨日のあれはどういうことなんだ？言い訳があるなら聞くが」俺は今シーザスの前にいる。

ドーガの部屋に行くと言われ、連れてこられた。
……てかシーザス怖えよ！

「あ、いや。無いです、ハイ。すんませんでしたあ！」

「まあなんだ。ドーガからも聞いたが勝手に話を進めたのは悪かった。こちらが悪い」

物わがりのいい人で助かった。
俺は安堵の息をもらす。

「だがな、昨日のはただじゃない。仮にも次期魔王という立場なんだ。嫌だからといって勝手に逃げ出していいわけではあるまい？」

……はい、そのとうりです。

「すみませんでした」

結局、シーザスはそこまで怒ってはいなかった。ちゃんと謝ることで素直に赦してくれた。

ただ、その後のことの方が俺には衝撃だった。

「そうそう。さっきうちの孫娘に結婚は何たるかを語ったらしいな？」

ん？なにいつてんだ？この人？

「あの、おっしゃっている意味が……」

シーザスはニヤニヤしながら言った。

「そうか。そういえばまだわしのファミリイネームを教えていなかったな。わしのファミリイネームはエルサレムじゃ」

……エルサレム？

ツ！リリイか！？

え？孫？

え？え？だつてシーザスってまだ30ぐらいでしょ！？

「え？リリイ、っスか？でもでもシーザスさんてまだ30ぐらいなんじゃ？」

シーザスはガハハと大爆笑し始めた。

「そうか！おぬしはしらのか！魔族は成人後そう容姿が変わるものではない。わしはこう見えてももう700はとうに越しておるわ！」

……はい、また衝撃の事実発覚。

え、じゃあ何か？

ベリエルもああ見えて200とかなのか！？

……今度確認してみよう。

……待てよ？

孫娘……

「つてことはあれですか、リリイってお姫様なんスか？」

「まあそういうことになる。あれはわしにもやつのも親にも手の余るじゃじゃ馬でう、おぬしには少し感心しておるのだよ。あれにおとなしく話を聞かせるなどたやすいことではないからな」

……じゃじゃ馬姫ねえ。

どこまで王道RPGなんだよ！

あ、俺魔王だけどさ。

「ま、これからもよろしくしてやってくれないか？あれはあまり城から出たことがないものでな、あまり人と接するのが得意ではないのだよ」

さっきまでニヤニヤしていたシーザスが真剣なまなざしで頼んでくる。

……まあ悪い子ではなさそうだな。

「まあ、はい」

部屋に戻るとミズハちゃんが昼ご飯を作って待っていてくれた。

「おかえりなさい」

エプロン姿のミズハちゃんに少しドキッとしてしまう。
うーん、いいな。やっぱ。

昼ごはんはチャーハンのものだった。

「で？家の方はどうだった？」

「あ、はい。家具やなんかはほとんど無事だったんですけど、大家さんがかなりショックを受けていらっしたようで……。本当に申し訳なかったです。もうあそこには住めないですね。次の家を探さなきゃなんですよ」

ふうん、ま、ミズハちゃんが責任を感じる必要は全くないと思うけどね。

俺は今日午前中に考えていたことを切り出した。

「あのさ、ここの隣の部屋に住まない？ちょうどあいてるし隣に住んでればなんかあってもすぐに連絡取れるしさ。どう？手続きとかもすぐできるし」

ミズハちゃんの顔がみるみる輝いていく。

「いいんですか？ミツキさんがいいなら……お願いしたいです！」

ミズハちゃんの笑顔がとても眩しかった。

そのあと大家さんのもとに行き手続きをすませた。

……金は国負担だけだね。

ミズハちゃんは自分で払うと言ってきかなかったがなんとか説得に成功した。

引越しが済んでからのミズハちゃんは少し嬉しそうだった。
そんな様子を見ているとこっちまで嬉しくなってくる。

この娘がまた涙を流すことの無いよう、頑張らなくちゃな！

6回目『じゃじゃ馬姫とかベタすぎだろ。いっそアリのナにしてしまえ!……作

今回はピシツとした終わり方になっています。

次回とそのまた次で主要キャラ（初期メンバー）がそろって、話が進む予定です。

今後ともどうぞよろしくですっ！

ではまた次回！

7回目『デートとかクラウドとか全部まとめて雑貨屋のおっちゃんのおかげ』

1日間空いちゃいました>>

これからもなるべく早く更新していきたいんで、よろしく願いますー

7回目『デートとかクラウドとか全部まとめて雑貨屋のおっちゃんのおかげ』

……窓から差し込む光で目が覚めた。

いつもと変わらない部屋。

いつもと変わらない朝に思えた。

……って前にもやったなこれ。

つか前と違ってもうこの部屋にも慣れたから、ホントにいつも通りなんだけどね。

でも前と違うところが一つある。

そう、ミズハちゃんが朝ごはんを作ってくれているのだっ！

ミズハちゃんが隣に引越してきてからもう3日が経った。

あれからミズハちゃんは俺が家で飯を食う時は必ず飯を作りに来てくれている。

ホントによくできた子だ。

この間に変わったことはなかった。

変わったことといえば俺の存在がこの町の人に知れ渡った。

……まあ誰も魔王って信じてくれないんだけどね。

ミズハちゃんは信じてくれたけど。

俺はそれだけでいいんだ！

「ミツキさ〜ん。朝ごはんできましたよ〜」

「わかったー」

朝ごはんを食べ終わって、食後のコーヒーを飲む。

「あのさ、今日やっと暇が出たんだけど一緒に町ぶらぶらしない？」

そう、今日まではずっと城からの呼び出しがあり、まともにミズハちゃんと遊べていなかったのだ。

もうさ、お堅いやつらに取り囲まれてストレス溜まりまくりなんだよねー。

この辺で発散しなきゃ。

「その……それは、あの、ううう」

ん？なんか用事でもあったのかな？

……もう一つの可能性は考えないようにしよう。

「ゴメン、なんか用事とかあった？別にムリしなくてもいいからね？」

ミズハちゃんは首をふるふると振った。

……いちいち可愛いな、もうっ！

あれ？顔赤くないか？

熱でもあるのか！？

「あの、その、大丈夫です、でも、それってその……」

やっぱり俺となんて行きたくねえのかな……

ちよつと、いいやすげーシヨックだぁー！！

その時ミズハちゃんの口から思いもよらぬ言葉が出てきた。

「あの、それって、デート……ですよね？」

……え？そうなの、俺？

いや、でも、ね？

買い物行くだけだし。

そう、二人で。

二人っきりで買い物って……デートじゃね？

買うものも決まってるないし、こーいうのをウィンドウショッピング
っていうんですかね？

ヤバいな、全然考えてなかっただけにこっちまでキンチョーしてきたぞ……

「あ、うん。そうなるの、かな？」

なんだこの二人。

ハタから見たら相当変だぞ、特に俺。

自分から切り出してテンパってどうする！？ここは強気に行かねば！

「あのさ、それで、大丈夫……かな？」

ミズハちゃんはしばらくもじもじしていたが、元気に頷いてくれた。

「あ、これなんてどうですか？結構面白いですよ？」

俺たちは今雑貨屋に来ている。

ミズハちゃんが持ってきたのはギターだった。

「ん、ギターだねえ。なつかしいなあ」

そう、ギター系のゲームにはまった俺はモノホンも買って弾きまくっていたのだ。

……自分で言うのもなんだが結構な腕前なんだぜ？

ミズハちゃんの頭に？マークが浮かんでいた。

「ギター？これってそんな名前なんですか？懐かしいということとはミツキさんは前にもこれを見たことがあるんですか？」

そうか、ミズハちゃんはギターを知らんのか。

軽くひいてあげるとミズハちゃんは目を輝かせていた
でも知らない楽器なんて普通あるか？

「おい、ちょっといいか？」

俺は店長を呼びとめた。

「ん？なんだ？」

店長はいかにもって感じのひげ親父だった。
頭にバンダナ巻いてるし……

「これさ、どこでゲットした？」

「ああ、それか。なに、知り合いの人間にもらったんだ。なんでもあの勇者の世界にあった楽器なんだと。そんなのが楽器なんてビツクリだよなあ音はちっちゃええしよ。どうせ売れねえし欲しいならや

るぞ？」

俺はありがたくSGタイプのこのギターをもらいまた店内の物色に戻った。

一つ収獲があつたな。

そして、勇者が俺の世界にいた人間である可能性が強くなった。

……知ってる人だつたらやだなあ。

「お、なんだこれ？」

俺が手に取ったのは小さいナイフだ。

豪華な装飾のついた柄に埋まっている赤い宝玉には古代語の刻印が刻まれていた。

そこには何やら難しいことが書かれていたが「回復」「白魔法」「強化」「ヒビロカネ緋緋色金」と書かれているあたり緋緋色金でできた回復魔法用のナイフらしい。
使い方は分らんが。

「なあ、これいくら？」

「ん？ああ、そのナイフ切れ味いいし結構な芸術品だからな、1万グレイってとこかな」

この国の通貨グレイは日本円換算で1グレイ10円ってとこだ。
10万……ちよつと高いがまあ予算は山ほどあるからな。

「OK、これちょうだい」

店長はビックリしたようだった。
まさかこんなガキがそんな金を持っているとは思わなかったのだろう。

「おうけい？なんざそら。今流行ってるのか？まあいい。毎度あり
い」

そっちかよ。

略語も通じるものと通じないものがあるらしい。

店をぶらぶらしているとミズハちゃんが無言で何かをジッとみていた。
ブレスレットだろうか？

妙に凝視しているので少し気になった。

「どうかしたの？」

ミズハちゃんは俺に気付いていなかったようだ。
少し驚いていた。
うん、いちいちいやされるな。

「あ、あのこれ、面白い効果がついているので、つい」

ミズハちゃんが微笑しながら言う。
面白い効果か……調べてみよう！

「アナリシス」

いろいろな情報が視覚化して入ってくる。

どうやら2対のプレスレットでお互いの場所や大体の状況を知るためのものようだ。

軽い会話もできるとか。

金色でハートのチャームのついたものと黒くて鎖っぽいイメージのものが対であるところからするとカップル用のものみたいだな。

「だれかあげたい人でもいるの？」

俺は冗談交じりに聞いてみた。

ま、ミズハちゃんも女の子だ。

そういう相手がいてもおかしくはないだろう。

……おかしくはないんだけど、なんかヤだな。
考えないようにしよう。

「ふええ！？あう、その、あゆ、ミ、ミ、ミ、ミツキさんに……！」

「んなっ！？」

お、お、お、俺ですかあああああ！？

や、ヤバい顔が赤い！

何か言え！何か言うんだ、浅田弥月いい！！

これじゃあまるでガキみたいじゃないか！

もっとうこう大人な対応をだな……

「あう、その、変な意味じゃなくてですね！その、ミツキさんがどこにいるかわからないと何かあったときに大変なので、その、そういうことなんです……！」

……あれ？なんで落ち込んでんだ俺？

あたりまえじゃないか。

ミズハちゃんみたいな可愛い女の子がこんな平凡顔にそーゆう感情を抱くわけないじゃないか。

おっけ、おっけ。

もう立ち直ったよ？

嫌われてないだけよしとしようじゃないか。

「あ、うん。そう、だよな。うん。大丈夫。……そうだ、じゃあれも買っちゃおうか」

なるべく笑顔を作るように頑張った。

頷いたミズハちゃんの顔はまだ少し赤みがかった。

ブレスレットをつけたミズハちゃんはすごくうれしそうだった。

「ふう……。まさか20万もするとはな……」

複雑な魔法でできているらしく、これはそれなりの値段がした。

ミズハちゃんにはもちろん内緒だ。

ま、喜んでくれたならいいか。

「ミツキさーん！こっちです。はやく、はやく！」

ミズハちゃんはさっきからスキップしっぱなしである。

うーん癒されるう！

今日でだいぶ疲れがとれたな。

「先に入ってみていいよー!」

そういうとミズハちゃんは嬉々としてファンシーショップにはいつていった。

やっぱり女の子なんだなあ。

そんな風に父親的視線を向けていると不意に後ろから声をかけられた。

「おい、お前なものだ? さっきのあれ、どういうことだ?」

フードをかぶっているの顔はよく見えないが身長は170cmほどだろうか?

服装は赤いフード付きのコートに黒いシャツ。そして黒いカーゴパンツというスタイルだ。

あれってなんだ? ミズハちゃんのことか?

「おまえこそ何もんだ、ってか人のプライベートにはいつてくんないよ」

「ぶら……? まあいい。それよりさっきのあれだ。お前盗人か? 一見ガラクタだが価値のあるものを見抜いていた。あれほどまでの目利きは見たことがない」

目利き?

ああ、さっきの雑貨屋でのことか。

確かにチートラ使って探してたからな。

「うーん、俺の能力だよ。べつにそーいうのが専門なわけでもない

しねえ」

男は動揺しているようだった。

「目利きの能力など聞いたことないぞ？それに専門ではないとはどういう意味だ？」

「俺の能力の一部って言うのかな？ってかアンタ何者だよ！さっきから怪しすぎるだろ！」

男は夢中になっていて自己紹介が遅れただけで別に怪しいものではないらしかった。

「ああ、すまない。俺はレルム。旅のものだ。別に怪しいものじゃない。つい初めて見た能力に夢中になってしまっただけ。済まなかった。よかったらこれから……」

男がフードを外す。

そこには見覚えのある顔があった。

そう、俺が尊敬し目標とする自称元ソルジャークラス1st……

「クラウドオオオオ！？」

クラウド、もといレルムは俺の大声に驚いた様子だった。

だって金髪のツンツン頭に碧い目、整ったあの顔立ちときたもんだ。どこことなく声も似てるし……

「くら……？誰だそれは？」

うーん我ながらビックリ団だぜ。

とりあえず話の続きでも聞くか。

「あゝうん気にしないで。こっちの話。で？なんだって？」

クラ……じゃなくてレルムは思い出した風に言いだした。

「そうそう。お前のその能力に興味があるんだ。教えてはくれないか？」

……ムリだねえ。

教えてあげてもいいんだけどさ、俺自身よくわかんねえから。

「ゴメン、無理」

「なぜだ！？もちろんタダでは言わない。それなりに謝礼もする。だめか？」

ホントに教えてほしいんだねえ。

子犬の様な眼だ。

でもこんなをお願いされると意地悪したくなっちゃうんだよねえ。

「断る。興味ないね」

俺は憧れのあの人のセリフを言ってみた。
うっはあ、気持ちいい！

「そうか……一子相伝の秘儀とかきつとそういうものなんだな。無理を言って済まなかった」

いやいやそんなマジでガツカリすんなや！

俺が悪いみたいじゃねえか。
しゃあねえ正直に言おうか。

「いや、そういうのじゃないんだ。いや、一子相伝てのはあつて
のか？でも知られてまずいわけでもないしな……。なんつーかこう
説明しにくいんだよねえ。俺は浅田弥月。俺の住所教えつからさ、
暇なときに来いよ。んで自分で調べてくれ。うん、それがいいな」

こいつは雰囲気がなんだか浩平に似ていた。だから信用できる。
実際浩平とも初対面から10分経ってないぐらいでメアド交換した
しな。

何よりクラ○ド様だもんね。

こうしてまた一人この世界に知り合いができた。

7回目『デートとかクラウドとか全部まとめて雑貨屋のおっちゃんのおかげ』

おはようございます、こんにちは、こんばんわ。

神裂龍霞です！

はじめましての方もいるのかな？

初めての人はホラ早速お気に入りに登録しちゃってよ！

はい、クラウド○さんの登場です。

あゝ伏せ字位置が変わってるのは内緒ねw

このレルムという新キャラがどうかかわってくるのか、そして今回はいろいろとアイテムをゲットしちゃいました。

ミズハちゃんとのデートシーンを入れたかったのは単に俺が書きたかったからです！！

書きながら癒されましたw

これを読んだ皆さんもミズハちゃんのことを妄想して癒されてくれれば幸いです。

このまったく勇者（魔王）を倒しに行かないお話もついに次回で新たな展開が！！

ま、ホントにそうなるかは怪しいですけどねw

ではまた次回っ！

8回目『勇者始動！旅立ちは悲しみの上に……』（前書き）

すいません、ちょっと今回文章めちゃくちゃなところあります。
ですが一応最後まで読んでいてね！

8 回目『勇者始動！旅立ちの悲しみの上に……』

こんにちは浅田弥月です。

ついに勇者を倒すための旅に出ることになりました。

え？なんで勇者を倒すのかって？

そりゃあ勇者が魔王だからさ。

とりあえず、この間の続きを話そうか。

レルムと別れた俺はミズハちゃんとアパートへ帰った。

「あれ、誰でしょうか？ミツキさんを待つてゐみたいですよ」

俺の部屋の前でベリエルが待つていた。

どこかそわそわした様子で、ずっとときよろきよろしていた。

ベリエルは俺を視界にとらえると、イノシシもビックリなスピードで飛んできた。

「ミツキイ！大変なんだ！！すぐに城に来てくれ！！」

「お、お、落ち着けてっ！とりあえず、何が、あったのか、ちゃんと、話せ！んで、俺を、揺さぶるんじゃない！！！」

ガクンガクンと揺さぶられてちよつと酔った。
しかしよく舌咬まなかったな、俺。

ベリエルはかなり興奮していたがだんだんと落ち着いてきて俺に事情を話してくれた。

「勇者が、動き出した。地方で戦^{やっ}つてたところに勇者が来て、物資を届けに行った一般人も含めて全員やられちまった。唯一帰ってきたやつもさつき病院で……」

あまり楽しい内容ではなかった。

ベリエルも本当に悔しそうだ。
だけど……

「でもさ、戦場じゃそんなの想定内だろ？そこまで大変なことなのか？」

そう、戦場なのだ。そりゃ勇者は来るだろう。

予想くらいできたはずなのだ。

「たしかに。勇者は普段戦場には来ないが今までにもやつが来て全滅、というのがなかったわけじゃない。問題はその後なんだよ。勇者は軍を殲滅した後、近くにあつた小さな村を潰したんだ。そこは年寄りが暮らしてる村だった。抵抗できないじじば共を村ごと焼いたんだぞ？許せるわけねえよな？」

ベリエルは話してる間、終始怖い顔をしていた。

俺も、許せなかった。

自分の中で何かがふつつと湧きあがるのが分かった。

「国王はかなり怒っておられる。すぐにミツキを呼んで来いと言われた」

「ああ、分かった」

ミズハちゃんは空気を読んで「じゃあ部屋で待ってますね」と言ってくれた。

ホントに気が利いて助かる。

俺は小さく答えると王室へとワープした。

「おお、来たか。ミツキ」

周りにいた兵士たちは少し驚いたようだったがシーザスは眉ひとつ動かさずに言った。

「話はベリエルから聞いておるな？悪いんだがすぐに旅立ってほくれないか？戦況がよくない場所、勇者が現れた場所に行つて戦つてほしいのだ。本来ならばすぐにでも勇者の国に乗り込みたいところだが、まだそこまで踏み切るほどの被害ではない。どうだ、引き受けてくれんか？」

そこまでの被害ではない。そう言った時のシーザスの顔は本当に辛そうだった。

多くを守るため、一時の感情に流されず冷静に対処する。国王というのも楽な仕事じゃないな、そう思った。

「もちろん、断る理由がどこにあるんです？勇者のヤローは同じ人間といえども許せねえ。まずどこに行けば？」

「そうだな……ミジュランから回ってもらおうか。あそこは獣人族が主体の村が多い。獣人族は理解が早い。君のこともきつと受け入れてくれるはずだ」

俺は魔王といえど知名度が低い。

人間にしか見えない俺がいきなり行っても受け入れてくれないかも知れない。

だからまずここで成果を上げて名前を売り込めってことなのだろう。

そーいえばまだこの世界の地理について触れていなかったな。

まず俺たちがいるこの世界は一つの大륙でできており、その8割は大陸の中心にそびえる旧魔王城の周りに広がる人間の国「ローマデイウム」が支配している。

魔族が治めるこのアルマーニユ地方は大陸の北部にあり、俺がこれから目指すことになるミジュラン地方は大陸の北西部の一角だ。

ミジュランに行くにはローマデイウムのすぐそばを通らなければいけないので、結構困難な道になりなるだろう。
ま、とりあえずこのくらいでいいだろう。

「OK、じゃあ明日にでも発つことにします」

「悪いが、頼んだぞ」

こうして俺の旅立つ日が決まった。

8回目『勇者始動！旅立ちの悲しみの上に……』（後書き）

前書きにも書きましたがちょっと今回文章がアレな感じになってます。

ほかにも問題はいろいろありますが……

ち、地理のその後付けなんかじゃねーし！

な、何言ってるんの斎藤？↑意味わかんねえw

まあ言い訳するとですねえ寝てないんですよ最近。

MXでブラックラグーンの一挙放送やってるじゃん？

ちよつとはまっちゃってww

ま、次回はもう少しましに……

ってことで更新したらすぐわかるようにお気に入り登録しちゃえ！
今後ともどうぞよろしくです！

ではまた次回！

9 回目『姫の過去！旅立ちは悲しみの上に……』（嘘）後篇』（前書き）

あけましておめでとうございますっ！

今年も魔王勇者をよろしくです！

あとがき長いですけどよかったらそれに対してコメとか下さいねw
もちろん作品の方でもokです！↑普通そっちだろっ！

あ、タイトルの奴は別に前回のが前篇じゃないんです。前篇はないんです。

すいません。意味分かんなくてすいませ……あ、ちょ、やめっ、石を投げないで〜w

てなわけで最後まで、楽しんでいてね（はあと）

9 回目『姫の過去！旅立ちは悲しみの上に……』（嘘）後篇』

……どうしてこうなった。

俺は今馬車に乗っています。

そしてミジュラン地方に向かっているのです。

まあここまでは予定通りだ。

隣でミズハちゃんがスヤスヤ眠ってはいるがそれもセーフだ。

一人で置いてきたらいつグレイプニルが解けるか分からないからな。
問題はここからだ。

俺の前には青年と少女が満足げな笑顔で座っています。
そしてその横にはぐるぐるに縛られて気絶してる兵士が二人ほど……
ではここで問題です。

100

この二人は誰で何故乗り込んできたのでしょうか。
えゝ前回はアタックチャンスだったから……
今回は、某六角形の番組で！

最後の回答者はあの言葉を言わないと正解になりませんよゝ
ま、俺も半分しか答え分かんないんですけどねゝ

じゃ、また回想どーぞ。

「ういじゃ、行きますか」

俺は今日から本格的に打倒勇者の旅に出る。

同行人はミズハちゃん＋兵士3人です。

最初は危険だからミズハちゃんは置いていこうかとも思ったんだけど、置いていつてグレイプニルが解けてしまったときの方が危険と判断したので連れていくことにした。

兵士の方はベリエルが選拔し、就けてくれたものだ。

ベリエルいわく「本当は俺がついていきたいのだが仕事がな……。

ま、俺としてはどーでもいいんだがシーザスがうるさくて敵わん……てなわけで俺が選んだこいつらを連れて行け！かなり腕はたつぜ！」とのこと。

だから仕事大切にしろって……

そんなこんなで俺は出発することになりました。

シーザスは見送りをしようといってくれたが、なんかこそばゆかったので断った。

「では、お気をつけて」

そんなこんなで見送りはドーガとベリエルだけである。

「ま、いつでも戻ってこいや。お前の力なら大丈夫だと思うが、気をつけてな」

そんなこんなで俺たちは馬車に乗り込み城を離れた。
5分ほど走っただろうか

……うう、空気が重い。

ミズハちゃん、は馬車に乗るなり俺に寄りかかって寝ちゃうし、馬車の中にいる二人の兵士はだんまりだし。

こんなときあのじゃじゃ馬がいたら明るくもなるのかなーなんて、そんなことを考えていた。

リリイとはあの後何度か遊んだ、ってか遊ばれた。

この前の様ないきなりのプロポーズは無くなったがまだ奴は諦めていないと俺は思う。

ガタッ

……あれ、なんか聞こえなかった？

そこの果物の箱さ、動いてるし。

兵士たちがさつと剣を構える。

「何者だ。姿を現せ！」

おいおいおい、マジかよ。

マジで？

襲撃者ってやつ？

「べつに、怪しいもんじゃ、ないよつと！」

箱ががばつと開き、真つ赤な光があたりを包む。

「プロテゴー！」

俺は反射的にミズハちゃんを抱き寄せ防御呪文を唱えていた。
光がだんだんと薄くなっていき、そこにあった光景とは……

俺の知人二人が眠っている兵士二人を縄で縛っているところだった。
そうか、催眠の魔術か。

……っかさ

「何やってんだテメエら!!」

そこにいたのはリリイとレルムでした。

答えの半分ができましたよ

正解者はどのくらいかな？

「何って……旅の同行だぞ？見てわからんのか？」

けろつと答えるリリイ。

まったくこの子は……

「だからって何故そいつらを縛る？さるぐつわまでして！それじゃあテロリストじゃねえか！」

ではここから答えのもう半分です。

「テ……テロリ？何だそれは？よくわからんがミツキは私が連れて行ってくれと言ってもダメだと言うだろう？だからこうして内緒で来たのだ」

「当たり前だろ！遊びじゃないんだ。危険すぎる。きっとシーザスだって心配してるぞ？」

「あゝおじい様には言ってるから大丈夫なのだ。頑張ってこいと
言われた」

……オイじじい、なにやってんだよ！？
止めるよ！

そこ、止めるだろ普通！

ホント訳わかんねえぜ。
とりあえずだ、

「まあリリイの方は分かった。後でまた話そう。で？お前はなんじ
やレルム！なぜにリリイと一緒にいる！？」

そう、そこが問題だ。
リリイとコイツは面識がないはずなんだが。

「ああ、馬車に忍び込もうとしたら偶然ご一緒することになってな。
話が盛り上がってしまったてな、友だちになった」

……ホントに訳わかんねえヤツばっかだ。
まあレルムの方の理由は大体分かる。

「俺がついてきたのはミツキの能力を調べるためだ？いいだろう？」

やっぱりな……

確かにこいつには自由に調べていいって言ったしな。

俺は約束は破らない主義だし。

「あゝうん。レルムの方は俺が許可した手前ダメだというわけにも

いかん。だけどな、町にいるのと旅で行動を共にするのじゃ話が違
う。どうやって信頼を勝ち取る？」

「絶対に裏切ったりはしない！頼む！」

「んー、まあいいか」

俺がそう言った途端レルムは大喜びだった。
反対にリリイは不満そうだったが。

これでレルムの方は一件落着。
次は……

「何故レルムはよくて私はダメなのだ！！ずるいぞ、差別だ！！」

ま、とりあえずシーザスと連絡を取るか。

「パトロース」

これは守護霊を作る術だ。

ちなみに俺の守護霊はフクロウだった。

俺の守護霊は光になって飛んでいく。

「んで？どーいうことですかね、シーザスさんや」

俺の守護霊がいきなり現れるとシーザスはかなり驚いたようだ。
ちよつと面白いかも。

「おお、ミツキか。来るとは思っていたがまさかこんな方法とはな
……守護霊など初めて見たわ。ホントに存在する術だったとは。そ

れで、君の話とはリリイのことであろう？」

「そうだ。アンタがけしかけたらしいじゃないか。この旅はそれなりに危険が伴うんですよ？あの子はまだ幼すぎる――！」

シーザスはくすくすと笑っていた。

「あのな、ミツキ。確かにあやつはまだ14と幼い。だがな、おぬしだってまだ17であろう？わしからすればどちらもさほど変わらん。それにあやつはベリエルの指導を受けておる。自分の身は自分で守れるであろう」

確かにベリエルに特訓されているのならそこらへんの賊くらいなら返り討ちに出来るのだろう。
しかし、

「でも俺たちが行くのは戦場だ。俺には前魔王の能力があるがあの子には……」

俺の言葉を遮るようにシーザスは言った。

「あやつの魔法はこの城の中でもトップクラスじゃ。……実をいうとな、あの子にはもつと世界を見てきてほしいのだよ。前にも話したと思うがあやつはあまり城から出たことがないのじゃ。幼き日に父を争いで亡くし、母親も病弱でろくに遊んでやれぬ。あやつは城から出ることを拒否し、人との付き合いというものを知らんだ。だから普通の少女として、素性を隠したうえで旅をしてほしい。そして世界というものをみて、成長してほしい、それがこの老いぼれの望みなのだよ。そんな時、あやつ自ら旅がしたいと言ってきたのだ。わしはそれをかなえてやりたい。どうだろう、お願いできぬか

「？」

あーうん。

俺こついう感動エピソードに弱いんだよちきしょう！

モーやだ自分。

「……仕方ねえな、おい。テメエの譲ちゃんは俺が預かるぞ。責任はとらんけどな」

俺が半ば投げやりに答えるとシーザスはにやりと笑って言った。

「そうかそうか。済まないな、ミツキよ。では頼んだぞ」

「わたくし達からも、どうぞよろしくお願いします」

「……どうやら俺はハメられたようだ。

親父さん死んだんじゃないかねーのかよ！？つか御袋さんもめっちゃ健康そうだし……」

まさか家族ぐるみでハメるとは……」

「それじゃ、あいつにいろいろと教えてやってくれな」

家族全員でにやりとすんな！

くっそ！驕役かよ……」

俺はシーザスを一発つつ……けなかったがまあ、おもっきし睨んで馬車に戻った。

「あゝあれだ。お前も連れてくことになった。でも俺の言うことちやんと聞くんぞぞ?」

「うん! 私いい子にしちゃうのだ!」

こんなに喜ばれちゃうと、ねえ?

そんなこんなで俺たちの旅が始まった……ってあれ?

「レルムとあの兵士たちは?」

「ああ、あのうざったい兵士たちはさっき投げといたぞ。今はレルムが馬車を運転しているのだ」

……後で説教決定だな。

御免なさい兵士さん!

でもまあベリエルが選んだ兵士なら大丈夫だろう。

……はあ。

大変な旅になりそうだ。

「ところで、お前はいつまでその女を抱いているつもりだ?」

「え?」

そう言えば……!?

「あうあう……」

俺はさっきミス八ちゃんを抱き寄せ、そのままでいたらしい。
さらにさっきの大声でのやり取りでミス八ちゃんも目を覚まし、ゆ
でダコになっていた。

「それで？」その女は誰だ……？」

やはりこの娘はシーザスの孫ですね。恐いです、ええ。
その後、なぜか言い訳じみた説明が2時間ほど馬車の中から聞こえ
たという。

9 回目『姫の過去！旅立ちは悲しみの上に……』（嘘）後篇』（後書き）

どーもです。

今回は久しぶりにまともな話になったと思いますよん？

なんか変なところあったら教えてください。

まあ、最近だんだん裏設定がすっかりできて、まともな流れに乗れそうです。

そうそう、この前さき　すたのくじやってきたんですよ。

そしたらなんと！一発でC賞のつかさプレミアフィギュアあたっちゃいましたw

つかさはミスハちゃんのモデルなのですげー嬉しかったですよ^^
ま、こういうところで運使っちゃうから肝心な時にいい当たりが出ないんですよけど……

ま、そんな感じであけましておめでとーございます！

俺は今年も某笑ってはいけない番組を見てる間に年越してたみたいで、気づいたらもう新年でしたww

ま、今年も魔王勇者頑張るんでよろしくですっ！

ではまた次回！

10回目『ゲームと現実じゃあ強さってのは変わるもんですよ、はい』（前書き）

ウサギ年ですね〜

ま、今年もなんとなくいきますか〜

10回目『ゲームと現実じゃあ強さつてのは変わるもんですよ、はい』

どうも浅田弥月です。

皆さん知ってますか？

チエコスロバキアのある教会には、人骨で作られたシャンデリアがあるんですよ？

「ミ、ミツキさん？どうしたんですか急に？皆さんって……それよりコレどうするんですか！？」

チツ、現実逃避失敗か……

それにしても……

「これは、ねえ？」

俺たちは今モンスターに囲まれております。

アルマーニユを出発してから1時間。

ジン○ウガだと……ッ！？

そう、俺たちの前に立ちふさがっているのは紛れもなくあのびりびりの狼竜だった。

なぜいるんだ！？

そんな疑問を口にする暇もなくやつらは馬車を囲んできた。

いやいや雷狼竜5匹はキツイでしょ！？

「お、おいミツキ、ガルザーク5体同時に出現したなんて話聞いたことないんだが……」

へえ、この世界ではガルザークっていうんだあ。

どっかのツンツン頭がデュエルで使ってるクリーチャーのようなネーミングだねえ。

「ミ、ミツキさん！また目が虚ろになってますよ！？」

はっ！

そうだ、何とかしなくちゃな。

……なんか馬車の周りぐるぐるしてるよー！

「レルム！これ、どうしたらいい？何が効くんだ？」

……返事無し、と。

まさかもつすでお陀仏……？

「zzzz」

寝てるよ！

この状況で！？

「ミツキ！どうするのだ！襲ってきそうだぞ！？」

おちつけ、落ち着け自分！

兎に角なんかワザを……

そうだ、アレ使うか！

「行くぜ、こんちくしょーが！デトネスクウェア！」

俺たちの馬車のまわりの地面が光り始める。

「ミツキ？何を……」

「まあ見てろつて。来いよ雑魚狼が！」

言葉が分かるのか、やつらはピタツと止まった。
めっちゃ睨んでくるんですケド……

グルウア！

来た来た来た！

「ミツキイ！何してるのだ！！挑発とか、マジでバカかあ！？」

リリイさんや、これから面白いから見てろつての。

ドウオオオオン！！

やつらが光にふれた途端大爆発が起こる。
スゲー威力。

こりゃ肉片も残らないんじゃないか？

「きゃっ！」

「うお！？」

「なんなのだこれは！？」

みんなが爆風で吹っ飛ぶ。

言っとけばよかったな。
ちよつと反省。

レルムは起きたからいいとして、アル……
まだ寝てられんの！？
ものすごい睡眠への執着心だな。

俺はそんなことを考えながら余裕をかましていた。
しかしその考えは甘かったようだ。

「ミ、ミツキさん！あれ！あれみてください！」

「ん？なに？どしたのよ、そんなにあわてて、っておお！？」

爆風が収まり視界が開けていく。
そこに立っていたのは……

「まだ生きてるのか！？どんな体してんのじゃー！！」

ほぼ無傷でした。

まあ、ね？大樽Gじゃ倒せないだろうしね。
うん、大丈夫だよ、たぶん。

グルアア！

……ダメかも。
めっちゃ怒っていらっしやる！！

「ミツキ！何かないのか！？こつ、脱出用の術とか」

レルムさんいい考えだ！

こういうとき自分の発想力のなさに失望する。

「ルーラ！」

……しまった！

アルマーニユまで戻ってきてしまった。

「まあ、あれだ。うん、結果オーライだろ。全員無事だったしOK
だろ？」

みんな状況が理解できていないようだ。

ま、いきなり城の門まで戻ってきたんだ。

俺は軽く説明をした。

「ふむ、この術の効果は分かったが、次このような事があった場合に備えて作戦会議を開いておこうじゃないか」

レルムの提案に一同頷く。

「そうだな、まずあいつの情報をくれないか？」

俺の質問に答えてくれたのはリリイだった。

「あいつはガルザークというモンスターだ。攻撃力、守備力ともにAAランクのモンスターだ。ランクの基準は分かるか？「いいや、分からん。」そうだな、最低ランクのGランクが城にあるバズーカ程度の威力だ。「マジ！？」ああ、最高ランクがそこにいるフェンリルを含むAAA+Sランクだ。」

アルってそんなに強かったの！？
そんなドヤ顔されても……

城にあるバズーカというのは俺の世界で言うところのピストル位の威力だ。

おそらくA Aランクというのはミサイル並みの強さだろう。

「説明を続けるぞ？ ガルザークは雷の魔術を使いあの爪と尻尾で攻撃してくる。討伐にはベリエルでも1体に3時間ほどかかるらしい」

ほえージン○ウガより全然強いんだな。

そんなの一発で何体も倒せるような技、俺は知らないし思いつかねえ。

「で、どうするんだ？ 俺としてはなるべく馬車での戦闘は避けたいのだが」

「あ、ではどこかに飛ばしてしまうというのはどうでしょう？ 風なら守備力とか関係ないんじゃないんですか？」

「それだ！！ バシルーラなら何とかなる！」

「ほう、ばしるーらとはどんな術なのだ？」

俺はみんなに説明した。

「うん、それがいいな。では改めて出発するとするか。この調子だと今日中に村に着けないかもしれないぞ」

そのあとのエンカウントは雑魚ばかりでメラとかで何とかなるレベ

ルだった。

折角作戦会議したのに……

あ、いや出てこられても困るけどね？

5時間ほど馬車に揺られて、そろそろやることもなくなってウトウトし始めたその時。

「おい、ついたぞ」

「ん、おっけ。じゃあ門のところで止めてちょ」

「了解」

俺達がたどり着いたのはそれなりに大きな町だった。

ここはまだミジュランではなくその一步手前、といったところだ。

「なにものだ。用のないものを町に入れるわけにはいかない」

門のところにいる兵士たちがやりを構えてやってくる。

「ちょっとまで、俺達はアルマーニユからの使いだ。この先にあるミジュランに用がある。この町で休ませていただきたい」

こういった時の対応はRPGで学習済みだ。

「ほう、では令状を出してもらおう」

「ん、これだな」

俺はポケットからくしゃくしゃになった紙を取り出した。

「たしかに。では、入るがいい」

兵士の人ってホントにお堅いのな。

この町はイルバムというらしい。

俺達は町の中央近くにあった宿に泊まることにした。

「うじゃ、とりあえずここに泊るか」

俺の提案に文句を言ったのはリリイだった。

「こんな小汚い宿に泊まれるかぁ！お前正気か？絶対ゴキブリとかでるぞ！？」

「へえこつちにもゴキブリっているんだ。つか宿の人に謝りなさい。これから先はもっとひどくなるかもしれないんだぞ？文句があるなら城に帰るこつたな」

「……わかったよ！泊ればいいのдар！？」

リリイは膨れてしまったが、まあ社会勉強だ。
慣れてもらっほかないだろう。

部屋は俺とレルム、リリイとミズハちゃんのチームで借りた。隣の部屋だからなんかあったらすぐわかるはずだ。

「ういじゃまた後で飯の時間にな」

「え、私リリイさんと同室なんですか？」

ま、ミズハちゃんの疑問ももつともだ。

だってまだ初対面から数時間しか経ってないのだ。

「うん、これから一緒に旅するわけだしね。ま、リリイはいい子だからすぐ仲良くなれるよ」

「はい、分かりました。ミツキさんがそういうなら。……はあ、ミツキさんとがよかったなあ」

ミズハちゃんは何かぼそぼそ言っていたがよく聞き取れなかった。そんなミズハちゃんとは対象的にリリイは別に気にしていないようだった。

というよりさっきのをまだ怒っているようだ。

二人と別れて部屋に行くとレルムはすでに寝ていた。

……さっきも寝てなかった？

中学生か！ってくらいよく寝るねこの人も。

まあ晩飯の約束まで1時間くらいあるし俺も寝るか。

まだまだ不安の残る旅だがまあ何とかなるだろう。つてか宝の持ち腐れだな、俺。

もうちよつとチートラの使い方を研究しなきゃ。

……おやすみなさい。

10回目『ゲームと現実じゃあ強さってのは変るもんですよ、はい』（後書き）

うーんなんか書きにくい！

というのもですね大きなイベントが起こせないのですね、日常と言いますかそういうのって書きにくいんですよ。

まあ、書いてるうちにそういうのもうまく書けるようになったらいいなあーとか思ってます。

しばらくはグダグダになっちゃうかもしれないですけどどうかお付き合ってください！

ではまた次回！

11回目『チンピラ×ナイフ』恋する乙女

アルの吠え声で目が覚めた。

「ん……どうした、アル？」

俺が声をかけるとアルは時計の方を顎で指した。
「いったいどうしたというのか……」

「ああー！晩飯の約束！」

そう、俺は今イルバムの宿で昼寝をしていた。
ミズハちゃんとリリイとの晩飯の約束は七時に宿の前で、
「というこ
とになっている。」

今の時間は七時五分。

まあ五分くらいなら許してくれるであろう。

……ミズハちゃんは。

「おい、レルム！起きろ！晩飯行くぞ！」

俺は横で爆睡中のレルムをたたき起した。
「文字通り叩いてね。」

「痛！痛いんだよ！この馬鹿力め……」

レルムはぶつぶつ文句を言っていたが聞かなかったことにした。

支度やらなんやらで結局十五分程遅れてしまった。

「ちよつ、やめて下さい！」

「いいじゃねえかちよつとくらい。別にとって食おうつてわけじゃあねえんだ。なあ？」

表に出るとミズハちゃん達がチンピラっぽいやつらに絡まれていた。まあ、ミズハちゃんもリリイも可愛いからなあ……

つとそんなこと言ってる場合じゃなかった。どうにかしなきゃな

「お前ら私が誰か知っててやっているのか？私はアルマーニユの王女だぞ！」

リリイよ、そんなにあっさり正体ばらしちゃダメだろ。ってか向こうさんも相手にしてないし。

これリリイキレルんじゃない？

「ははっ、王女様がこんな町にいるわけじゃないじゃないっすか？ねえ？王女サマ」

リリイをバカにしながらそのチンピラAはミズハちゃんの腕をつかみ引っ張った。

「痛い！やめて！」

あゝあ、残念。

お前ら死んだわ。

レームが俺を止めようとするのが分かったが、俺はその腕をすり抜けて二人のもとへと走る。

俺が走りだしてレムムがそれに反応するまで0.03秒。

俺がレルムの腕をよけるまで0・1秒。

俺が二人のもとにたどり着くまで0・5秒。

俺がチンピラ2人を山の向こうに飛ばすまで0・8秒。

「ふつつつざけんじゃねええええええええええ！！！」

持てる力のすべてを使ってぶん殴った。

お、飛んでる飛んでる。

山越えちゃったよ。

メキメキとか、ボキボキとか聞こえたのはきつと気のせいだろう。

「ちっ、やりやがった。おい、ミツキ！お前何したか分かってるのか！」

「ふっ、ミズハちゃんに手を出すのが悪い」

レルムが後ろから走ってくる。

おお、軽く100mくらいあったっぽいな、これ。

「ミ、ミツキサぁん。怖かったですう。」

ミズハちゃんが飛びついてくる。

うう、俺が遅刻したせいで……

「おい、お前は何をしてるのだ！？私だって我慢していたというのに！」

怖！怖いよりリイ！

そ、そうか。

リイって強いんだよな。

その気になればあのくらいのチンピラ……

「三人とも！話は後だ！とりあえずどっかの店に入れ！」

レルムに引つ張られて俺達は近くにあった喫茶店に入った。

「なんだよ？どうしたんだ、二人とも？」

「「うるさい！だまってる！！」」

おお、シンクロ同調してやがる……

ミズハちゃんはまだグスグスいつている。

はうう、可愛い可愛い！！

はっ、落ち着け、落ち着くんだ自分！

しかし二人ともホントにどうしたんだ？

さつきから外きよろきよろして？

…… 10分後。

やっと落ち着いたミズハちゃんと喋っていたらまた怒られた。

なんだよ、もう！

「ふう、やっと行っただか……」

二人の緊張の糸がプツリと切れる。

「なあ、どうしたんだよ二人とも？ってかりリイならあのくらいのチンピラ楽勝じゃねえの？」

二人が顔を見合わせる。

どうやら状況を理解していないのは俺とミズハちゃんだけらしい。

「そうか、お前は这个世界に来て間もないのだったな。よし、私が説明してやろう。あいつらの肩にトカゲのタトゥーがあつたろ？あれは『サラマンダー』という犯罪組織のマークなのだ。やつらはおそらく下っ端だろうがこの組織は仲間意識が異常なまでに高くてな、どんな下っ端でもやられたら組織ぐるみで復讐しに来るんだよ。大陸で各種族の力の及ばない、ここのような街なんかはやつらに支配されていることが多い。結構な大規模集団でな、目をつけられると厄介なのだ」

なるほど、だから二人ともあんなにピリピリしていたのか。

「ま、今のは一瞬だからおそらく大丈夫であろう」

「そ・れ・よ・り！遅いぞ、ミツキ！からまれたのはお前のせいだからな！」

「スイマセンスイマセン。I・m sorry・マジスンマセン、反省しております、ハイ」

こういうときはヘタに弁明を図るより素直に謝った方がいいって前にテレビでいつてたな。

あは、俺反省してないな」

「あいむ……？時々お前はよくわからんことを言うな。まあいい。次からは気をつけるんだぞ」

「了解、了解」

俺達はこのままここで晩飯を済ませてしまふことにした。

「あ、そうだ。リリイさ、このナイフの使い方分かる？」

俺は以前雑貨屋で買ったナイフを渡した。

何書いてあるかは所々分かるんだがイマイチ使い方がよくわからなかったのだ。

「うゝむ、これは……ちょっと待ってくれ。調べてみる」

リリイが何かを唱えるとナイフのまわりに光の円がいくつも現れた。見方によっては虫めがねに見えないこともないかな？

「それは……」

「そう、お前が俺に目をつけるきっかけになった物だよ」

俺達は結果が出るのを雑談を交わしながら待っていた。

リリイは時々おお！とか、ホウホウとか言ってるあたり結構珍しいものなのかもしれない。

そして調査が終わった。

リリイの頬は軽く紅潮していて、興奮気味だ。

「これはすごいぞ！どこで手に入れたのだ！？こいつの古代語で書かれた魔方阵を解析してみたのだが失われた魔法で組まれているのだ。どうやら回復魔法を増幅させるために使らしい。ヒビロカネ、とも書いてあったがこっちはサッパリだ」

やっぱり専門家は違うねえ

あの魔法も俺の知識にはない。

きつとリリイの自作なのだろう。
つつか

「緋緋色金なら知ってるぞ」別名青生生魂。^{アポイタカラ}太古の日本で使われていた伝説の合金だ。アトランティスのオリハルコンと対の存在で緋色の金属だったな。俺のやってたRPGでは使用者の意思に反応して魔法を無効化することも可能だったハズ……」

「ホウ、それはすごい金属だな。してRPGとオリハルコン、日本

というのは？」

レルムが喰いついてきやがった。

「日本は俺のいた国だ。オリハルコンは今度説明してやんよ。RP
Gは気にしないでいいぞ」

「おい、盛り上がっているところ悪いがこれ使えんぞ？」

「「え？」」

レルムとハモってしまった。
リリイが続ける。

「さっきも言ったがこいつはロストで組まれているのだ。ロストの
理を理解したものでないと扱えん。ま、使い方としては魔力を流し
込むだけなのだが」

そうか……

きっと俺にも使えないだろう。

俺の使うロストは前魔王がそれをまねて作ったチートラの一部だからな。

理を理解してるわけじゃねーし……
ん？もしかして

「ミズハちゃんなら使えるんじゃない？」

「ふええ！？わ、私ですかっ？」

そこまでビックリせんでも……

「とりあえずやってみーや」

俺はナイフをミズハちゃんに手渡す。

「わ、わかりました。やってみますね」

ミズハちゃんはゴクリ、と音が聞こえてきそうくらい緊張していた。

何故にそんなに緊張してるんだ？

ミズハちゃんがナイフを握り目を閉じるとナイフの刃の部分がポウツツとピンク色に光り始めた。

「おお！？どういうことなのだ！？ミズハはいったい何者なのだー！」

「あの、この後はどうすれば？」

「あ、ああ。その光ってる部分を傷口に当てるんだ。しかし、まさか使えるやつがまだこの世にいたとは……」

リリイは目をまん丸にしている。

そこにレルムが入ってくる。

「ならさっきミツキが言っていた魔術の無効化もできるのではないか？」

確かに。

よし、物は試しだ！！

「じゃあ、今から俺が丸い光を出すからそれを消してみて」

「はい、分かりました！」

俺の手のひらから光の球が現れた。

こいつは無害だ。まあ、当たり前だが。

実体のない光であるため魔術無効化の効果があればただすり抜けてしまうということだ。

ミズハちゃんがナイフで光球を斬る！

パアアアアン！！

ナイフの刃が光球に触れた途端、風船が割れるような音がして光球が消えた。

「お、おお！すげえ！うん、こいつは使えるな！これミズハちゃんにあげるよ。護身用に持ってな」

「え、でもこんな珍しいものいいんですか？」

「おう！使えない奴が持つてても宝の持ち腐れってもんよ」

俺は鞘とともにナイフをプレゼントした。
リリイとレルムは放心状態だ。

「まさか、ロストがまだこの大陸にあったなんて……」

「常識外れだ。この二人は観察のしがいがあるな……」

リイとレルムは何か言っていたが、俺とミズハちゃんは二人で話していた。

「それより、さっきミツキさんが助けてくれたとき、すごくよかったです！」

「そ、そんなことないっしょ！ な、なありリイ？」

「おう、そだね」

……もうダメだこりゃ。

俺とミズハちゃんはこの抜け殻達を宿に持って帰ることにした。

後で聞いた話だがこのとき俺は顔が真っ赤だったらしい。
部屋の前で二人と別れレルムと自室に戻る。

「俺はもう寝る。疲れた」

レルムはそう言い残すとベッドに潜り一瞬で寝てしまった。

……まったく、俺のスピードに反応したりするくせにすぐ寝ちゃうって、すごいんだかすごくないんだかよく分かんないやつだ。

俺も寝るかな。

電気を消しベッドに入る。

するとアルも潜りこんできた。

……あったかいなあ。

ウトウトし始めたその時

『ミツキさん、ミツキさん。もう寝ちゃいましたか?』

ふお!?なんだ、なんだ?

今ミズハちゃんの声しなかったか?

『ふふつ、忘れちゃったんですか?プレスレットですよ』

ああ、そういえばこれそんな機能ついてたっけ?
それで?どうしたの?

『あ、いや特に用はないんですけど、せっかくですし使ってみたくて……ご迷惑でしたか?』

迷惑だなんてとんでもない!
どっかのアホ野郎と違ってミズハちゃんならいつでも繋げてきていいからね。

『あほやろっ?』

ううん、なんでもない。
気にしないでっ

「つかさー、こんな美しいレディ捕まえて野郎はないでしょーよ」
うっさい!

邪魔だ!
どっかいけえ!

『ミ、ミツキさん!?ど、どうしたんですか?お邪魔、でしたか…
…?』

いやいやいやミスハちゃんじゃないから！
気にしないで！

『は、はい。分かりました』

まったくややこしくなっちまったぜ。

「はいはい。どーもすいませんでしたーだ！じゃあね！フンッ！」
行け行け！どっか行け！

『どうしたんですか？さつきから？』

あ、ううんもう片付いたから大丈夫だよ

この後俺達はしばらく雑談をして通信を切った。

ミツキさん最初ちよつと様子が変だったかな？
でも気にするなって言ってたし、まあいいか。

やっと出会えた私だけの王子様。
今日も私を助けてくれた。

ちよつと乱暴なところもあるけど、飄々とした雰囲気のアナタで空
っぽだった私の心が日に日に満たされていくの。

私、恋してるんだ。

今までは恋だとかそんなことを考える暇はなかったけど、あの人な
らきつと……

少女はブレスレットを微笑みながらさすると、勢いよく布団をかぶった。

11回目『チンピラ×ナイフ』恋する乙女』（後書き）

今回はちょっと長いですね
がんばっちゃいました！><

HAHAHA！

テンションが変です！ものすごく！

あ、そういえば感想を書いて下さった方がいて、感想だけでなくアドバイスまでくれたんですよ！ほんとにありがとうございました！
いつもこんな風にイカれたテンションで書いてるんで、自分で気づかない変な部分とか結構あると思うんですよ、そーいうのも感想とか通じて指摘していただけるとうれしいです！
予告をすると次回はまた新キャラが増える予定……
ではまた次回！

12回目『悪人と過去と仲間達＋神様（自称）』（前書き）

今回は一気に物語が展開するんだぜ！

ってか最近タイトルが普通になって来た気がする……

ま、とりあえず最後まで読んでください。

んでもってまだお気に入り登録してない人はどうぞ今すぐにでも！
では、最後まで楽しんでってね（はあと）

12回目『悪人と過去と仲間達＋神様（自称）』

暑い。

ものっそい暑い。

あれ？今は秋なのに？

ゴウゴウ

ん？ゴウゴウって何の音だ？

……視界が赤いな。

そっかも夕方なんだな。

……つて、おいおいおい！！

燃えてるよ！？

え！？なにこれ？

意味分かんないですし、おすし。

つとそんなこと言ってる場合じゃなかったぜ。

OK状況を整理しよう。

まず昨日夜寝たろ、なんか暑くて起きたろ、燃えてた。
勘弁してくれよぉー俺暑いのが苦手なんだって！

HAHAHA

何故に俺はこんなにいつつもものっそい登場なんですかね？
呪われてんのかな？

つと、レルムとアルを忘れてた！

どこだ？燃えてたりしないだろうな。

「おい、レルム？アル？」

返事がない、ただの屍……じゃなくて誰もいないようだ。
燃えて骨もなくなったのか？

ちなみに今の状態は半径2mほどの炎の円に囲まれております。

とりあえず脱出だな、うん。

「テレポ！！」

おお、外から見るとこりはまた……

ほかの人たちはみんな避難したようだな。
泣きわめいたりしてる人がいないし。

つてあれ？

あれレルムじゃねの？

ミズハちゃんも。

え？え？もしかして俺だけ？

「あれ？レルムさん！？ミ、ミツキさんはどうしたんですかつ！？」

「ん？ああ、あいつなら別に大丈夫であろう。おそらく生きてる」

ミズハちゃんは心配してくれるんだねー

っーかよあ、

「よあ、レルム。元気そうだな？アルも」

笑顔で声をかける。

お、後ろから見ても汗ダラダラなのが分かるぞ。

「へ？あ、ミツキ……そ、そうか！無事だったか！心配したぞ！」

「ワ、ワオウ！」

「ハハハ、二人とも、そんなに汗ダラダラでどーしたのかな？心配してくれてありがとう、レルム。予想通り、無事だったよ」

二人の顔がみるみる青ざめていく。

「お、おう。なに、礼を言われるまでもないさ、ハハハ。だって俺達仲間だろ？ね、ねえミツキさん？」

「そうさ、仲間だ。寝てる人間を火事の中に置いていくような仲間さ」

後で聞いた話だがこのときの俺の笑顔は悪魔より怖かったらしい。

「お前らは火の熱さ知らねエのか！？おい、知ってるよな、ガキじやねえもんな？何とか言ったらどうだよ、ん？いくら俺がスゲー能力持ってっからって根本は人間なんだよ！てめえら魔族や魔獣よりひ弱なんだよ！熱いんだよ、スゲー熱かったんだよオ！アル、テムエこの前の術またかけるぞゴリア！ふざけんなレルム！お前俺と約束したよな？したんじゃねえのかよ！」

「そ、そんなに怒るなって。俺だって悪かったと……」

「俺にはそう見えなかったぞ？俺の目が節穴だったと？」

「べ、別にそんなこと言っていないだろう！なにをイライラしている

んだ。少し落ち着け、な？」

「あ、あのミツキさん？」

「なに！？ミズハちゃん！俺忙しいん、だけ、ど……」

俺の首筋には白刃が当てられていた。

ミズハちゃんとアルも知らない男につかまっている。

向かい側ではレルムも剣を突き付けられていた。

チツ！油断した。

このタトウーはサラムンダーか！

どうやら昨日の復讐に来たらしいな。

奥の方に昨日ぶっ飛ばしたやつらがいた。

って、リリイ捕まりながら寝てるよ！

レルム並みの睡眠への執着心だな。

「おい、こいつで間違いないのか？」

「ハ、ハイ！コイツっす！」

リーダー的なヤツが問い、昨日の雑魚が答える。

「ほう、お前か……人間とはまた面白い。こんな弱小種族にやられたのか？お前は」

あ、なんかカチンと来たぞ？
ってか雑魚あわてすぎじゃね？

さっきのレルムみたいになつてらあ。

「し、しかしローザンさん！こいつスゲー強えんスって！」

「いくら強くてもよオ、人間と俺達魔族には超えられない壁つっのがあるんだよ。つまりお前が弱すぎるってことだ。弱いやつは俺の部隊にやあいねえ。消せ」

「ちょ、ま、ローザンさ……やめっ、う、うわああ！！！」

俺はとっさにあの雑魚の体を闇で包み込む。

しかし町中でいきなり仲間の首を飛ばすって……

「おい、貴様ら、一緒に来てもらっぞ。おっと、変な真似すんじやねえぞ？こいつらの首が飛ぶぜ？」

「おい、ミズハちゃんに触るんじやねえ！ふざけんな！離せこのやる！」

「やめろミツキ！冷静になれ。ここでこいつらに逆らうのは得策ではない」

「ほう、お仲間さんは賢いようだな。しかし、よっくもまあ生きていられたもんだな、この火事の中」

ニタニタと笑うローザン。
まさか……

「おまえらが、やったのか？」

「おつしやる通りでございますよ、下等種族様」

そこで意識が途切れた。

「……さん、ミツキさん!!」

「ん……ミズハちゃん?」

ミズハちゃんの声で目が覚めた。
体を起こそうとしたその時、

「痛っ!」

後頭部がメツサ痛い。

よく見るとすぐ横に血の池ができていた。
でも血は出てねえし……

「あ、だめですよミツキさん!まだ起きちゃ。ここに入れられたときミツキさん血だらけだったんですよ?一応処置はしましたけど……でもまだ起きちゃだめです!」

俺はミズハちゃんに頭を押し戻された。

床にしては柔らかくてあつたかいな。

あれ?これはもしや……

ひ、膝枕アアア!?

世界が真っ赤に染まる。

ああ、血か。

鼻血って漫画かよ……

「ミツキさん!？」

ハッまた気を失っていた。

やっぱ顔が血だらけだぜ。

「まったく呑気なやつらだ。で、どうするんだ？」

レルムが壁の端に腕を組んで寄りかかっている。

「え？ああ、そっか。俺達あいつらに捕まって……どうなったんだ？」

「やつらのアジトの牢屋に閉じ込められているってハナシだ」

「ん、OK。リリイは？」

「起きてるぞ……全く、目が覚めたらこれだ。どうなっているんだか」

ハアとリリイがため息をつく。

うん、全員無事みたいだな。

そうとわかれば、

「ここに留まる理由はないってワケだ」

「そつだな」

「ですね」

「異存なしだ」

「だがどうやって？」

レルムの問いに俺は行動で答を返す。

「OK、じゃ、行こうか。レダクト」

俺が呪文を唱えると部屋の出入り口に付いていた柵が粉々に吹き飛ばぶ。

……ものっそい音がしたけど気にしない方向で行こう。
横でレルムのため息が聞こえた。

抜け出して2分もしないうちに敵が現れた。

つつか敵がいる部屋に突っ込んだ。

道がわからないから壁を壊しながら進んでいたのだ。

「ラリホー！」

敵を眠らせながら順調に進んでいく。

窓から外が見えたその時、ローザンその他2名が現れた。

俺達はミズハちゃんを後ろに下げ俺がローザン、ほかの二人はレルムとリリィで戦闘を開始する。

「ハッ、来い！ 下等種族めが！」

なんでこいつらは俺の事下等種族呼ばわりするし……
俺はポツケから龍児を取り出して切りかかる。

横でレルムがその剣は！って叫んでたけど今は無視。

ローザンが俺の剣をレイピアではじき、突きの構えになる。

ものすごい速度の突きが頬を掠め、わずかに切れる。

痛！……そうだ。今までチートラを使って何となくやってきたが、これはもう、現実なんだ。切られれば血を流し、心臓を破壊されれば死にいたる。

はじめて、死、いや現実を直視した。

負けられないな……

剣で（今は日本刀ver.）切りつけるもしゃがんでよけられる。

お互いに間合いを取って再びぶつかり合う。

俺がローザンのレイピアを剣の腹でたたき落とす。

そして一気に鳩尾をグーで殴り、戦闘終了。

リリイとレルムの加勢に回ろうとしたその時、ミズハちゃんの後ろに人影を見つけた。

ミズハちゃんが気付く様子もなく、男はナイフを振りかざす。

俺は叫ぶよりも早く駆けだしていた。

「ミズハちゃん！！！」

俺は手に持っていた剣で思い切り叩いた。つもりだった。命までは奪わぬように日本刀の峰で打ったつもりだった。

しかし俺の体はその考えを腕に伝える前に行動してしまっただけらしい。

ミズハちゃんが腰を抜かしてストン、と落ちた。
俺の体にやつの血がかかる。

刃物で肉を斬り裂いた時のあの感触、あの匂い、血の生温かさ。
それらが俺の記憶を呼び覚ました。

真っ赤に染まった白いワンピース。

同じように真っ赤な俺の手。

部屋の中に溜まったあの匂い。

ミズハちゃんと出会った時よりも鮮明に、はっきりと、心のフィル
ターを通す事無く俺の胸を抉る。

怖い。心の底からその感情があふれてくる。

足が震える。

力が抜けて立っていられない。

俺は人を殺したんだ。

同じ種族ではないと言えしつかりと人の形をしていて赤い血の通っ
た生き物だ。

俺の能力があれば命まで奪わなくてよかったはずなんだ。

「俺が……殺したのか……？」

涙が溢れるのを抑えきれなかった。
俺は子供のように泣きじゃくった。

「ミツキ……」

敵を片付けたリリィとレルムが近寄ってくる。

ミズハちゃんもいつの間にか立っていて、俺の方に歩み寄ってくる。

「ミツキさん……」

来てほしくなかった。

こんな自分を見られなくなかった。

俺は人殺しなんだ。

何度も罵られたその単語が頭の中をぐるぐると回る。

「来ないでくれ……俺は、人殺しなんだ。君らとつるむ資格なんて、もともと俺にはなかったんだよ……！」

抵抗する俺をミズハちゃんがそっと抱き寄せる。

「来るな、なんてひどいですミツキさん。ねえミツキさん？私達が出会った時のこと覚えてますか？」

ミズハちゃんが優しく語りかけてくる。

俺には優しくされる資格なんかないのに……

「私あの時、人を消しちゃったんだって、すごく自分が怖くなってたんです。でも、ミツキさんが助けてくれました。あのときミツキさんがいなかったら私にはいません。あのとき私が自分のことを化け物だって言った時、ミツキさんは本気で怒ってくれましたよね？なのに……自分のことを人殺しなんて風に責めないでください。そんなの、ズルイです。人にはさんざん言っておいて自分は全部一人で背負い込んでるんじゃないですか。もっと私を頼って下さ

いよ……それとも私なんかじゃ頼りになりませんか？私はいつだってミツキさんを頼りにしてるんですよ？」

この娘は、本当によくできた子だ。

溢れていた恐怖感がどんどん消えていく。

ああ、俺は一人じゃないんだ。

俺にはもう、こんなにいい仲間たちがいるんだ。

リリィとレルムは優しく俺達を見守っている。

また、涙が溢れて来た。

でもさっきまでの涙とは違う。

俺はミズ八ちゃんをギュツと抱きしめ、柔らかい髪に顔をうずめた。

優しく頭を撫でるとくすぐったそうに目を細める。

その時あの人の声がした気がした。

もし、元の世界に帰ることがあったら、きつちりカタをつけよう。
雪佳があの後どうなったかも、目を背けずに直視するんだ。

アサダミツキ……

本当によくわからない男だ。

あれほどまでのチカラを有しておきながらたったひとりの命を奪っただけで泣きじゃくるとは……
それにあの剣は……観察はまだ続ける必要がありそうだな。

呑気な顔して寝やがって。
ただ、こいつはいいヤツだ。
それだけは確かだ。

まだまだ分からないことの方が多いが今はこいつについていくのが
最善策だろう。

いつかきつと俺達を救ってくれると信じて……

さてと、俺も寝るかな。

12回目『悪人と過去と仲間達＋神様（自称）』（後書き）

えゝはい

とりあえずこれで弥月君が過去の出来事と一旦おさらばします。

一旦だからまたあるんだけど……

「ま、彼の過去についてはまたいつかね！」↑自称神サマ

次回からまたしばらくのほほんな旅が続くと思いますがどーぞこれからよろしくお願いしますね！

「うおい！え？なに？スルー！？私の登場についてはスルーなのかい！？」

うるさいなあ……

「うるさいって……ねえ、ミツキ君もアンタもなんか私のこと舐めてるみたいだけど一応神だからね？」

でもアンタを作ったのは俺だ。

「う……」

では、なにはともあれこれからこのSFアク「コメディー」ね」

…… テメエだったのか！

「バレたか！」

ま、いいや。

ではまた次回～

「そーいや新キャラはどうしたの？」

うっさい！うっさいうっさいうっさい！

「ねえ、うっさいじゃなくて新キヤ」

うわああああ！！

「なによいきなり！」

じゃあまた次回～！

「強制的に終わらせやがった…このコメディ―作者め！」

ファン「コメディ―」

S F ア「コメディ―」

ちきしょう！

こうなったら、ラブコメだああ！

「コメディ―入ってんじゃん。」

しまったあああ！

「ってか何回お別れすんのよ。」

…

「作者再起不能により今回は私が！ゴホン…ではまた次回」

13回目『ヤンデレスイッチとかBBQとか。全部まとめてキャンピングファイヤ

えゝ今回はチヨイ長いかもです。

でもまあ、ね？

ではでは最後まで楽しんでいてね（はあと）

13回目『ヤンデレスイッチとかB B Qとか。全部まとめてキャ〜ンプファイヤ

「アサダミツキとその一行はいるか？」

ドアの向こうから聞こえたその声で目が覚めた。

「はいはい、いますよー」

俺は寝ぼけ眼をこすりながらドアの向こう側を確認した。

……昨日の兵士さんだ。

俺はとりあえず兵士さんを部屋に通した。

仲間を集めろと言われたのでレルムとアルを起こし隣の部屋のリリイとミズハちゃんをこっちの部屋に呼んだ。

「で？いきなり何用だ？俺は眠たいのだが」

おいおいレルム

そりゃちよいとやばくないか？

しかしレルムのそんな態度になど一切動じず兵士は続けた。

「お前達にはこの街を出ていってもらう」

「「「「へ？」「」「」」

四人同時にハモってしまった。

「ちょ、ちょいまっち！なんで？なんでなん？昨日ちゃんと令状渡したよな！？アレ偽物じゃねーぞ？」

つい関西弁が出てしまった。
いや、関西出身じゃないけどね？

「ああ、確かに本物を受け取った。しかしお前達は少々騒ぎすぎだ。これ以上ここに留まられるとこちらが危険に晒される。アルマーニには世話になってる面もある故すぐには言わん。今日中に荷物をまとめ、必要なものがそろい次第出て行ってくれ」

兵士はそれだけ告げるとさっさと帰ってしまった。
その後には固まった俺達4人。

「ど……」

「「「ど？」「」」

「どーしよおおおおお！！俺のせいだ！やべええええええええええ！！」

「お、落ち着けミツキ！そんなことでうるたえてる時間も惜しいぞ！今後のルートを決め、それに合わせて買い物も済まさなきゃならん！どーする！？」

「だまれ！うつさいぞお前ら！男ならもつと冷静に対処するのだ！なあ、ミズハ？」

「え、あ、はい。えつとここからミジュランまではまだ少し距離がある。ここから500？程行ったところにある港町を目指すのがいいんじゃないでしょうか？それなら3日後には着くでしょうし」

地図を広げながらミズハちゃんがテキパキと提案する。

思わず感嘆の息が漏れる。

まったく、ホントにいいお嫁さんになれるよ、うん。

俺は無意識の内にミズハちゃんをよしよししていた。

ハアゝ和むわゝ

つて和んでる場合じゃなかった。

「じゃあ荷物まとめて足りないもの補充するだけでいいか。ホイこれ」

俺はミズハちゃんに四次元バッグを渡した。

リリイは訝しげな視線をバッグに向ける。

「なんなのだ、これは？つておいミズハ！引っ張るなって！」

ミズハちゃんがリリイを引っ張っていく。

さてと、

「俺達も始めますか。」

……

片付けは5分ほどで終わった。

ミズハちゃん達も俺達が出るのと同時に少し遅いくらいで出て来た。

「ういじゃ、行くか」

俺達は宿をチェックアウトして、食料やなんかを補充して町を後にした。

「それで？これからはどうするのだ？」

馬車に揺られること2時間。

レルムは相変わらず居眠り運転続行中だ。
しかしよくこれでちゃんと進むよなー。

「うーん、そうだな。まあまずその港町に行く。港町つつーくらいだしよ、きつといるんな物売ってるべや。そこで役に立ちそうな物とかいろいろ買い漁って出発。んで、ローマディウムをぬけてアীগス村に行くと。ま、そんな感じ」

俺のパーフェクトプランを聞かせるとリリイは面食らったような顔をして凍^{フリーズ}った。

そしてバツと表情を変え突っ込んでくる。

「いやいやいや！それはまずいだろ！ローマディウムをぬけるって正気なのか！？迂回する道もあるのだぞ！？」

そう、当初はその予定だった。

しかし予想外に戦況はあまり良くないらしく、そのルートでは間に合わないかもしれないと城から連絡があった。

「ま、どちみちスレスレを通るんだ。それにやつらだってまさか突っ切っていくとは思わんべ？」

リリイは納得したような困惑したような難しい顔をしていた。

「うゝミツキさん、お腹すきました」

その横でミズハちゃんが呑気な事を言い出す。
だがまあ時間もちょうど12:30とお昼時だ。

「おいレルム！どつかその辺の森で止めてくれ！昼飯にすつぞ！」

「ふぁ！？う、うぉ？おう！おうおう！」

……ホントに大丈夫なのだろうか。

「くぁー！やっぱミズハちゃんの料理はサイコーだぜ！おいお前ら、ちゃんと味わって食べよ！」

「ミズハの料理がおいしいことくらい分かっている！それにこの前私はクッキーを焼いてもらったのだ！いいだろ」

「んな！？そんな話聞いてねーぞ！リリイ、手前えズリーぞ！俺だつて喰いたかつた」

「ミ、ミツキさん！また今度焼いてあげますから！リリイさん死んじゃいますよ！」

「ん？あ……ワリイ」

俺は振りまわしていたリリイを椅子におろしてやる。

「おまつ……絶対許さんからな。覚えとけ……」

「まったく飯くらい静かに食べんのか……」

俺とリリイのやり取りを見ていたレルムがボソツと言う。

そう、俺達は今森でランチ中だ。

これだけ聞くとレジャーシート広げてサンドイッチとか、切り株に座っておにぎりとかさういうのを想像するかもしれないが無論俺達はそんな幼稚な真似はしない。

今も某錬金術で作った椅子とテーブルに腰掛けて優雅にお食事中なのだ。

同じく某手のひらパッチン式の術で作った台所でミズハちゃんが料理をしてくれる。

そしてまあこんな感じになったと。

「しっかしまあホントにうめえぜ。いっちょ店でも開くか……」

俺の適当な言葉にリリイが乗ってくる。

「おお！それはいいな！毎日食べ放題ではないか！」

「バカめ！金を払わずに食っていいのは俺だけだ！お前はちゃんと払うんだぜ、リリイ」

「んな！ミズハはお前のものではなからう！みんなのミズハではないか！」

だんだんとまたさっきのようになっていく。

「はあ……」

椅子を持って移動するレルム。

「いんや！ミズハちゃんは俺のだ！だれにも渡さん！」

「ふざけるな！いいだろう！国に戻ったら王宮命令で私専属のシェフにしてやる！」

その後も俺達二人はギャーギャー騒ぎ、レルムは黙々と食べ続け、俺達の騒がしい昼食は終わった。

そして話題の中心だった本人はというと。

「わ、私がミツキさんのモノ……誰にも渡さないって……もうっ、ミツキさんったら！ウッフ、ミツキさんの、私はミツキさんだけの……」

……オーバーヒートして軽くヤンデレていた。

また7時間ほど走っただろうか。

あたりはさっきまでの明るさは消えうせ一面真っ暗になっていた。

「レルム、そこを左に200mの地点に広いスペースがある。今日はそこに野宿だ」

野宿、とは名ばかりのもので実際は俺の建てたログハウスに寝泊ま

り、という形になるのだが。

まあそれでもやっぱりキャンプ的要素を楽しみたい俺はBBQに、
キャンプファイヤーを提案したのだ。

「バーベきゅー？なんなのだ、それは？」

リリイが頭に？を乗せながら聞いてくる。

……しまった。

この世界にバーベキューはなかったか。

「うーん、説明つてのも難しいな。えっと、肉やら野菜やらを串に
刺したりして網に乗せて焼いて食う！それがバーベキューってもん
だ」

リリイがしばらく考え込む。

他の二人は理解できたらしく、ニービングルのようなものか、など
と言い合っている。

似たようなものはあるんだな。

「それは結構面白そうだな……よし、ではそのバーベきゅーとやら
をしようではないか！」

お、一番嫌がると思った小娘が一番乗り気だ。

じゃ早速いきますか」

赤く揺らめく炎が妙に綺麗でなんだか鼓動が早くなってくる。

「しかしまあ、このばーベきゅーとやらも楽しいものだな！」

リリイが満足そうな笑顔で言う。

「だろ？BBQとキャンプファイヤー。この二つは野宿するなら外すことはできない二つだな」

「あ、そういえば」

ミズハちゃんが何かを思い出したように切り出す。

「ホラ、この前ミツキさんあの雑貨屋さんで、えっと、ギター？でしたっけ、もらってたじゃないですか。また弾いてくれませんか？」

ああ、そういえばそんなのもゲットしてたな

でもエレキつーのは基本アンプとエフェクターがなきゃ始まんないんだけど……

あ、つくればいいのか。

俺はバッグからウォーンチェリーのSGをとりだし、自作のアンプ&エフェクターにつなげた。

うっ、みんなの視線が痛い……

ジャララ〜ン

ディストーションをかけ軽く弾いてみる。

チューニングOK、ディストーションのかかり具合OK。

俺は一気に腕を振りおろし、歌う。

共に旅したあの日の思い出
君はまだ覚えているかい？

今でもたまに夢を見る
遠い遠いあの戦いのきおくを

これはいつだったか忘れてしまったが友だちと作った曲だ。
ずっと忘れてたのにこの世界に来て急に思い出した。
それをロック風にアレンジして歌ってみた。

「わーすごいです、ミツキさん！とってもかつこよかったですっ！」
ミズハちゃんがパチパチと拍手してくれる。
それとは対照的にリリイ、レルムはなんか知らんが感動していた。

「まさかこんなにカッコイイ曲がこの世にあったとは……」
しかしリリイの方は違うようだ。
スゲー怖い顔をしていた。

「おい、ミツキ。お前どういっつもりだ？多少アレンジされていた
とはいえ今のは勇者の歌だろう！？何を考えているのだ！これから
倒そうという相手を作った曲を歌うなど！」

……え？
何言ってるんだコイツ？
意味わかんねえし。

「何、言ってるんだよりリイ？意味、わかんねえよ……？」
勇者が作った歌？

チガウ、コレハオレトアイツノ……

気がつく洞窟で知らない男と話していた。
知らないはずなのにどこか懐かしいような……

『なあステルス？お前はさ、この旅が終わったらどうする？』

俺の名前はステルスじゃない。

弥月だ。

浅田弥月なんだよ……

『さあな。ただもうあの世界には帰れないんだろ？どっかその辺で
なんでも屋でもやるさ。そういうジョットはどうするんだ？』

『俺か？そうだな……俺もお前に付き合うよ。二人で万事屋開こう
ぜ』

『本気かよ？ま、いいけどな』

自然と二人の間に笑いが生まれる。
洞窟のひんやりとした空気が妙に心地よかった。

『お前にだけ俺の作った詩、教えてやるよ』

男が詩を読む。

でも俺には詩が聞こえない。

『へえいい詩だな。そうだ、俺が作曲してやんよ』

『お、頼むぜ？くれぐれも俺の詩を台無しにしてくれるなよ。』

『言っただな？こなるーが！』

俺が肘で軽く小突く。

そして洞窟の奥へと進んでいく。

『ど、どうかお助け下さい！お願いします！』

『お前らに用はない。ヤツさえ倒せばそれでいい』

そして俺達はその扉を開いた。

討伐自体は特に深手を負うこともなく終わった。

『じゃあ俺達は帰るぜ。アンタらの命はとらない。これからは自由に生きるんだな』

やつはそう言つて扉に背を向けて歩きだした。

俺もそれに続く。

後ろからの殺気！

『ジヨット！あぶねえ！』

俺の胸にやりが突き刺さる。

『え？ス、ステルス？おい！ステルス！はやく、早く回復魔法を！』

『無駄だ。これ、呪い、かかってやがらア……ワリイな、万事屋、でき、ねえかも、しんねえ。俺の、左、のポケ、ットに、オーブ、入ってるから』

血が止まらない。

喋ることもしんどくなってきやがった。

『これか？』

『ああ、この前、約束、したろ？曲、つくってやるって。ちょっと、へぼい、けど、我慢、してくれ』

オーブから曲が流れる。

『だめだよ、こんなんじゃ……もっと、もっといい曲作ってくれよ！だめだ、まだ逝っちゃだめだ！やっと始まったばかりじゃないか！俺は、俺はまだお前に……』

『ワリイ、俺、もう無理だ……。ジヨット、憎しみに憑かれるな、よ……？』

全身の力が抜けた。

だらりと垂れた俺の右腕を何度も持ち上げるあいつ。

『チクシヨウ、チクシヨウ！なんで、なんでだよオオオ！お前らには手を出さないつつたろ！ふざけんじゃねえ！ステルス、ステルス……』

あいつの泣く声がホールに響く。

頬に落ちた涙が氷のように冷たい、気がした。

そして俺は、死んだ。

13回目『ヤンデレスイッチとかB B Qとか。全部まとめてキャ〜ンプファイヤ

今回ミズハちゃんのヤンデレスイッチが……？

この前までCMでやってましたもんね。

「君のはどこに、あるのかな？探してあげるよ、君のヤンデレスイッチ〜」

ってな感じの奴www

とまあこんな感じで今回は物語の核心をつつく内容となっております。

ま、これからこーいうのがちょいちょい出てくるんで、パズル的に楽しんでみては？

そして大事なお知らせ！

ちよいと年度末やら大会やらに向けて生徒会やら部活やらが忙しく、なかなか更新できないのが現状です！

3〜4月までは週末更新になるかと思いますがどーぞこれからも温かく見守ってあげてね？

ま、そんなこんなで

「ではまた次回〜」

あ、取られたw

14回目『遠足がてらお空の旅でも。あ、飛行機は使えませんでした承ください』

雀のチュンチュンって泣き声で目が覚めた。

……あれ？

俺誰かと話してなかったか？

洞窟とか城とかで。

えっと昨日キャンプファイヤーして、ダメだ。
ギター取り出したところから記憶がねえ。

俺はとりあえず外の空気を吸いに行くことにした。
朝の冷たい空気が肺をいっぱいにして、染みわたっていく。

「おお、起きてたのか。昨日はびっくりしたのだぞ？いきなり汗ダ
ラダラになって倒れたりするから」

深呼吸をしていたら後ろから声をかけられた。

「リリイか。何で俺倒れたか分かる？ってか何故に森から出てくる
し」

リリイは少し考え込むようにした後言った。

「何だ覚えていないのか？覚えていないのなら別に話す必要はない
な……過労か何かではないか？」

途中何かをつぶやいているようだったがよく聞き取れなかった。
ってかもう一つの質問にも答えるよ。

ま、いつか。

「そつか、まあ、しつかり寝れたしもう倒れないと思うけど。世話かけたな」

「ん、運んだのはレルムだし礼をするならレルムにするのだな。それにミズハはお前のこと心配して、さっき私が起きて止めるまですつと看病していたのだぞ？」

「ん、二人にも後で謝らなきゃな。つかこんなんじゃ魔王失格だな」

「そうだな。これから気をつけるのだぞ？」

俺とリリイがログハウスに戻るとミズハちゃんが起きて俺を探していた。

……レルムはまだ寝てるが。

「ミ、ミツキさ〜ん。よかった大丈夫だったんですね。わ、私昨日ミツキさんが倒れちゃって心配で心配で……うう」

ミズハちゃんは俺を見つけるなり跳びついてきて泣いてしまった。

俺はダメだね〜女の子を泣かせるなんて。

親父に怒られちまうよ。

「ごめんね、ミズハちゃん。俺のこと看病してくれたんだってね、ありがとさん」

わしゃわしゃと頭を撫でてやると、くすぐったそうに目を細めて笑う。

目尻に涙をためながら笑っているミズハちゃんはスゲー可愛かった。

俺は椅子に座りミズハちゃんが落ち着くまで俺の上に座らせて頭を撫でていた。

ミズハちゃんは少し恥ずかしそうに顔を赤くしていたがちょこんと俺の上に座っていた。

軽いな。ミズハちゃんは。

ふと横を見るとリリイが人を殺せるくらい冷たい目で俺を見ていた。ああ、そんなジト目で見ないでえ！

しばらくしてミズハちゃんも落ち着いたのでレルムを起こして朝飯を食おうということになった。

「おいレルム？朝だぞー、ほらさつさと起きれ」

「ん、ああミツキか。お前もう平気なのか？」

「ああ。昨日はお前が運んでくれたんだってな。サンキュー」

「なに、礼などいいさ。俺達仲間だろ？」

「そうだな。これからよろしくな」

「アルバーまではあとのくらいだ？」

「そうですね、この調子でいくと早ければ今日中に、遅くても明日の朝には着くと思います」

ミズハちゃんか地図を広げてテキパキと答えてくれる。

因みにアルバーというのは俺達が今目指している港町のことだ。予定よりかなり早い到着になりそうだ。

「そんなことよりミツキ、方角は大丈夫なのか？レルムは毎度のごとく寝ているが」

「ん、大丈夫だろ。いつものことだし」

俺はコンパスをポッケから出して確認する。

……って

「えええええ！？真逆の方向に向かつてるぞ！？さっき確認した時は大丈夫だったのに」

「そんなことより早く軌道を戻すのだ！レルム！180°。方向転換しろ！」

……返事はないが馬車はしっかりと方向転換した。

「ミツキさん、今いる位置わかりますか？」

「ん、たぶん。ちよっこし地図貸して」

俺はミズハちゃんから地図を受けとり現在位置を念写する。すると地図上に赤い点が現れた。その点は少しずつ移動していた。

「この赤いのが俺達を表してる」

「んゝ少しルートをずれてますけど、うん。問題ないです。というかこの道地図に載ってないですよ？この道がこの後も続くならかなり早く着くと思います」

「そうか。それならば問題は……ってちょっとその地図をよこすのだ！」

リリイが俺達から地図をひったくる。
何なんだよ、もう。

「おいミツキ！この赤いのはホントに私達を表しているのか！？」

「ああ。どうしたんだよいきなり」

するとリリイの顔は見る見るうちに青くなっていった。

「まずい、まずいぞ！ここは……」

「「ここは……？」」

「ローマディウムの中だ！！！」

なんだ、ローマディウムの中か。
つて、ええええええ！！

「え？え？それってかなりまずいんでねの？早く抜けなきゃ！」

「お、おう！そうだ！レルム！もっとスピードアップなのだ！」

「zzzz」

「うおい!!」

二人同時に突っ込んでしまう。

しかしまあこのままだと俺達はそのうち敵に見つかってしまいかもしれないわけで、ここで見つかったらほとんどゲームオーバーなわけ。

……どうしょ。

「二人とも落ち着いて下さい! こういう時こそミツキさんの能力^{チカラ}の出番じゃないですか! 何かないんですか?」

ミズハちゃんナイス!

「あーうん。あったあった」

俺はごそごととバッグから昨日のBBQで食ったサザエもどきの殻を取り出した。

二人が不思議そうな目で見る。

「あーお馬さん危ないな」

俺は馬を某青だぬきの某小さくするライトで小さくして馬車の中に入れた。

レルムは……普段なら放っておく所だが昨日の借りもあるしな。

レルムも中に引きずりこみ、俺はサザエを手のひらに包帯で巻きつけ進行方向とは逆の方向に突きだす。

そして某麦わらの一味狙撃手の技を放った。

「インパクト!!」

馬車は加速すると思いきや俺の予想をはるかに裏切り……
飛んだ。

ええ、文字通り飛びました。

眼下にはさっきまで俺達のいた森が。

そして森が終わり草原をも飛び越えその先に待っていたのは……落下。

重力つてすごいねーどんな時もちゃーんとはたらくんだねえー

「お前何をしたのだ~~~~!!」

「キャー!!」

「なんじゃこりゃー!!」

「ハッ、ゴメンみんな。死んだ!」

「~~~~うわわわわわわわわわわわ!!」

上から順にリリイ、ミズハちゃん、レルム、俺である。
そして地上まであと3mのところで気がついた。

「ウインガー・ダイヤモンド・レヴィオーサ!!」

馬車の落下速度は急激に落ち、ゆっくりと車輪から地面に着地する。
マジで死ぬかと思った……

「死ぬかと思つたわ、このバカ者!!」

俺はそのあとリリィの怒りの雷を食らいましたとさ。

「でもでも、みんな無事だったし」

「うつさい、黙れ!!マジで死ぬかと思つたのだぞ!?ここから先、アルバーまではお前が馬車を引け!!」

……なんつー肉体労働。

体罰は今の日本じゃ犯罪なんだぞ!

とまあ俺のそんな反抗も虚しく馬車を引くハメになりました。

ちなみにミズハちゃんとレルムはというと……

ミズハちゃんはジェットコースター的なノリで面白がっていた。本人いわくスリルがあつてよかったとのこと。

レルムは……

放心状態だった。

「勇者様!先ほどミジュラン、アルマーニユ間でなぞの飛行物体が観測されました。只今画像を処理中で、まだはっきりとは分かっていないのですが、どうやら馬車のようなようです」

黒服に身を包んだ茶髪の青年が片膝をついて報告をする。

「ああ、やつと姿を見せたか魔王。まあいい、泳がせておけ。まだまだ甘ちゃんだ。コーカサスまでたどり着けたら一度会いに行きましょう」

勇者と呼ばれた男は不気味に笑った。

「ステルス。今度の戦いですべて終わらせてみせる。魔王もろとも魔族を潰してやる。だがまあ久しぶりの魔王退治だ。楽しむことにするよ」

男は手帳から取り出した写真にそう語りかけると、再び手帳に挟み胸のポケットにしまった。

14回目『遠足がてらお空の旅でも。あ、飛行機は使えませんので了承ください』

今回はあんまり進まないです、ハイ。

でもまあちよつとずつやっついていきましょつや。

ではまた次回！

15回目『伝説の剣再び！つてか銃強くな？』

「ハアゝマジでやるのかよ……」

俺は渋々馬車から降りた。

「早くするのだ！遅いぞミツキ！」

「はいはい。分かってるって、せかすなよリリイ」

馬車から降りると目の前にそびえていたのはなだらかな丘だった。

まあ、丘なんだけど……

問題は長さだ。

軽く見積もってもつぺんまで1？近くあるぜ、これ。

ま、しゃーないか……

馬車の中からレルムの寝言と、リリイとミズハちゃんの会話や笑い声が聞こえてくる。

チクシヨウ！俺もゆつくりしたい！

こうなったらさっさと港町まで行って宿で寝てやる！

俺は思い切り馬車を引っ張った。

ん、意外と軽いじゃん。

俺の感覚で言うとなんて20？あるかどうかぐらいだ。

それに車輪がついてるからほとんど重さはない。

走っていくとつぺんまでは3分弱で着いた。

だんだんと視界が開けてくる。

その眼下に広がっていたのは……
活気溢れる港町だった。

「おーい、みんなー着いたぞー！」

「え？え？でもまだ予定よりかなり早いですよ？あ、すごい……」

中から出て来たミズハちゃんが感嘆の息をもらす。

でもまあそれも無理はないだろう。

まだかなりの距離があるというのにこの街の賑やかな声は微かにだ
がここまで届いているのだ。

「おお、これはアルマーニユの街、いやそれ以上の活気だな……」

いつの間にか出てきていたりリイも街のデカさと活気に気圧されて
いるようだった。

レルムは相変わらず寝ているが。

「ここなら十分に食料やらなんやら買い込めるな。うし、じゃもい
つちよ走りますかねー」

二人を一旦馬車に戻し、俺はまた馬車を引き、走り出す。

この街はなんつーか、ウェルカム思考ってか、不用心ってかなあ……
人間がいつ攻めてくるとも分からんこの時代に門番の一人もいない
とは……

まあ商人の町だ。

やつらもそんなとこまで攻めるほど腐っちゃいないってことかな？

ま、どーでもいいけどね。

俺達は手頃な価格の宿屋を見つけ、荷物をそこに置いて街へと繰り出した。

街は広い通路で碁盤状に区切られており、さらに小さい通路で入り組んだ構造になっていた。

大通には露店が並び、輸入直後の食料や武器を売っていた。

俺達は一人30万グレイのおこずかいを持ってそれぞれの買い物に散った。

小遣いの額がパネエのはご愛嬌。

ちなみに食料の担当はミズハちゃんである。

「なあおっちゃん、これ何よ？」

「ん？それか？それはなあ古代戦争の当時、まだ魔法が珍しかったころに出回ってた武器だよ。銃って言ったかな？ただなあ、なんつっても重いし撃った時の反動はすごいしでもう……他の奴はそうでもないからそいつは粗悪品だな、たぶん」

俺は路地裏にあったりサイクルショップに来ていた。

ここには地方の物とかが結構流れてくるため珍しいものも多いんだとか。

そこで見つけたのがこの銃だ。

俺が持っているのはおそらくベレッタM92だと思われる。
まあ銃に関しての知識はあんまりないから、確証はないけど。

他にもいくつかあるのだがこれ以外はエアガンのような軽さだ。
おそらくこれひとつだけが俺の世界から流れて来たもんだろう。

「なあおっちゃん、これいくらで売ってくれる？」

俺が聞くとおっちゃんは目を丸くして聞いてきた。

「なあお前さんよオ、俺の話聞いてたのか？こりやまともな種族じ
や使えねえンだぜ？龍^{ドラゴニック}人族がいりやあ使えるかもだがな。ガハハハ
！」

なんかイラつときた。

でもまあ俺もガキじゃない。

ここは一つ大人な対処を。

「んゝ記念にさ、これなら他のやつより安くしてくれるんだべ？」

「ああ、なるほど。お前さん頭いいねえ。よし、5千で手を打とう
じゃねえか」

「お、おっちゃん気前いいねえ」

そんな感じで俺はおっちゃんと仲良くなっていた。

「ん、なんだこれ？」

「ああ、それは竜磁石ドラゴンボースつー代物だ。龍人族が作ったといわれる伝説のオーブさ。中に光の矢印があるだろ？その先にドラゴンの村があるんだとよ。ま、本物って保証はないけどな。2万グレイでどうだ？」

「買った！」

俺はその深紅に光るオーブをポケットにしまった。衝動買いは昔からの癖だ。つてかこの色に惹かれた。

「あ、でもドラゴンが村なんか作るのか？巢じゃなくて」

「ん？なんだ知らねえのか？本物のドラゴンはよ、御伽話やなんかと違って誇り高き生き物だよ。人の言葉も理解し、彼らが認めれば村へも入れるそうさ」

ほう、面白そうだな。

いつかこのオーブを頼りに旅でもしてみるかー。

「あ、そついや龍人族ってのは？」

「ん？おいおいお前さんは何も知らねえんだな。龍人族ってのは龍の祝福を受けた伝説の種族だ。竜と共に暮らしていると言うが……今じゃ伝承としてしか残っていないね」

「今は？」

「ああ、昔は旅人の中に龍人族がいるのも珍しい事じゃなかったそ

うだ。まあ昔つつつても俺の曾爺さんがガキのころだからな。今じや本物を見た奴は生き残ってないだろう」

「へえ……」

その後聞いた話によると、龍人族はいち早く勇者の事を予知して姿をくらませたそうだ。

勇者も龍人族の事は話でしか聞いたことないらしい。

「あ、この辺でお勧めの武器屋ってない？」

おっちゃんはいしばらく考え込んだ後に言った。

「チヨウサンボウ蝶燦封つて店がお勧めだな。店主が変わり者だから客は少ないが、あそこにあるのは全部本物さ。灯台の地下にある。ま、行ってみりやあわかるだろう」

中国っぽい名前だな。

ま、いつか。

俺はおっちゃんにお礼を言って店を出た。

……こりゃあ確かに。

「フオツフオツフオ、どうしたのじゃ？若造。武器が欲しいんじゃない？好きなものを選び！キエー！！」

なんか奇声発してるし……

ま、でもたしかにいいものがそろってる。
魔法付加品は5つほどしかないけど……

「なんかこれに合うやつお願い」

俺は龍児を渡した。

それを見るやジジイはいきなり騒ぎ出した。

「こ、こりは！なんちゅーもんを持つとるんじゃ！こいつは龍人族の鍛えた最高の剣ではないか……ほえーワシもホンモンは初めてじやよーヒョー！」

……怖いよお！

ああマジ逃げ出したい。

「そうか……これと対にできる物はそう多くない。そうじゃな、これなんかどうじゃ？」

そう言つて差し出されたのは今——俺好みのショートソード——の龍児と全く同じ形状の剣だった。

ただ龍児が漆黒であるのとは対照的に、この剣は水色がかった白銀だった。

重さ的には龍児と同じくらいでちょうどいい。
手にもしっくりくる。

俺がこれにすると言おうとしたその時、ジジイが口を開いた。

「こいつの名前はな……虎雄じゃ！」

15回目『伝説の剣再び！ってか銃強くね？』（後書き）

スイマセンすいません。

なんかむちゃくちゃでスイマセン。

でもまあうん、いんじゃない？

次こそは普通に……

ではまた次回！

16回目『青いタヌキははつきり言ってRPGにいたら最強だよねw』

(前書き

ちなみにこれは予約掲載されたものであり作者は現在サッカーを見ながら死んでいます。

「原稿が進まねえゝあああああ!」

16回目『青いタヌキははっきり言ってRPGにいたら最強だよねw』

ジジイが差し出してきた剣は小人族ドワーフの作った最高傑作だそうだ。

ジジイいわく龍人族の鍛えた最高傑作である龍児を拾っちゃ俺も大したもんだが……最高傑作ってこんな簡単に手に入っているの？

なんで龍児って名前なのか分かったよ。

もうチョイカツコイイのにすればよかったのに。

つか小人族も『虎雄』って……そこは張り合わなくてよかったんじやねえか？

ジジイはなんかいろいろと説明をしていたが要約するところだ。

この剣は魔法を吸収してそれを吐き出す事が出来ると。ただ形は変えられないんだそうだ。なんでも龍児の形状に反応して勝手に変わるらしい。

さすが対抗作……

そして龍児はと言うと、魔法に関しては全く何の意味もないが、切れ味はドラゴンのうろこを10枚重ねてもすっぱり切れるらしい。

俺はその真つ白な剣が妙に気に入ってしまい、即買い。

代金はかなりの額になるだろうと腹をくくった衝動買いだったのだが……

「ひよっひよっひよ、なに、そんなええモン見してもらたんじゃカネはいらんわあ！キョー、ヒャーハアー！！」

とのことだ。

テンションが高ぶっていたらしく、さっきよりもすごい奇声を発している。

……最後までホラーだな、この人。

俺はそのあと街をぶらぶらして宿屋の部屋へと戻った。

宿に帰ったのは俺が一番で、暇になった俺は部屋で今日の戦利品を整理することにした。

鳳雷剣にベレッタM9、竜磁石、紐を抜くとその人そっくりになる人形、なぞの卵——大きさはダチヨウの卵大、俺の身長より大きなフォーク、ものすごい異臭を放つジューズ——6缶パック、少しボロめの海賊船。

……自分でもびっくりするほどの衝動買いの能力はきつと習得率100%なのだろう。

いらねえ……

そしてお小遣いは残金0ときたもんだ。

ジューズに至ってはどこで買ったのかすら覚えてない始末。この異臭はいたずらに使える！と思ったのは確かだが……

整理が終わってもみんなは帰ってこなかった。

仕方なく俺は部屋を精神と○の部屋に改造して船の修理をすることにした。

ま、タイム○呂敷をかけるだけなんだけどね。

「たったりらったらっ、タイム○呂敷」

俺は某青だぬきの声（C V・大山〇ぶ代）で高らかに宣言しながらハンカチをポケから取り出した。そしてそれを船にかける。

チツカチツカという音が部屋に響く。

結構な時間がかかりそうなので俺は竜磁石の改造をすることにした。つつつても収縮魔法をかけてピアスにただけなのだが。

お手製のマグピ——絶対外れない魔法付加の磁石だが——を右耳につけ船を見るとちょうどいい具合にキレイになっていた。

鑑定魔法を使うと、それでもまだ製造から160年ほど後の状態らしいが。

ってことはあれだ。俺が買ったのは製造から軽く2000年はたっている船だったってことだ。

あ、精神と〇の部屋状態を解除して気付いた。

……これ時間の流れ違うから暇つぶしになんねえーじゃん！！

16回目『青いタヌキははつきり言ってRPGにいたら最強だよねw』

(後書き

あ、ども神裂です。

いやあゝスイマセン。

マジスンマセン。

いや、というのもですneiderいろいろあつてしばらく更新できそうにないんですよゝ

ちよつと他に短編を書かなくちゃいけなくて……しかも4月まで。

この1週間頑張った成果はたったの10ページですよゝ

それを100何ページ……死ぬ！

つてな感じで今回もこんなになっちゃいました！テヘツ

ジジイの件はなんか裏設定忘れちゃったんで強制終了です、ハイ。

この原稿さえ上がればきつと……

てな感じでしばらく続きますが、オーストラリアさつき入りそうでしたね。

マジアブナイわ。川島さんガンバツテ！！

あつ、やめ、痛ツ！サッカーボールは人にぶつけるものじゃないよ！しかしラストストーリーはいいね。

もうレベル30超えたよ。エルザ38だよwww

なのにあまだある盗賊の倉庫がやつとこさ終わったとこという…

あのボス弱いね。誰もDOWNしなかったよーw

つてかほぼノーダメで垂直切り3回くらいで死んじやつたww三日月刀強し！！

とまあむちゃくちゃなレベル上げてチート気分を楽しんでおりまする。

ではまた次回ゝ

17回目『ジュースは効果をしっかりと理解し、用量・使用法を守って飲みましょ

あ、ども

いったい何人の人がこの作者は死んだと思ったことでしょう。

ええ、生きてました。

僕もビックリ！

まあ、テストも無事？に終わりましたしこれから復活すると思いま
すよー

これからまたよろしくですー

17回目『ジュースは効果をしつかり理解し、用量・使用法を守って飲みましよ

……ヒマだね。うん。

おはよーございます、浅田弥月です。

実はあれから昼寝をすることにしたんですよ、ええ。
だって部屋に入って出てくるまで2秒ですよ？まあ中では2時間くらいたってたんですけどー

しっかしまあよく寝たな。27日間位？いやいやそんなわけねえか。
時計を覗くとその短針は数字の6を指していた。

そろそろみんな帰ってくるかな？

一番最初に帰ってきたのはアルだった。
ってかアルも出かけてたのかよ！

とまあそんな感じでアルが帰ってきたわけですが…え？無視ってひどくね？

何故に素通りで寝ちやうの？泣くよ？

話しかけてみようとしたその時レルムが帰ってきた。

やっぱり女性陣は買い物長いんだね。

……いやあ予想はしてたよ？してただけどさあ。

ベッドではレルムが気持ちよさそーに寝息を立てていた。
何故だ！何故無視！？

「おい、起きろレルム。朝だぞ」

「zzz」

「レルム？おいレルムさん。……なあ俺なんかした？ねえ、レルム？起きてー、起き……ゴメンって！謝るから！おねがいします起きて下さい」

「zzzハッ、バカだろお前」

……いや、分かってるよ？

寝言だつてのは分かってるんだけど右手が勝手に……
ゴメンレルム！

ここでクイズです。

僕は今部屋の隅で体育座りして泣いています。なぜでしょう？

正解は皆と関われないからです。

あの後レルムを殴ろうとしたらスポって通りぬけちゃったんだよ。レルムは無傷。

ベッドは割れちゃったけどね。

そしてみんなが帰ってきてきて30分が経過しました。

泣き始めてからは40分。

時刻は7時。

皆が俺を探し始めてくれました。
でも見えないという……

もう二度と皆と関われないのかと思ったその時、体がフアーって光り始めた。

え、え、なにこれ？

あたりを見回すと皆がこっちを見て目を丸くしていた。

「ミ、ミツキ？お前どこにいたのだ！？心配していたのだぞ
！」

「痛っ！リリイ！とりあえずものを投げるんじゃない！俺はずっとここにいたっての！」

「ウソこけ！この部屋の中は全部探したわ！」

「俺だって訳わかんねーよ！気付いたら皆が無視するんだもんよオ
！」

5分程ギャーギャー騒いでいるとミズハちゃんが何かに気付いたらしく、俺達のもとに缶を持ってきた。

「これが原因じゃないんですか？うう、すごいにおい……」

「ふあ！？な、なんなのだそのくっさい缶はあ！」

「あ、それ俺がさっき飲んだやつじゃん」

「はあ！？お前こんなくっさいモン飲んだのか？」

「ああ、悪いか？」

「だってお前、これは……」

「あ、そっぴやなんでこれが原因なの？」

「あ、これ変な魔力を放っていたのでもしかしたらなあ」と

「うおい！私との会話は終わりか！すごいぶつ切りだな、おい！」

「魔力？」

「はい、効果までは分かりませんが、幻影系の魔法みたいです」

「ソイツは隠し草って植物のジュースだ。こんな珍しいもんよく手に入っただな」

いつの間にか起きていたレルムも会話に加わる。
寝ぐせたつぷりのその頭は、富士サンのような形をしていた。

「隠し草って？」

「ん？なんだミツキは知らないのか？ミズハもか？」

「いえ、私は知ってますよ」

「そうか、隠し草ってのはな、すごい強力な隠蔽魔法の魔植物だ。」

その草自身もその魔法の効果を喰らっているからぜんぜんみつからないんだよ」

「へえ、レアなもんゲットしたなー」

つまり俺はハイド状態にあっただってことだ。
ん？てことは魔法とか技使えば解けたのか？

今度試してみよう……

あ、あんなくっさいの飲まなくてもチートラでハイドもできるのか。

なぞが解けた俺達は晩飯を食いに行くことにした。
なぜカリリイはかなり不機嫌だったのだが

17回目『ジュースは効果をしつかり理解し、用量・使用法を守って飲みましょ

どーもです。リユカです。

いやーもうしわけない。

かなり間が空いてしまいました。

しかもそれ故キャラクターの話し方と少し変わっているかもしれないです……

少しずつもとに戻していきますので！これからもどーぞよろしくです！

ではまた次回！

18回目『ジョットとか覚醒とかほのぼの日記とか』

おはようございます。

浅田弥月です。

えーと、ハイ。現在アーガス村に向かって馬車を進めております。結局あの後二日程アルバーに滞在し、やることもなくなってきたしそろそろ行くかってことで街を出たのであった。ちゃんちゃん。

……ってちゃんちゃんじゃネエだろ、オレ！
どうもあの語り口調はダメだな、うん。

まああの後は特に面白いこともなかったのでここに飛ぶと……
あれ？誰に言ってた？オレ。

とまあそんな感じで現在アルマーニユの国境の目の前でございます。

「やっぱ緊張すんな、帰ろっぜ？」

「はあ？今更何を言い出すのだ。この道を選んだのはお前ではないか」

うぐう……意外と度胸あんな、リリィのヤツ。

「なんでもいいが、早く行くぞ。レルム、出せ」

「OK」

クッソ、レルムもかよっ！

ヤベー心臓バクバクだよ。

どーしよ。何でこいつらこんなに平常心保ってられるんだよ……

「ミ、ミツキさん。怖いですよお」

ミズハちゃんがすり寄ってきて俺の腕にしがみつく。

ここに仲間がいたぞおお！

「やっぱりオレの味方はミズハちゃんだけだ……ミズハちゃん！」

「ふえ！？ ミ、ミツキさんっ？」

「やめんか、コラ！緊張感なさすぎだろ！」

ミズハちゃんに抱きつこうとしたらリリイにおもつきし殴られた。

チクシヨウ……

こいつには言われたくねえ……

「敵地の中で漫画読んでるくせに……」

「ああ！？」

「はうう！ミ、ミズハちゃん！リリイが、リリイがイジめるよお」

「「ガキか！おい！」」

な、何故レルムまで出てくるし……
まあいいや、とか思いつつミズハちゃんのところへ逃げようとした

時、馬車が大きく揺れた。

「なんだ!？」

「逃げる、はやく!!」

レルムの焦った声が聞こえる。

窓から外を覗くとそこには人間の軍隊があつた。

……アメリカ軍だろ、これ。

一方その頃魔王城では。

ソファにふんぞり返ってる勇者に一通の知らせが届いた。

「あ?魔王が我が領地に侵入してきただ?……どうということだ……やつはコーカサスに戻るまではこちらには手を出さないでおこうと思つていたのだが……どちらにせよタダの兵士じゃ敵う相手じゃねえな。……仕方ねえいくか」

彼がそうつぶやくと、その姿はゆっくり背景に融けていき、消えた。

思つていたより人間は手ごわかつた。

とりあえずレルムを中に入れ、馬車にプロテゴ・マキシマをかける。

……なんかヤバいの出してきたやつだ。

ロケットランチャー、だよな？

こっちの世界じゃ威力は跳ね上がるから、ええと。これで防げるのか？

とか考えてるひまもなく、打ち込んできやがった。

飛んできたロケットランチャーは馬車に当たると、ポンッって音を立ててはじけた。

あれ？威力弱くね？

あーそつか。こっちの世界で作ってるからか。
よし、終わらせよっと。

俺はそんな感じで自己完結すると、呪文を唱えた。

「ラリホーマ」

とまあいつものノリで戦闘終了である。

「お前……。ホントに何者だよ……」

「あ？魔王で勇者ですが何か？」

「かつこいいです、ミツキさん！」

「へへへいい子だねえ、ミズハちゃんは」

「ちょ、ミツキさん、くすぐったいですよぉ」

「イラッ」

「押さえる押さえる」

俺とミズハちゃんはこの時気付いていなかった。
俺達のせいでレルムが犠牲になったことに……

その時だった。

馬車の屋根が吹き飛んだ。

「……え？ええええええええええ！？」

「よお、そこに魔王はいるかい？」

馬車の進路には一人の男が立っていた。

……コイツどつかでみたような。

「……ジョット？」

あれ、なんでだろ、口が勝手に……

「なんだミツキ、知り合いか？」

レルムが警戒態勢を取りながら聞いてくる。

「うお！？なんでオレの名前しつとるん？どつかであつたっけ？つてか人間……だよな？なに、拉致られてんの？」

「いや、別に……」

「ミツキさんは私達の仲間です！そんなことするわけないじゃないですか！」

「ミズハちゃん……」

ミズハちゃんの言葉を聞いた瞬間、ジョットは笑顔を消した。

「え、なにそれ。てか魔族ごときが俺様の許可なしに喋ってんじゃねえよ」

ジョットがミズハちゃんを指差し、その指から炎が放たれる。

「水遁・水陣壁！」

吐きだした水が炎を消す。

「テメえ、調子乗るんじゃねえ！プロテゴ・ホリビリス！インパービース、サルビオ　ヘクシア、スクルト、マジックバリア、フブーハ、ブリンク、シエル、バリア、ウォール！いくぜ、メラゾーマ！」

ミズハちゃん、レルム、リリイに俺の知りうる、出来る限りの防御呪文をかけ、ジョットに火の玉を飛ばす。

しかし、奴はそれを避け、懐から出した銃で狙い、撃ってくる。

あいつが使う銃だ、まず魔法やなんかでの防御は出来ないはず。

素早く判断した俺は、同じく銃を抜き、飛んでくる弾目がけて発砲する。

高い金属音と共に2つの弾丸が弾け、森に吸い込まれていく。

「その威力……同郷の人かな？　てかあんなに防御魔法を……。それでよく持つね」

「うつせえな！喋ってる余裕なんて、あんのかよ！インセンディオ」

俺はジョットの足元に火をつける。

しかし、それもジャンプで軽くかわされる。

「クッソ！」

「こんなに多くの属性を……レアだな。なあ、そんな奴らとは縁切
つてウチにこない？」

「断る、っ！」

再び飛んでくるやつの弾を避け、そのまま宙返りをしてコインをは
じく。

激しい雷がジョットのもとへと飛んでいく。

「いいねえ、魔王とあらばこうでなくちゃ。やっと楽しくなって来
たぜ」

オレの超電磁砲も虚しくやつの風の魔法にはじかれる。

やつが右手を振り上げた瞬間、体の自由が奪われた。

しまった！やつの魔法か！

しかしジョットは俺を見て、目を見開いていた。

「おま、どういう、こと、だ……？」

奴の言葉を最後に、意思が奪われる。

何者かに、操られているようだ。これもアイツか……？

「久しぶりだな、ジョット。ずいぶん荒れているようじゃないか？
万事屋はどうしたんだよ、あ？俺の最後の言葉はシカトか？頭冷や
してこい、っ！」

俺は右の人差し指を振る。

それに合わせてジョットが吹き飛ばされる。

みるみる小さくなって、消えた。

「ジョット……。お前は、」

そこでオレの意識は途切れた。

18回目『ジョットとか覚醒とかほのぼの日記とか』（後書き）

うん、あとがき書く元気がない。

つつーわけで

また次回～

19回目『それぞれの想い……あ、リリイ以外ね、ホントごめん!』（前書き）

いったいいつからこのラノベはラブコメになったんだ……

19回目『それぞれの想い……あ、リリイ以外ね、ホントごめん!』

あ、どーも浅田弥月でございやす。

えーと、記憶がないんですよ、ええ

まあないつつても昨日アメリカ軍もどきに襲われたところだけ
ど……

そして謎がもう一つ。

皆がなんかよそよそしい。

なんか知らない人と話してるカンジ？

そんなギスギスした雰囲気のまま、アーガス村はすぐそこです。

「な、なあみんな？どうしたんだよ、おい」

「ん？別にどうもしていないぞ？」

「ああ、どうもしないな」

「え、ええ。なんでも……ないですよ？」

みんなこんな具合だ。

いったいなにがあったのだろうか。

よくわからんがまあ、アーガスに着いたら聞いてみよう。

俺はこの時そんな風に短絡的に考えていたんだ。

……どういうことだ。

急にミツキの雰囲気が変わったと思ったたら勇者の動きが止まった。何かを感じたようだ。いったいなんだ？

「頭冷やしてこい、っ！」

ミツキがそう言って指を振ると、巨大な魔力が発生して勇者が吹き飛ばされていった。

勇者が太刀打ちできないほどの魔力の塊を……

いったいミツキはどれほどの魔力を持っているんだ……？

「ジョット……。お前は、」

そう悲しそうにつぶやくと、ミツキはいきなり崩れ落ちた。

「ミツキさん……！」

毎度のごとくミズハが一番に駆け寄る。

俺とリリイも少し遅れてそれに反応する。

倒れたミツキの頬には涙のあとがあった。

「ミツキさん……」

ミズハはその涙を見て何を感じたのだろう。

ミツキが何故涙を流したのか。

そしてあの台詞……。いったい何が隠されているんだ？

「みんな」

静寂を破ったのはリリイだった。

「しばらくミツキとの接触はできるだけ避けるぞ」

「え……なんで？なんでですか！？」

「こいつがスパイかもしれないからだ」

「そんな……そんなわけじゃないですか！だって、だってミツキさんは……」

「私とて好きでこんなこと言っているわけではない……ッ！だがさっきの台詞は完全に、こいつと勇者の間になにかしらの関係があったことを示してる……」

「それは……」

「ミズハは納得できないようだがリリイの言っている事は確かだ。その関係がいったい何を意味しているのか、別に唯の知り合いというだけかもしれないし、それだけでスパイと決めるのは早いと思うが、事がハッキリとするまではリリイの言うとおりにしたほうがいいだろう。もしあいつが内側から俺達を潰すつもりなら、情報はなるべく与えない方がいい」

「そんな……」

「ミズハ、私はここでハッキリさせたいんだ。ただでさえ謎の多いやつだぞ？一緒に旅をするんだ、せめて背中を預けても平気な男な

のかどうか、確かめたい」

「……わかりました」

いつになく真剣なリリイの眼差しにミズハも渋々折れた。

……ミツキ。

俺はお前を頼りにしてもいいのか？

いや、それもここでハッキリさせてやる。

お前が、「俺達」にとって味方なのか、敵なのか……

俺の方が、よっぽどスパイじゃねえか。

すまない。でも、それがオレの役目だから……

「なあ、ミズハちゃん、いったいどうしちゃったんだよ」

ミツキさんがとても不安そうな顔で私に問いかけてくる。

そんな顔をしないで……

私は……

「そ、それは……」

リリイさんがこっちを見てる。

それはきつと何も言っな、ってことだと思う。

「な、なんでもないですよっ？ホラ、もうすぐアーガス村に着きま

すよ。レルムさ〜ん、何か手伝うことはありますか？」

なるべく自然に笑顔を作って、ミツキさんのもとから逃げるようにして部屋を出る。

ミツキさんは私の恩人なのに、とっても大切な人なのに……

こんな自分がどうしようもなく嫌いになりそうだった。

折角ミツキさんのおかげで自分が好きになれそうだったのに……

自然と涙が溢れてくる。

私は誰もいない部屋に入って、ドアのすぐ前にしゃがみ込んで、皆にバレないように、声を殺して泣いた。

ミツキさんは、どうしてあの人の事を知っているんだろう？

ミツキさん……

私はミツキさんのことなんか全然知らないんだ。

そう思ったらますます涙が止まらなくなった。

泣いちゃ、いけないのに……

辛いのは、ミツキさんの方なのに……

どのくらい泣いたんだろう。

涙が止まってないってことは、きっとそんなに時間はたっていないはず。

ふと、誰かが背中を擦っていることに気付いた。

え？

顔を上げた先にはミツキさんがいた。

優しい笑顔で、私の背中に手をまわしていた。

そんなミツキさんの優しさが、今は凄く心を痛めつけて……
私は声を抑えきれなくなっていた。

「ミツキさあん……うう…私は、私は…うわああん！」

「大丈夫、俺は大丈夫だから。泣かないで、ね？」

そう言ってミツキさんはそっと私を抱き寄せてくれた。
とつてもあつたかくて、何でミツキさんのことだつて知ってるのか
とか、どうしてここがわかったのかとか、そんな疑問はどこに行
ってしまった。

しばらくミツキさんに抱かれてみると、だんだん落ち着いてきた。
そして涙が止まった私はミツキさんとベッドに座つて、さっきの疑
問をぶつけてみた。

するとミツキさんは笑いながら袖をまくつた。
そこにはあの黒いブレスレットがあつた。

「あ、それ……」

私とミツキさんを繋ぐブレスレット。

初めて一緒に出かけたときに買ってくれた、私の宝物。

ミツキさんがそれを身につけていてくれたことが嬉しくて、また泣
きそうになってしまう。

「え？あれ？どどどどうしたの！？」

ビックリして戸惑っているミツキさん。

何だかそんな様子が可愛くて、自然と笑みがこぼれてしまう。

胸がドキドキと高鳴ってる。

ミツキさん嫌じゃないかな？

嫌われちゃったりしないかな？

でも、もうこのキモチは抑えきれない！

「ミツキさん」

「ん？なに？」

素直にこちらを向いてくれる。

頑張っで、私！

勇気を出して、想いを伝えるの！

「大好きっ！」

「うお！？」

そう言っで抱きついた私をしっかりと受け止めてくれた。

私の、大好きな人。

その笑顔が、すぐそこにある。

今はそれだけで、十分！

19回目『それぞれの想い……あ、リリイ以外ね、ホントごめん！』（後書き）

えー今回は他の仲間たち目線で話が進んでいます。

そういや、今までもリリイのだけ書いてないな……

ま、いつかw

そんな感じで、ミズハちゃん可愛いよミズハちゃん。

ホント恋する乙女だよ。うんうん。

でもこれ書いてるのが自分だと思つと……

うげえ、俺きめえ！

とまあ自分の作品を読み返すことほど辛いことはないってハナシでした。

……スイマセン。

ちよつと調子乗りました。

でもね、ピンチなのですよ。

この話さ、独り歩きしてんのよ。

こんなに進まないとは思わなかったしね。

おー怖怖！

つつーわけでさ、これから一体どうなっていくのやら……

なにはともあれ俺はミズハちゃんにゾッコンです。ええ。

ま、無駄話はこの辺にして、

ではまた次「ねえ、今回私の出番なかったんだけど」

うおい！

でてくんや！

折角終わりそうだったのに……

「私も出番ほしいー！ほーしいー！！」

おまつ、これ文字数足りないんでね？

「え……うん、じゃ、じゃあ次回は私メインってことで！」

メインになるは分かりませんが、たぶん出てきます。多分。せーの

「ではまた次回」

20回目『誤解を解くのも一苦労さ』(前書き)

ヤバイ……展開が読めねえ
WWW

20回目『誤解を解くのも一苦労さ』

みなさんお久です。

浅田弥月です。

そういえばさ、俺の名字ってローマ字で書くとa多いよね。
どうでもいいね、ハイ。

さて、前回までのあらすじですよ。

アメリカ軍に襲われてしまった勇、じゃなくて魔王一行！

普段通り一瞬で軍を蹴散らす魔王、カックイイ！
しかし、そんな余裕さえも吹き飛ばす奴が現れた。

そう、デ・ハビランド モスキートに乗った敵の將軍、ジョットで
あった！

ステルス機であるモスキートの存在を確認できなかった魔王一行は
トムキャットに大きなダメージを喰らってしまう。

本来こんな戦場のど真ん中で会うはずのない両軍の大將。

そして魔王はなぜか敵の將軍の名を知っていた……

その謎に疑問を抱く仲間たち。

その時ジョット將軍の先制で戦いの火蓋が切って落とされた！

激しい攻防、しかしてその実態はジョット將軍の優勢であった。
ジョット將軍が必殺の一撃を放とうとしたその瞬間、魔王は人が入
れ替わったかのように冷静になった。

その変化に気付き動揺を隠せないジヨット將軍。
そして魔王は一撃でジヨット將軍を遙か彼方へと吹き飛ばし、眠りに就いた……

「と、まあこんな感じ?」

「トモキヤット?猫さんですか?モスキートは蚊、ですね」

「あ、いや。そこは気にしないでいいから、うん」

ミズハちゃん是不思議そうに首をかしげている。

「うゝん、要約するとね、なんで俺が勇者と知り合いなのかってことだね?」

「あ、はい。そうですね。それでミツキさんはスパイなんじゃないかって……」

今のミズハちゃんのテンション推移は、ミズハちゃんに耳があつたならピンと張つてすぐに垂れたに違いない。と、そんな感じ。

スパイか……

でも話を聞く限りじゃそう思つのが普通だろう。

どうしような、これで「え?勇者来たの?覚えてないんだけど」なんて言おうものなら怪しさ120%でスパイ決定だよ。

「それで……どうなんですか?」

ミズハちゃんが恐る恐る聞いてきた。

あーどしよ。

困ったな……

「えと、俺とアイツの関係？そうだな、あいつも俺と同じ世界から来たらしいし、どこかであってたのかも知れないな。顔を見てぱつと名前が出て来た、とかさ。なんにせよ、俺には心当たりがないんだよな……」

テキトーな事を言っただけで誤魔化す。

顔なんて覚えてないし、今はミズハちゃんの話をもとめた上での推測にすぎない。

それでもミズハちゃんは真剣に聞いてくれた。

最初は納得できない部分もあったみたいだが、頑張っただけで消化してくれた。

そしてその10分後、ミズハちゃんの協力によりリリイにも納得してもらったことができた。

本当にこの子にはいつも救われてばかりだ。

レルムはと言うと、表面上はミズハちゃんやリリイと同様に元に戻った。

でも、やつはまだ何か勘ぐっているようだ。

そもそも俺と勇者の関係なんてどうでもいい、みたいなものっそいあっさり元に戻ったし。

それでもまああのギスギスした雰囲気は払拭できただけでも今はよししよう。

俺と勇者の関係か……

そのうち神サマに訊いてみるか。

普段なら絶対に思い至らなかったハズの考え方。

なぜあの神に尋ねようなどと思ったのか。

これ以上自分のせいでミズハちゃんを泣かせたくない、という思いが強かったなんて思わなかった。

自分の中のミズハちゃんが存在が、何よりも大きくなっていることに、気付いてなかったんだ。

20回目『誤解を解くのも一苦労さ』（後書き）

H A H A H A

作者の言い訳からstartのあとがきです。

更新遅えんだよ、このドカスが！

という声にお応えして。

だって年度末・始クソ忙しかったんだもん！

休み中もガッコー呼び出されたもん！

とまあそんな感じ。

まだ生徒会の方の仕事も落ち着かなくてこんなに短いんですよ、ええ。

さて、いろいろ愚痴ってきましたけども、余震しつこいね、うん。

こんなんじや復興も進まねえってハナシ。

でも、あきらめず頑張りましょう！

我々の心の奥底にはまだ武士の魂が眠っているのです！

ではまた次「ウソツキ……」

え？

「今回も私の出番なかった！」

あ、うん……

「どーいうこと!？」

いや、そこまで書く時間が……

「ウソツキ……」

でも次回出るよう複線張つといたじゃん！

「絶対だね？」

お、おう

「ん、まあいいや」

よし、それじゃ

「「では、また次回」」

21回目『神様の出番、到来』（前書き）

すみません……

いや、詳しくはあとがきにて……

21回目『神様の出番、到来』

ん、あ……れ？

どこだ？ここ。

「君の夢の中だよ」

んお！？

その声は……出たな！

「うわっ！ひっどーい。折角ご要望にお応えして出て来たのに」

え？ご要望？何それ、ついにボケたか？

「ボケるような歳じゃないし！あれだよ、君と勇者のカンケー性についてさ」

あゝ、そう言えばそんなことを聞こうと思ってた気がする……あれ？でもそれともうだいぶ前な気がするんだが……

「アハ！気のせいだよ！だってまだアーガス村着いてないじゃん！」

え？そうだった？

だめだ、あんま覚えてねえや

「夢の中だからね」

んで？

結局なんなの？

「そうそ、まあハッキリとは言えないんだけど、君の前世がチヨイとね」

なに！？スゲー気になるんだけど！

「まあ、そのうち思い出すと思うよ。それと勘違いしないで、勇者は悪い人じゃないから。ちょっと勘違いしてるだけだから」

ん？なんであいつの肩もつんだよ？

「君達が喧嘩してるの見るのはツライんだよ」

？？？ようわからんな。ってか喧嘩じゃねえし。

「それに、彼の勘違いは彼自身の思いじゃない。そこには、きっと君、あ、前世じゃなくて今の君ね。君自身の過去も絡んでくるから避けては、通れないよ？」

おい、俺の過去ってまさか……アイツが絡んでるのか？

「それは言えないな。それじゃあもうすぐ朝だから。まっただね」

おい！ちょ、待っ……

行っちまったか。

それにしても、俺の過去か……決着、つけなきゃな。
でも今は、なんか眠く……なっ……

「うりゃ！ミツキ！起きるのだ！アーガス村だぞ！」

いきなり闇の中から俺の腹にもものすごい衝撃が……

「ホラ、何をしているのだ！早く起きろ！」

負けない、俺は負けないぞオオオ！！

「ミツキさん、勝負じゃないですから、起きて下さい」

「はい！って俺今声出てた？」

「はい、思いつき」

ミズハちゃんが笑顔で返してくれる。なんで俺はこの娘に対してこ
うも弱いんだろうな？

……とその時足元からものすごい殺気を感じた。
恐る恐る足元をみると、そこには頭を擦りながら涙目でこつちを睨
んでるリリイの姿があった。

「……どした？」

その一言が間違いだった。

リリイは顔を真っ赤にして、小刻みにプルプルと震えていた。

「……」

「み？」

「ミツキのバカーーーー」

「うお!?!」

顔の横をものすごい勢いで火の弾が飛んでいく。

……シャレにならんよオイ。

「落ち着け!なにがあつた!ってか魔法を使うんじゃない!」

……ミズハちゃんの仲裁のおかげで何とかその場はおさまったが、
リリィはその日一度も口をきいてくれませんでした。

21 回目『神様の出番、到来』（後書き）

どうもリユカです。

だいぶ久しぶりですね、ええ。

いったい何人の人がこの小説はオワタと思っていたことでしょう。続いていたのですよ。

ビックリですね。

今後も更新がいつになるかは分かりませんが、ゆっくりバリバリ頑張っ
張っ
ていこうと思います。

そして折角出してあげたのに微妙な働きしか見せない神サマ。

「うつさい！てかしっ
かり働きましたよ！どれだけ意味深な会話を
してきたと思っ
てんのよ」

まあ、まだアーガス村にすらたどり着いてないんで、この小説は終
わらないんじゃないでしょうか。

あ、そうそ佐島勤先生凄
いよね。

憧れですよ、ええ。

この小説読んでる編集さんいたら声かけて下さい。

喜んで書きます
んで。

×切守りますからあああ！

「うおい！私との絡みはどうした！」

ではまた次回！

22回目『やっと、やっとミジュラン到着……。夢じゃないよね？ほった捕っ

あ、全話編集しました。

基本ストーリーは変わってませんが名称や設定がちらちら変わって
るので、一度読み直してからこの話を読むことをお勧めします。

22回目『やっと、やっとミジユラン到着……。夢じゃないよね？ほった捕っ

「なんだ貴様、人間か？」

門番に止められる。

「ああ、アルマーニユから来た。話は村長に王からいつているハズだが？」

「たしかに。それでは危険物や隠者がその荷物に紛れていないことを確認しだい、村に入ってかまわん」

兵士たちが数人馬車に乗り込み、チェックをする。

ほどなくして俺達は解放され、村へと足を踏み入れた。

「わあ……獣人族の方がいっぱい……」

ミズハちゃんが物珍しそうに見ていた。

しかし、ミズハちゃんの気持ちもわかる。

獣人族が一度に此処まで集まっているというのも面白い。

犬タイプから猫、鳥、ハリネズミにいたるまで。さまざまな奴がいた。

「あ、ちよつとそこの兄ちゃん」

俺は比較的温和そうなゴールデンレトリバーの青年に話しかけた。

「あのさ、馬車預かってくれる宿屋とかない？あと村長の家も教えてほしいんだけど」

話しかけると、青年はすこし眉をひそめたが、親切に対応してくれた。

「それなら、家に来るといい。馬小屋もあるし、何よりこの村一番の宿だからな。荷物を降ろした後、村長の家まで案内してやるよ」

「そうか。すまないな、助かるよ」

「なに、俺も宿屋の息子だからな。商売しないと」

なんともなしに笑いあう。

彼はソラノと言うらしい。

彼の両親が経営している宿は小奇麗で、広さもそこそこあるのに安いという、素晴らしい宿だった。

俺が先陣を切って中に入ると、ソラノの親御さんは一瞬怪訝な顔をしたが、後ろからついてきた息子を見て事情を察したのだろう。

「すいません」と丁寧に謝ってくれました。

彼曰く、この村の住人にはもう俺の話は伝わってるから、最初は訝しげに見られるかもしれないが、仲間といれば皆大体わかってくれるとのこと。

この村に来て最初に話しかけたのが彼でよかった。

いつも通りふたチームに分かれて部屋をとる。

荷物を置いたらフロントに声をかけてくれ、とソラノは言い残し、馬車の世話へ向かった。

「いや、いい宿とれてよかったな」

「ああ、このベッドもよさそうだな。さて、試すか……」

そう言っレルムは夢の世界へと旅立とうとする。

「いやいや、すぐ村長のところから。寝てる暇ないから」

「チツ、そんなもの、お前一人で言ってくればいいだろう」

「そういつわけにもいかないの！」

俺はなおも粘り続けるレルムを引きずり、フロントへ向かう。

ミズハちゃん達はまだのようだったので、椅子に腰かけて待つ。

するとソラノのお袋さんがやってきた。

「本日はうちの宿をご利用いただき誠にありがとうございます」

丁寧にお辞儀をするお袋さんは、日本旅館の女将に見えた。

いや、日本旅館なんて大層なところ行ったことねえけど。

「いえ、俺達もこない宿に泊まれてラッキーだなんて言っただんですよ。な、レル……」

「zzzz」

おい！どんだけ眠いんだよー！
どうすんだこれ……

「あ、あのこのように仲間もすっかりくつろいでますし……。いや、くつろぎすぎですよ、すいません。ロビーでこんな。おい、レルム、起きろって！」

俺が謝ると、お袋さんはにこやかに赦してくれた。

「いえ、いいんですよ。もう二人の女の子が来るまで寝かせてあげて下さい」

「ほんとに、すいません」

「いえ、それではごゆっくり」

そう言い残して

お袋さんはフロントの奥へと姿を消した。

程なくして、ミズハちゃんたちがやってくる。

「すいません、遅くなっちゃってしまっ」

「ああ、べつにいいよ。レルムなんか寝ちゃってるし……。おい、起きろレルム」

「ん、ああ」

「それで？村長のところに行くのだろう？」

「ああ、ソラノを呼ばなくちゃ」

フロントに行くと、馬小屋から帰ってきたソラノが待っていてくれた。

「準備はいいね？じゃあ、行こうか」

「うむ、御苦労であつた。実は明後日、我々はローマディウムの一
角を攻めるつもりなのだ。ついてはミツキ殿御一行にも作戦に参加
していただきたい」

村長の家に行くと、いきなり作戦への参加を頼まれた。

「ええ、もちろんです。そのために来たようなものですから。それ
で、作戦とはどのようなものですか？」

村長によると、数ヶ月前に侵略されたノーランドという小国を取り
返すとのこと。

以前はそこがミジュランの中心地であつたらしい。

さらにそこを取り返せば街道の確保もできるため、アルマーニユ、
それからミジュランの西にあるトンセムという国とも行き来できる
ようになるとのこと。

作戦内容は、まず数部隊で街に入り込み、騒ぎを起こしてその騒ぎ
で兵士が集まってきたところを城に攻め込む。そして領主の首をと

る。というものだった。

俺にはこの作戦が最良の策なのかどうかは分からないが、今は口出しをできるほどの軍事経験もない。

俺は城に突入する舞台へと配属された。

「いきなりですまぬのう。今日、明日はゆっくり休んで、装備等を整える時間にあててくれ」

「はい」

そうして俺達は村長の家を後にした。

村長の家を出ると、ソラノが何を話してたんだ？と聞いてきた。村長の命令で彼は外で待機していたのだ。

「今度の作戦はしってるか？それに俺達も参加することになった」

「マジ！？それ俺も出るんだよ！初陣なんだ。母さんたちにいい報告ができるよう頑張るんだ」

「そう言えば、俺も軍事作戦に参加するのははじめてだな」

「へえ、じゃあ一緒に頑張ろうぜ！」

「ああ」

そう言ったソラノの笑顔はとてつもなく眩しかった。

翌日、俺達は村長に呼び出された。

なんでも、作戦に参加する兵士たちとの顔合わせ、だそうだ。

広場に集まったのはざっと千人ほど。

過去の偵察でわかったノーランドに常駐している人間兵は800人ほど。

まず第5第8部隊が誘導に回るそうだ。

そして俺達を含む残り部隊が城に乗り込む、と。

「ミツキ、お前さんからなにかあるか？」

自己紹介が終わり、作戦内容の確認が終わって、村長に話を振られた。

とはいっても俺軍事に関しては初心者なんですけど。

「そう、ですね。まず、誘導部隊が一番命に危険があると思われる。少しでも死傷者を減らすため、彼らには俺の魔術で人間に変装してもらいたいと思います。同じ種族だと思わせれば、向こうもそう簡単に殺せはしないでしょうし……。ただ、皆さんもやりすぎると感づかれる可能性がありますので、気を付けてください。突入部隊は、僕と共にハイド——姿を隠す魔法を使って、城内部に侵入します。ただ、ハイド出来る人数には限りがありますので、他の部隊は門の前に隠れながら待機、潜入後に僕らが門を開くので、それを合図に正面から突っ込んでください。あ、ハイド中に攻撃したりす

ると、呪文の効果が消えてしまうので、そこは注意してください。
村長、こんな感じでいいですか？」

俺がテキパキと指示を出したのが意外だったのか、村長をはじめ、
兵士の皆さん、ミズハちゃん達までビックリしている。
なぜ軍事経験のない俺にこんな指示ができるのかって？

軍事経験はなくても、我が祖国にはシュミレーションゲームという
ものがあるのだよ。

「あ、ああ。完璧だと思うぞ、うん」

「よかった。ではそれで行きましょう。みなさん、明後日はよろし
くお願いします」

しかし新入りの俺がこんな発言をすれば気に食わない奴も出てくる
わけで……

「気に入くわねエなあ！新入りのくせに俺達に命令しやがって！大体
魔王が来るっつーから来てみりやただのガキじゃねえか。おい、小
僧。戦争は遊びじゃねえんだ。帰りな」

分かってたよ。分かってはいたけれども頭にくるものは頭に来るん
だ。

つかこんなM o b全開の奴って現実にもいるんだね。

「喚くなよ」

俺は指打ちをし、炎を男の顔すれすれに飛ばす。
大佐の技やっぱりかけえな。

「んなっ」

「今度の作戦、俺に付いてきたいと思う奴だけでかまわない。文句があるなら、明日は来るな。無駄な死人が増えるだけだ」

皆が恐怖で凍りついている間に、俺は広場を後にした。

その日の夕食は、いつの間にかミズハちゃんとリリイによるミツキくんを褒め称える会になっていた。

「いやあ、あのときのミツキさんすごいカッコ良かったです！もう私、一生ついて行きますって叫んじやいそうでした！」

「たしかに、あれはよかったな。あの男の恐怖におびえる顔は見もなかった。お前も魔王が板に付いてきたな、ん？」

なんか、恥ずかしいな！

うっ、レルムそんな目で見るなって……

その時、酒場のドアが勢い良く開いた。

見ると、肩を上下させたソラノが立っている。

どうしたと声をかけようとしたら、声を出すより早く俺達の席まで走ってきた。

「ミツキ！……はあ、お前、すごいんだな！あんな……はあ、すごい作戦、思いつくなんて。ホントに、今度のが初陣なのか？はあ、

「はあ、それに、スペルなしの呪文も、ふう、クールだったぜ！」

「おう、おう。まあまず落ち着いて。これを飲め」

「ん、悪いな」

俺がコーラを差し出すと、ソラノは一気に飲み干した。
……かなり大きなジョッキだったのだが。

「なんだこれ？ シュワシュワしてて美味しいな」

「ああ、俺の好物だよ。コーラってんだ」

「へえ。それより……」

そのあとはソラノの質問攻撃だった。

あの純粋な瞳で聞かれると邪剣にも出来ず……

魔王っぽくないな、俺。

まあそんな魔王になりたいわけじゃないけど。

目の前には千人もの兵士。その中には昨日の奴もしっかり入っている。

俺が、この軍の指揮をとる。

緊張するけど、もう後には引き下がれない。

「さて、皆集まったかな？ それじゃ、始めようか」

こうして俺とソラノの初陣が始まった。

22回目『やっと、やっとミジュラン到着……。夢じゃないよね？ほった捕っ

久しぶりの更新なのでかなり長いです。

みなさん、すみません。

いったい何度この作者は復活したといいそれきり現れなかったことか……

なので今回はあえて復活したといいません！

この話の更新は不定期です！

次回があつたらそれは激しいものになるでしょう。

早いとこミツキ君に杖をあげなきゃ……

ではまた次回！

23回目『初陣、それはかくも危険な通過儀礼』

第5第8部隊と別れてから10分ほどたった。彼らは今人間に扮して酒場で待機している。

俺とソラノは最初に潜入する第2部隊へ配属されていた。ちなみに俺以外のメンバーはお留守番である。危ないからね。

「よし、じゃあ第2部隊は俺に付いてきて。それ以外はなるべく門の近くに隠れていてくれ」

「はいっ！」

俺達第2部隊の8人は兵士用出入り口の前に隠れる。

「いいか、今から誘導部隊に動いてもらう。兵士が此処からたくさん出てくるが、攻撃はするな。ドアが開いたら出てくる者とぶつからないように中に入ってくれ。そのあと門を開けて、暴れるぞ。パトローナス！」

第5第8部隊に守護霊を送る。

程なくして、彼らの誘導が始まった。

案の定兵士の出動にはこのドアが使われ、俺達はまんまと侵入に成功した。

「さて、ハイドを解くぞ。ただ、まだ城内に残っている兵士もいるはずだから気をつけてくれ。さあ、門に向かうか」

「はいっ！」

警戒しながら城内を進むも、敵兵は一人もいなかった。
おかしいな……

いくらなんでも少なすぎやしないか？
何か罠が……？

「いやあ、楽勝だねえ」

ソラノがまるでそこらへんのコンビニにでも行くような軽さでズンズン進んでいく。

「待てっ！何かおかしい……。此処からはさらに警戒していく」

俺が行ったその瞬間だった。先に進んでいたソラノが角を曲がろうとしたら、その先から何十人という兵士が突撃してきたのだった。
やっぱり、待ち伏せされてたかッ！

「下がれ、ソラノ！」

「いいや、俺だって武勲を上げるんだ！」

ソラノが下がる気配はない。
アイツ、初陣の興奮で冷静さを失ってやがる……

「おい、行くぞ！」

仕方なく皆でソラノのもとに向かう。

敵も丁度やってきたところだ。

「じゃあねえ、いつちょやったるかぁ！」

通路のあちこちで剣の打ち合いが始まる。だがこちらが10人なのに対し相手は、40人ほど。

圧倒的に不利なわけで、俺が30人ほどを請け負うことになる。

アイオニオン・ヘタイロイ
「王の軍勢！」

俺を中心とした光が、敵兵30人ほどを包み込む。

そこにあつた風景は、桶狭間を彷彿とさせる。先ほどまでいた城内の面影は全くない。

そして、俺の後ろには数多の武士たち。

かつてゲームで使ったキャラクターたちだ。

「来たか、テメえら！いくぜ！」

『うおおおお！』

『Ok, Let's party! Yeah!』

……一人変な独眼竜が混ざっていたが。

さて、王の軍勢発動により一気に形勢逆転だ。

残された奴らも大体おんなじ数だったから、まあ大丈夫だろ。

この戦は、数十秒で片がついた。

まあ伝説級の將軍ぞろいだから弱い者虐めと言われればそれまでだ

が……

かくして仲間に労いと感謝の言葉を掛け、結界を解くと、他も片付いていた。

ただ、何か違和感が……

「あ、ミツキ殿！ソラノが！」

そう、違和感とは倒れている兵士の中にソラノが混ざっていたのだ。急いで駆け寄ると、腹に深々と剣が刺さっていた。

「ご、めん……俺が飛び出したばかりに……ゴフッ」

内臓にもダメージは行きとどいているようで、吐血が止まらない。

「ほんとだよ、バカ野郎！つたく、なにしてんだよ！」

俺はソラノの腹に手を押し当てる。

「俺が呪文を唱えるのと同時に剣を抜いてくれ。いくぞーヴァルネラ・サネントウル」

剣を引き抜いた瞬間血が噴き出し、ソラノが苦痛に顔をゆがめる。間に合うか……？

ハッキリ言って一か八かの賭けだった。

本来この呪文が使われたのは致命傷にはなっていない場面だったからだ。

そう言えば、この世界で蘇生魔法は使えるのか？

……なるべく、使わなきゃいけない場面には遭遇したくないな。

「持ち直せ……ッ！ソラノ！親御さんに話してやるんじゃないのかよ！」

徐々に血が傷に吸い込まれていき、傷口が消えていく。

「よかった、間にあったか……」

おそらく、あと少し剣を抜くタイミングが早かったら失敗していただろう。

本当によかった。

「ゴメン、次からは気をつけるよ」

「ああ、そうしてくれ」

ソラノは本当にばつの悪そうな顔をしていた。

「ミツキ殿」

「ん？」

「ソラノは俺をかばって刺されたんです。角にまだ隠れている奴がいて……」

「そうか、ソラノいい土産話ができたじゃないか」

俺が笑いかけると、ソラノはうつむいて赤くなっていた。

「さて、急がないと。誘導も持たないぞ！」

「おお！」

結構な一大事があったが、外の連中は何も知らない。
早くしないと勝手に突っ込んできかねない。

俺達は門を開けに行くべく、走り出した。

23回目『初陣、それはかくも危険な通過儀礼』（後書き）

今回は急いだったので少し短めです。

人によつてはこんな薄っぺらい戦闘シーンでいいのか？という方もいるかと思いますが、ご了承ください。

大人数での戦闘シーンは苦手です、ええ。もうちょっとうまく書ければいいけどな。

次はこの作戦の完結まで行く予定なので、結構長くなりそうです。ではまた次回！

24回目『ノールランド戦役』(前書き)

一段落付きます。ええ。

24回目『ノーランド戦役』

どうやら誘導はかなり派手にやっているらしい。
あれ以来一度もエンカウントしていない。

今のところ死者もでていなし。

他部隊もそうであればいいのだが……

「見えたぞ、ミツキ！」

ソラノの声で我に帰る。

眼前には巨大な門が。

「よし、開閉するための仕組みが何処かにあるはずだ！探してくれ
！」

大体こういった門は滑車であつたり、ハンドルを使った歯車式のは
ず。

しかし、俺の予想とは裏腹にいくら探してもそれらしきものは見つ
からない。

「おかしいな……」

探し始めて5分ほど経つただろうか？

そろそろ片を付けないと誘導部隊が不味い。
そのときだった。

「ミツキ！これじゃないのか？」

ソラノが指差した先には何かを差し込むのであろう穴があった。
その先には歯車が。

「これだ！いいぞソラノ」

「でもこれ、ここに差すレバーがないと……」

「まあ見てろって」

ソラノの言葉を遮って穴に合う形のレバーを作る。
どうやって？錬金術さ。

「おお……。ん？最初っからそれで門開けられなかったのか？」

「……何も聞こえないよ？」

さあ、あとは回すだけだ！
軽ッ！

ゴゴゴ……

「よし、前部隊突入してくれ！」

『おお！』

よし、これで第一段階完了だな。

『こつちだ！敵が侵入してきたぞー！』

チッ、さすがに残ってる兵もいるか……

「こい、ソラノ！一気に叩くぞ！」

「あ、うん！」

俺はソラノを引き連れ戦線を離脱し、一気に頭を叩くべく城の奥へと向かう。

「ここか……行くぞ？」

ソラノがゆつくりと頷く。

一気に扉を開け、中を確認する。

そこはまるで政治家の部屋のように整頓されていた。いや、政治家の部屋なんか見たことないけど……

「ほう、ここまで来るか、蠅が」

背を向けた椅子の向こうから声がする。

その椅子はゆつくりと回転し、声の主が姿を現す。

「お前がここの領主か？」

俺達の標的はいかにもって感じのキモイ禿げ親父だった。見てるだけでイライラしてくる。

「いかにも。吾輩がこのノーランド現領主、カマル、ブツ！」

なんかイライラするからアイスメークでぶん殴っちまった。

「貴様……！この私を侮辱したな！」

「うつせえなあ。お前の名前とか興味ねえンだよ！引つこんでろハゲ！」

「んな……吾輩が一番気にしていることを……」

そして決着はついた。

俺のハゲ宣言によって心が砕かれたらしいカスは放心状態となっている。

「なんだ、こりゃ……？まあ、いいか。ソラノ、これで縛つといて」

「わ、分かった。しかしこんな奴に城を攻め落とされてたなんて……」

俺は城の窓を開け、誘導部隊、突撃部隊がそれぞれ敵兵と激突しているところを眺める。

「さて、終わらせるかな……。ソノーラス！あ、ああー聞こえるか、諸君！」

呪文を唱えると、俺の声はまるでマイクを通したように街中に響き渡る。

いきなりの出来事にビックリしたのだろう。剣の打ち合いやら、魔

法がぶつ放される音が止む。

「諸君ら人間軍の領主、あー……名前は分かんが、この禿げ親父は我らが打ち取った！無駄な血は流したくない。人間の諸君は今すぐ降伏し、城門広場へ集まりたまえ！一般人も含めてだ！分かったら20分以内に来るように！ごまかしても分かるからな！……ふう」

呪文を解除する。

窓の外からは仲間たちの歓声が聞こえる。

「ん〜！んん〜」

ご丁寧にさるぐつつわまでされたおっさんがソラノに担がれている。

「コイツ、どうするの？」

「あーうん。こつから先の事は要分からんから、第1部隊の隊長に聞いてくれ。さてと、俺らも行こつか」

「え、ああ」

こうして、俺とソラノの初陣は成功に終わった。

24回目『ノーランド戦役』（後書き）

なんかすんません。

マジすんません。

まさかこんなテキトーな感じになるとは……

次から頑張りマスので今回はこんな感じで勘弁して下さい。

お願い許してヒヤシンス

ではまた次回！

25回目『おうちに帰るまでが戦いです』

「しっかしまあ、拍子抜けだったな」

「ミツキが規格外なんだよ」

「ほめてるのか？ それ」

「……たぶん」

ソラノと喋りながら隊の戦鬪を歩く。

「さーてと、みんなお疲れさん！ 俺は帰って寝る。後はよろしくな、ソラノ」

「え、でもまだ村まで30分ぐらいかかるぞ？」

突然離脱宣言をした俺の言葉にソラノは首を傾げる。
その疑問にニヤリ笑いを返す。

「フッフッフ、俺にはそんなこと関係ないのだよ。んじゃ」

そう言い残し宿へレポート。
そろそろ慣れてほしいのだが、レルムがとていいリアクションで迎えてくれる。

「たっだいま〜」

「ミ、ミツキ……心臓に悪いからやめてくれよ」

「あん？ 見られちゃまずいことでもしてたのか？」

冗談半分で聞いたのだが、レルムの反応は普通じゃなかった。

「べ、別になんでも、ない」

コップを取ろうとしたのだろうが、手が震えて倒してしまった。
慌てて傍に合ったタオルで拭いているが……

「それはタオルじゃなくて毛布だ。落ち着け」

「あ……す、すまん」

「どうした？ らしくもない」

するとレルムは俯いて黙り込んでしまった。
嫌な沈黙。

「……いつまでも隠し通せるわけじゃないか。ミツキ、今回のことが落ち着いたら話したいことがある」

沈黙を破ったのはレルムだった。

ただ、あまり楽しい話ではなさそうだな。

見たことないぐらいの真剣なレルムの表情は、ことの重要さを物語っていた。

「わかった」

「それで？ 戦の方はどうだった？」

「あ？ ああ、拍子抜けだったよ。結局クソ弱いハゲが黒幕だった」
雰囲気が悪くならないようにレルムなりに気を使ってくれたのだから、そこまで級に方向転換されると逆に戸惑う。

「ふ、そうか。じゃあ、リリィ達を誘って晩飯でも食べに行こう。
ミズハなんかお前が行ってからずっと心配そうにしてたからな」

「ん、そうだな」

25回目『おうちに帰るまでが戦いです』（後書き）

「……ねえ、なにあれ？」

と、申しますと？

「前回と前々回よ」

ああ……

あれに関してはホント申し訳ない。

「戦いがあんなつまらないのでいいと思ってるワケ？」

ぐ……

「だいたいソラノ君死にかけたんでしょ？もうちょっと引つ張りなさいよ」

うぐ……

「この小説において戦いのシーンで読者を湧かせられないでどこで読者を湧かせるつもり！？」

うぐう……

だってだって！

最初ももっと面白くて、緊迫したシーンになるはずだったんだけど、書いてるうちに俺自身展開をどうしようか分かんなくなっちゃって

……

「言い訳はいらんのだよ！」

うお！？ミツキくん！？

「わたしが召喚しました」

ちよ、ダメだよ神サマ、それはマズいって。

「うるせえ！それより俺の活躍シーンがないだろうがぁ！もっとこ
う、強敵現る！見たいな？そういう展開がほしいんだよ！この前の
勇者対決だって俺が知らないうちに終わってんじゃねえか！大体な
んだお前は！作者として——」

（4時間後）

そんなに言わなくなっちゃって……

「うるさい！」

「うわーん、もう嫌だー」

「それではまた次回」
「」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6349p/>

魔王《オレ》が勇者で勇者が魔王！？

2011年9月17日17時39分発行